
りんぐ2 ～都伝倶楽部～

伽藍堂その弐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんぐ〜都伝倶楽部〜

【Nコード】

N9513U

【作者名】

伽藍堂その式

【あらすじ】

「りんぐ」の続編。

相変わらずホラーなのにホラー要素皆無の都市伝説達のお話。

都伝倶楽部活動記録その壱 「ボントン飴を持って歩くやつなどそうはいない」

りんぐの続編です。相変わらず原作完全無視でまるで怖くなく、ほとんどオリジナルに近い感じになってます。しょうもない話の連発ですが、少しでも楽しんでいただけたら幸いです。

都伝倶楽部活動記録その壱

「ボントアン飴を持って歩くやつなどそうはいない」

私は宙を舞っていた。

セミロングの黒髪を振り乱し、宙を舞う私に反転して見えていたのは

私にとっての地獄だった。

一月十二日、午後四時。国中市、石丸町。

一月も中旬に差し掛かり、雪の降らないこの町もいよいよ冷え込みが激しくなってきた。

そんな中、石丸町立高等学校の学ランに、学校指定の紺のマフラ

礼二郎の問いかけでその存在に気づいたらしい樹々は、聞かれた質問に答えようとして失敗した。

この童顔の少女こそが都伝倶楽部の開設者であり、靈感体質という特異な体質を持った礼二郎を勧誘した張本人である。

たいして知らない癖にカルト好きで、そっち方面の情報の知識は限りなく薄っぺらいものだが、素行調査や情報収集がずば抜けている。

もとは礼二郎の友人の友人で、同じクラスの知り合い程度の関係性だったが、去年から今年にかけての冬休み中にあつた貞子襲来事件をかわきりに、よく絡むようになった。

そんな樹々が笑ってばかりでうまくしゃべれないため、まるで要領を得ない礼二郎は、彼女の指をさす方向を見て怪訝な顔をした。

「おかえ……り。……レンチ君」

そこには、黒い腰まで届くロングヘアをポニーテールにし、まるで死んだかのような　　もとい、実際に死んでいるのだが　　まあ、とにかく青白い顔をした女　　山村貞子が埃まみれで立っていた。

現在は埃まみれになっているが、それでも貞子は怨霊である。そして、その背景にはちよつとしたややこしい事情がある。

なぜそうなったのかはまるでわからないのだが、もともとあつた貞子という怨霊に、どういうわけか礼二郎の死んだ姉の魂が融合してしまっているようなのである。

普通怨霊であれば実体はないのだろうが、姉と融合した貞子は姉の死体にとり憑くことによつて実体を得ているようだった。（呪いのビデオから姉の死体にとり憑いたままどうやって登場したんだ？という疑問に関しては、おそらくテレポーテーションとか、なんかそんなことなんだろうと礼二郎は勝手に解釈している）

今はマンションで一人暮らしをしている礼二郎のところに貞子は居候という形で一緒に暮らしている。

姉でもあるということからなのか、礼二郎と貞子は出会ってまだ間もないにも関わらず、すこぶる仲が良い。

「ただいま。で、どうしたの？」

礼二郎が笑い続けている樹々を尻目に問いかけると、貞子は片言ながら棚の掃除をしている最中に誤って埃の積もった段ボールを落とし、頭からかぶってしまったのだと言った。

「…………。そんなに面白いことなの？」

貞子の埃まみれの状況を聞いて、半眼になりながら礼二郎は樹々に聞いた。

「確かに、そんな、風に、言われると、大したことないのかも
しれないけど、タイミングが絶妙で…………！」

そう言つて吹き出した樹々とはまだまだ付き合いは短い、彼女の笑いのセンスだけは今後も理解できないだろうと礼二郎はひそかに思うのであった。

「まあ、いいや。とりあえずはやく外で埃落としてきなよ」

礼二郎がそう言つと、貞子は頷いてベランダに通じる大きな窓から外に出て行つた。

「それで？笑いつばなしで全く進まなかったみたいだね？」

蜘蛛巣だらけの蛍光灯、すすけた壁、埃だらけの棚と床、ゴミに限りなく近いボロボロのダンボールが数個……。

磨き上げられたフローリングの廊下や玄関に比べ、リビングは長く使われていない感丸出しの廃墟のような状態だった。

それもそのはずで、ここはつい数日前までは礼二郎の友人の父親名義のただの空き家だったのだ。

何せ、このクラブはもともと樹々しかいなかった、本当に最近形づいたクラブであり、出来たきっかけは貞子で、礼二郎の姉の礼奈と貞子の背後関係の調査が大筋の目的である。

礼二郎はこのクラブに入った際、部室がないなら一人暮らしの自分のマンションを使つても構わないとなかなか太っ腹な提案（本当は学校帰りに部室によるのが面倒だと思つたため）をしたが、「二人以上ならば、部室がないと絵にならないでしょうが！」というわけのわからないことをぬかす樹々に振り回され、結果礼二郎の友人

であり樹々の友人でもある金持ちのボンボンの親がこの土地と建物の所有権を持っているのを知り、彼に無理を言ってここを使わせてもらうことを了承してもらった。

そんなわけで、三学期の始業式から、今まで長い間使われていなかったこの空き家を掃除し続けている。

おもに礼二郎が。

「それで？ちゃんと買ってきたの？頼んできたのは」

礼二郎の小言を綺麗にスルーした樹々は、礼二郎の持っているビニール袋を見ながら言った。

「コロッケパンだろ？」

礼二郎はそう言ってビニール袋を漁ると、コロッケパンを掴み出して樹々に放った。

「ありがとう」

樹々は簡潔に礼を言うと、それをぼろ段ボールの上に置かれていた学校指定のバックに仕舞った。

「しょぼい夕食だね」

「うっさいわね。今日は両親が仕事の研修でいないのよ」

樹々の両親は医療関係の仕事をしているらしく、よくよく家を空けているらしい。

「飲み物はよかったんだよね？」

「ええ、家にコーヒーあるから」

「そうなんだ」

「ええ」

「…………。そう言えば、君と僕の共通の友人であるあいつが、君はブラック派だと言ってたけど、ホントなの？」

「ホントよ」

「へえ、よく飲めるね、あんな苦いもの」

「何？宮沢君も共通の友人である彼同様甘党なわけ？」

「いや、別に甘いものが大好きというわけではないけどね、ケーキとかわりと食べる方だと思うよ」

「ふーん」

「何だよ？その『軟弱ねえ』とでもいったそんな顔は」

「別に。最近そーいうの流行ってのかなあと思って」

「流行ってる？」

「なんていうか、家庭的で女々しくて男らしくないって感じの男の子だよ」

「……………。さあ、どうだろう？考えたことないな」

「なら考えてみなさいよ。あなたと共通の友人である彼も、髪の毛あんなに逆立てて髭がつておきながら、いざというときは私の後ろで伸びてるって、正直考えられないとは思わない？」

「それって君と共通の友人であるあいつが貞子さんと初めて会った時のことを言ってるの？」

「何で知って……………ああ、貞子さんから聞いたのね」

「そうだよ。確かにあれはちよつと情けないね」

「でしょう？…でもあなた、人のこと言えるの？私はあなたも同類だと思っただけ」

「それこそ失礼な！僕はそこまで情けなくはないぞ。少なくとも幽霊を見ても失神なんてしないよ。見慣れてんだから」

「どうだか。とてもじゃないけど普段のぼんやり顔じゃ信ぴょう性はないわね」

「いいんだよ、普段はそれで。いざというときにキリリと締まるんだから」

「どうせ締まるならいつも締まってなさいよ」

「いざというとき締まるから男はかっこいいんだよ」

「…………ギヤップを作ってるつもりっていいたいわけ？それが姑息だつていうのよ。男なら俺についてこい！くらい言いなさいよ」

「古っ。今時そんな暑苦しい男はそうそういないんじゃない？」

「だから嘆かわしいって言ってるんだよ」

「…なるほどね。　今ので確信した。樹々さん、彼氏いないでしょ？」

「ちょっと待てコラ。あなたは私の話の何を聞いていたの？」

「あ、怒った。凶星なんだあ？」

「うっさい！死人に恋愛フラグ立てまくってる痛いあなたに言われたくないわ！」

礼二郎と樹々がリビング中央で雑談から口喧嘩に発展しそうになったとき、ベランダで丹念に埃を取り除いていた貞子が帰ってきた。

貞子は口論している二人には意を介さず、礼二郎の持っているビニール袋に手を伸ばす。

「あ。ホラ、貞子さん。好きなのを食べていいけど、帰ってからね。ここは埃っぽいから」

礼二郎が貞子に気づきビニール袋を渡すと、嬉しそうに頷いてそれを受け取った。

「結構な量だけどいつたい何買ったの？」

貞子が大事そうに抱えるビニール袋を見ながら樹々が言った。

「カレーパン、クリームパン、照り焼きサンド、ジャリパン、焼きそばパンとイチゴ牛乳とレモンティ」

「……あなたもその菓子パンが夕食なら私と大して変わらないじゃない」

「そうでもないよ。下手したら全部食べられちゃうからね、貞子さんに」

「あー、それはあるわね」

「でしょ？」

樹々は先日この二人と一緒にラーメン屋に言った時、貞子が豚骨ラーメン大盛りに餃子とチャーハンを食べるのを見て、自分の食欲がなくなったのを思い出した。

「見かけによらず大食いよね、この怨霊」

「確かに。余談だけど、今のところ大好物なのは豚キムチラーメンらしいよ？」

「……。何よ、ちょっと親近感が湧くじゃない」

「……。……。君も好きなんだね、あれ」

そうして、結局今日も雑談ばかりで何もはかどらないまま帰宅することになった。

午後十七時三十八分。

叔母が経営しているリバーサイドマンションについた礼二郎と貞子は、とりあえず早めの夕飯を食べ終え（結局買ってきた菓子パンのほとんどを貞子が食べた）だらだらとリビングのソファでテレビを観ていた。

「つまんないねー」

「本当に……あつた……呪いの……」

「そのくだりはもういいってば」

そんないつものお決まりな会話をしていると、礼二郎の携帯電話が鳴った。

「げ、あいつだ」

着信の表示には、彼と樹々の共通の友人である不知火英斗と表示されていた。

この人物が電話をかけてくるときというのは大抵ろくでもないことが多いため、自然と礼二郎の心も憂鬱になる。

それでも友人である以上はやはり出ないと失礼なので、彼は通話ボタンを押した。

『よう！今日も倶楽部活動に勤しんでいたようで！不定期参加のくせにえらく真面目だなあ？我が友、宮沢礼二郎！』

「……うるさい奴だね。そんなことどうだっていいだろ」

『あれあれえ？おやおやあ？愛しの呪いちゃんとの時間を邪魔されて不機嫌なのかな？声が明らかに剣呑だぜ』

「やかましい。この剣呑さは電話の相手が君だからだ」

憤然として返すと、友人、英斗は何かおかしいのかけけらと笑った。

この男、樹々と話すときは割と落ち着いた言動が目立つのに、こ
と相手が礼二郎だとかなり陽気になる。

そうなることの原因は、おそらく樹々のカルト好きを敬遠しての
ことだろうが。

「で、何の用だよ？」

『単刀直入だなあ、相変わらず』

「早くこの電話を終わらせたいからね」

『つれねーな、おい。ま、いいけど。で、ちよいと聞くけどな。お
前さあ、運転ができる知り合いはいねーか？』

「……運転？また随分と唐突だね」

『明日、土曜だろ？ちよつと隣町まで乗せてってほしいんだよ』

「……はあ？」

礼二郎の声に、ソファにいた貞子が振り返った。

礼二郎は何でもないよと手を振って携帯電話を持ちかえた。

「そんなもん、チャリで行けよ。それが面倒ならタクシーでもなん
でも使っていけばいいじゃん」

『自転車はしんどいし、出来るだけ金使いたくないんだよ。今ちよ
つと金欠気味だし』

「普段の金遣いの荒さが原因でしょ？自業自得だよ。てか冬休み、
あれだけ退魔師やらなんやらを雇っておいて『金欠気味』で済んで
ることがむしろ凄いよ」

『そのことについては悪かったって！勝手なことしたことについて
はちゃんと謝ったろ？なあ、頼むよ、なんとか都合できないか？ど
うしても車で行きたいんだ』

「その用事によるね。一体隣町に何の用があるんだよ？」

『それは決まってるんだろ？隣町には何があるか、お前も知ってるっ？』

「……。ああ、遊園地ね。……君、また複数の友達連れて遊園地行くの？」

『そうだ。今回はなんとダブルデートなんだぜえ？』

「何？君、ついに彼女ができたんだ」

『相変わらず疎いな、お前。まあ、出来たっていうか今アプローチかけてる途中でな。このデートが勝負なんだ。だからさ！俺を助けると思つて、な？』

「な？つて言われてもね」

『……。なんだよ？声に嫌味を感じるのは気のせいかな？』

「気のせいではない」

『頼むよ。みんなには車で拾って連れて行つてやるつて約束しちやつたんだから』

「知るかよ。そんな約束したんならそつちで何か準備してたんじゃないのか？」

『うちの叔父が運転手で送ってくれる手はずになっていたんだけど、どうも別件の用事で来れなくなつちゃつて』

「なるほどね。ならその事情に行くメンバーに言つて別の方法をとればいいじゃないか」

『それはそうなんだが……』

「何だよ？」

『かつこ悪いじゃん。今更用意できませんでしたつて言つのはよ』
ここで、礼二郎の呆れ具合は最高潮に達した。

「……。あのな。君の見栄に付き合うほどこつちも暇じゃないんだよ」

ぞんざいに言い放つと、英斗は泣きついてきた。

『お願いします！お前しかいないんだ！』

「……。はあああああ……。……わかつたよ。運転手を用意すればいいんだな」

礼二郎はそう言つてソファにいる貞子を見た。

貞子はバラエティの番組を観ながら時折肩を揺すつて笑っている。
『ホントか！ありがとうよおお！心の友よおお！車はこつちで用意するからよろしく頼む！』

耳元で英斗の大声が響き、礼二郎は顔をしかめた。

「まったく、君なら僕以外でも頼めるやつはいくらでもいるだろうに」

礼二郎が言つと、英斗は自嘲気味に言つた。

『他の奴に頼むと金がかかるんだよ』

ああ、なるほど。

彼の大勢いる友人が彼のお金目当てであることを思い出した礼二郎は、英斗の台詞に納得したように頷いた。

翌日。

午前九時三十分。

石丸町の隣町である花岡町へ向かう一台の白のワゴン車の中で、英斗は助手席にいる礼二郎に後部座席から詰め寄っていた。

「おいおいおいおいおいおいおいおいおいおい。聞いてね

「ーんだけど。聞いてねーんだけどね、礼二郎君」

「何が？」

「わかってんだろ？が！運転手だよ運転手！！何で」

いつも通りな礼二郎に、英斗はかなり動揺しながら、

「何で運転手が貞子なんだよ！」

英斗が指を指した運転席には貞子が座っており、意外にも危なげなく運転をこなしていた。

「心配はないよ。姉さんは失踪前に運転免許は取得しているから」

「そういう問題じゃねーよ！　いや、そこもちょっと引っかけたはいるけれども！」

礼二郎はキャンキャンと吠える英斗にうるさそうに耳をふさぐ素振りを見せながら、

「いいじゃん。他にいなかったんだから。ほら、ちゃんと座ってなよ。これからちゃんと今日来るメンバーの家を回って拾ったら、安全に君らを遊園地まで送ってあげるから」

にこやかに告げる礼二郎であったが、英斗の不安は余計に煽られるばかりだった。

しかし、彼のそんな不安をよそに、貞子は危なげなく運転をこなし（走行中、貞子の存在があまりにも不気味なため、車内では会話は弾むことはなかったが）無事に英斗ら四名を隣町の花岡町にある遊園地へと送り届けた。

「はい、運転御苦労さま」

「……………ありが……………」

さすがに一緒に遊園地についていくわけにはいかなかった礼二郎と貞子は、土曜日にしては閑散としている近くの公園のベンチでぼんやりと過ごしていた。

礼二郎が自販機で買ってきたコーンポタージュを飲みながら、貞子は礼二郎に聞いた。

「一緒に……………行かなくて……………よかったの？」

貞子の横に腰かけてホットのカフェオレをちびちびやっていた礼二

郎は、

「ダブルデートだよ？いたら邪魔なだけだよ」
と言って笑った。

「……なん……か……ごめん……なさい」

「いいよいいよ。貞子さんは気にしなくても。……ま、せっかく隣町まで来たんだし、この辺りブラブラしながら時間つぶそうよ」

「……うん」

そうして、午前中いっぱい貞子と取り留めのない雑談をした後、花岡町の中心まで足を延ばして、定食屋で昼飯をとり、そのまま二人で時間を潰し続けた。

午後五時。

遊園地入口受付に、前もって決めておいた帰宅時間に合わせてやってきた礼二郎と貞子は、受付入口に英斗しか立ってないのを見て首を傾げた。

「……よう。そっちは楽しかったようだな。デート」

「覇氣のない、呆けた顔で英斗は言った。」

「まあね。で、君、他の連中はどうしたのさ？」

英斗の茶々には特に反応しないで、礼二郎は質問した。

「は、はははは。それ、聞いちゃう？聞いちゃうんだ？」

何やら危なげな気配を漂わせながらせせら笑う英斗に、礼二郎と貞子は顔を見合わせた。

「何かあったの？」

「何かあったじゃねーよ！あの車内の空気感じなかったのかよ！？」

みんな貞子が怖くて自分で親呼んで帰っちゃったよ」

英斗が言うには、一緒に来たメンバーが車の移動中、ずっと貞子の雰囲気や怖がっており、帰りも彼女が運転する車で帰ると思うと気が重すぎると言って、それぞれが親を呼んで早々に帰ったそうなのである。

英斗の話を聞いた貞子は、礼二郎にどうだと言わんばかりに胸を張ると、満面の笑みを向けた。

「だーかーらー、なんでそんな自慢げなんだよ？」

貞子に笑みを向けられて、しょうがないと言わんばかりに苦笑する礼二郎。

「もう、ぜってーお前らには頼まねー」

二人のやりとりを見た英斗は、心底うんざりした顔を見ると車の方へ歩き出した。

その意気消沈した英斗の背中に、自慢げの表情を崩さない貞子とそれを苦笑しながらたしなめる礼二郎が続いた。

陽も沈み、仄暗くなっていく中、来る前より三人も少なくなった白いワゴン車は、ゆっくりと遊園地の駐車場を後にした。

貞子の運転する車の中で、英斗は完全に拗ねて後部座席のシートをふんだんに使って行儀悪くねっ転がっており、助手席の礼二郎は、

「もしもし。何？」

『 いやあ、ダブルデート もといトリプルデートはどうだったのかなと思って』

「…………。トリプルじゃないダブルだ。…………てか、君も案外野次馬だね」

樹々と電話していた。

『部活休んで行ったんだから、土産話の一つや二つはしてくれて当然でしょ？』

「参加は不定期でもいいって言った人が言う台詞なの？」

『いいや、土産話は部員の義務よ』

当たり前だと言わんばかりの樹々の発言に、礼二郎は眉間を押さえた。

「知らないよそんなことは」

『なら次会ったときに土産話よろしくつてことで』

「そういうのは僕らの共通の友人であるあいつに直接聞いてよ」

『それはもちろん聞くわよ。でも裏はあつた方がいいじゃない』

「別に一緒に行動したわけじゃないから裏なんぞ取れませんか？」

『またまたあ』

基本用事がないと電話は一切しない樹々なので、こうして電話してきているのも何か用事があるということなのだろうが、その用事を伝えるまでの無駄話がやたらに長い。

これは樹々と礼二郎の共通の友人である彼から聞いたので、礼二郎も知ってはいたが、ここ数日クラブを通して直面したことにより、結構面倒くさいことが判明した。

「とりあえず、そういうことは次会ったときに話すとして、電話の用件はなんなの？」

そして、こちらが切り出さないと話が進まないことも礼二郎はちゃんと共通の友人から聞いていた。

『あ、そうそう。あなたから今日は来れないって連絡があつたときに言いそびれてただけだ』

「ん？何？」

『一年くらい前から、花岡町には奇妙な噂が流れててさ』

「……はあ、それで？」

『うん、それがちょっと信じられないんだけど、「白のワゴン車で夕方走ると口裂け女に襲撃される」っていうかなり変わった噂でさ。事故った白ワゴン車が多発してるらしいわよ』

「……………」それは現在夕方と言われる時刻に白いワゴン車を走らせている、僕らに対する嫌がらせなの？」

樹々の話に、途端に半眼になった礼二郎は、視界の上の方に黒いものがチラリと入り、視線を上げた。

『確かに限りなくうそっぽい話なんだけど、隣町の最近の事故車、びつくりするぐらい白のワゴン車が多いのよ。貞子がいるくらいだから、案外この話も本当なのかと思って……ん？どうしたの？宮沢君』

急に返事をしなくなった礼二郎に、受話器越しに樹々がいぶかしんだ。

しかし、彼にはそれに答えるだけの精神的余裕がなかった。
なぜなら

ワゴン車の上から逆さまに覗き込むような形で、大きなマスクをつけた女が、フロントガラス越しにこちらを血走った眼で睨みつけていたからだ。

電話を持ったまま、逆さまにこちらを見下ろしているマスクの女と視線をがちりと合せてしまい、硬直してしまった礼二郎。

視界一杯に広がる禍々しいマスクの女の顔に、頭の血がぐんぐん引いて行くのを感じた礼二郎だったが、

「痛っ」

ものすごい恨みのこもった瞳でこちらを睨んでいたマスクの女が、

一瞬苦悶の表情でそう漏らしたのを聞いて、礼二郎は我に返った。そして慌てて視線を下げると、ワイパーが乾いたフロントガラスの上で動いていた。

「……………。貞子さん」

礼二郎が恐怖で流すのとは違う冷や汗を背中に感じながら、運転席を見ると、

「じゃ…………ま」

と呟きながら、貞子はフロントガラスを覆っているマスク女のセミロングの髪をワイパーで取り除こうと必死になっていた。

ワイパーが動く度に巻き込まれるセミロング。

その度に苦悶の表情をするマスク女。

そんな絵面が、礼二郎の硬直している中、約三分にわたって続いていた。

石丸町に続く山道に入ったところで、貞子はワゴン車を路肩に止めた。

「邪魔…………なんだ…………けど」

車を降りるなり、開口一番に車の屋根に寝そべっているマスク女にそう言った貞子は、怒った雰囲気を出すためか、少しほほを膨らませていた。

さすがに同類だけあって、貞子は全く物怖じした様子がない。

そんな貞子に、車を降りた礼二郎は自分がビビってしまった手前、自分自身に対する情けなさを痛感していた。

結局、自分も樹々の言った通り、臆病ものなんだろうか？
そんな疑問が彼の頭を支配していた。

マスクの女は、腕を組んで頬を膨らませている貞子やあごに手を

当てて自分は臆病なのかと自問している礼二郎には関心を示さず、ワイパーに絡まった髪の毛と悪戦苦闘していた。

そして、結局絡まったまま取れなかったので、マスクの女は一切の躊躇を見せずに髪をワイパーから引き千切った。

うわあ、痛そう。

と、胸中で思う礼二郎だったが、本人の表情はいたって無表情であった。

髪を強引に引き千切ったマスクの女は、ゆっくりとした動作でワゴン車の屋根から下りた。

恰好は女性物のトレンチコートに赤い袖の長いワンピースに赤のハイヒール。身長はハイヒールの分を差っ引いても百七十後半はありそうだ。

セミロングの黒髪はワイパーと風でぐしゃぐしゃになっていて、顔には大きなマスクをしていた。

「ちよつと、あんた、どーしてくれんのよ？髪ぐしゃぐしゃになっちゃったじゃない！」

マスクの女は、頬を膨らませて怒っている貞子をキツと睨みつけた。その第一声に礼二郎は思わずズッコケそうになったが、何となくそう来るような気がしていたので、なんとか踏み留まった。

「あなたが……あんなこと……してる……からで……しょう？」

「あたしにはあたしの事情があるのよ！好きでやってんじゃないんだから！」

「……そんな……こと……私は……知らない……わ」

「あたしの存在を認知したら、普通はすぐ止まるもんでしょ！？その辺弁えなさいよ、同類でしょ！」

「???……よく……わからな……い……けど……邪魔……だった……」

「………。ちつ。まあ、いいわ。白のワゴン車には乗ってたけど、どうやら違ったみたいだし。こうなった以上、あれやるしかないか」口論することが無駄だということに早々に気付いたマスクの女は、視線を貞子から礼二郎に移した。

「ねえ！そのあんた！」

いきなり声をかけられて、礼二郎は身構えた。

「な、何ですか？」

マスクの女は面倒くさそうにくしゃくしゃのセミロングに手櫛を入れながら、

「あたしって綺麗？」

「……………は？」

その問いかけがあまりにぞんざいで、かつ唐突だったため、礼二郎は答えに窮した。

「だから、あたしが綺麗かって聞いてんだよ。耳の遠いお爺ちゃんか、この野郎」

「え……………あ…その……………」

「あたし綺麗？」ってどこかで聞いたフレーズのような……………」

「……………あ……………」

礼二郎は思い出した。

「早く答えな！グズは嫌いだんだよ……！」

が、思い出したはいいが、答えを急ぐマスク女　口裂け女の勢いに押され、

「……………は、はい。……………き、きれいです……………」

礼二郎は思わず返事をしてしまった。

ま、まずい……！！

礼二郎は戦慄した。

口裂け女の有名すぎる問いかけに、一番してはいけない回答をしてしまった。

口裂け女はマスクの下でしてやったりな表情をとると、マスクに手をかけ、

「これで……………」

「まだ……………話……………終わって……………ない……………」

マスクを剥ぎとろうとした矢先に貞子に横やりを入れられ、口裂け女苛立たしげに貞子の方に向き直った。

「ちよつとちよつとちよつと！あんだ、空気読みなさいよ！今はあたしの見せ場じゃない！」

「そんなの……知らない……車の……視界を……遮っ……たり……レンチ……君に……ちよつかい……出したり……しない……で」

「ちょ、何よ、あんだ。あのもやしっ子を庇おうつての？同類でしょ？あたしら」

呆れて眉を顰める口裂け女。

貞子は礼二郎の前に立つと、腕を腰に当てて口裂け女を敵意むき出しで睨んだ。

「へえ。面白いじゃん。あたしとやろうつての？」

立ちふさがった貞子に、口裂け女は挑発的な口調でそう言うと、口を隠している白いマスクを剥ぎ取った。

そこには、耳まで真一文字に裂かれた口があり、口裂け女が笑うと奥歯かはつきりと見えた。

想像を超えたグロテスクさに、硬直する礼二郎。

その礼二郎の様子に口裂け女は内心ほくそ笑むと、次の瞬間襲いかかった。

瞬時に貞子との間合いが詰まる。

口裂け女の右手には、いつの間にか出刃包丁が握られている。

貞子さんが刺される！

そう思った瞬間、礼二郎の脳内で何かかスパークし、刹那、彼は貞子の襟首を引っ張って後ろに放ると、口裂け女のかざした出刃包丁の前に躍り出た。

口裂け女は礼二郎の行動に、むしろ好都合と言わんばかりの凄みのある表情で、出刃包丁を遠慮なく礼二郎へと突き出した。

バシユン！！

一瞬、口裂け女には何が起こったのか分からなかった。

確実に礼二郎の腹部を貫いたと思った出刃包丁は、彼に触れる瞬間に空気の弾けるような音と共に霧散した。

「 なっ！ど、どうなってるの？！ 」

驚愕する口裂け女を尻目に、礼二郎は放られて背後で尻もちをついている貞子に駆け寄った。

「 大丈夫？ 」

「 ……私 ……は …… 大丈夫 …… だけ …… ど …… むしろ …… レンヂ …… 君の …… ほうが …… 」

「 僕は大丈夫だよ。 やられてみてわかったけど 」

礼二郎が笑顔でそこまで言って振り返った時、口裂け女は真後ろに立っており、その右手には鎌を持っていた。

「 うらあ あああ ！ 」

渾身の力を込めて振り下ろした鎌は、確かに礼二郎の脳天に突き刺さるはずだったが、またしても触れる瞬間に霧散した。

「 なん、なんだよお？！ てめえは！ 」

口裂け女は、困惑した表情を礼二郎に向けながら後ずさりした。

「 どうやら僕は、本当に呪殺が効かないらしい 」

貞子の呪いが効かなかった時から、もしかしたらと常々思っていたことだったが、礼二郎は今回のことでついに確信した。

自分には一切呪殺が通用しない。

口裂け女の出刃包丁や鎌が霧散したのは、おそらく呪力で構成さ

れた殺害用の武器だからだろう。

「……呪殺が…通用しない…」

一步、また一步と後ずさりをしながら、口裂け女はまるで化け物でも見るような目つきで礼二郎を見ていた。

「何か……化け物に化け物扱いされるって、結構へこむなあ…」

口裂け女の尋常ではない警戒っぷりに、多感な十代の青少年である礼二郎は年相応にちよっぴり傷ついた。

「……あの……口裂け…さん……」

貞子はおもむろに立ち上がると、ちよっただけ落ち込んでいる礼二郎の肩にそつと手を添えながら、口裂け女に声をかけた。

「な……何よ」

すっかり戦意を引つ込めてしまった口裂け女は、居心地悪そうに聞き返した。

「……何…で……こんな…ことして……るんで…すか？」

「何で…って、復讐よ、復讐」

「………復讐？」

口裂け女の言葉に、貞子は聞き返し、落ち込んで頂垂れていた礼二郎も顔を上げた。

「そつよ、復讐よ」

口裂け女　本名、加島玲子には約一年前、二つ上の姉の幸子と二つ上の姉、智子がいた。

当時、その姉たちと玲子は仲が良く、よく一緒に出かけたりしていた。

一年前のその日も、玲子と二人の姉は一緒にショッピングに出かけていた。

そのショッピングの帰りに、玲子と二人の姉は交通事故にあった。信号無視をした白のワゴン車が突っ込んできて、横断歩道を渡る

うとしていた三人を轢き殺し、そのまま逃げたのだ。

姉二人は車の下敷きになり、玲子は跳ね上げられて宙を舞った。

跳ねられて体が宙を舞っている時、玲子が見たのは、姉二人が悲鳴を上げながら車の下敷きにされて轢き殺される瞬間であった。

その後、姉たちの死がしっかりと焼きつたまま地面にたたきつけられて、玲子も死んでしまったのだが、死んだ姉たちの靈魂が、彼女を現世へと蘇らせた。

自分たちを殺した白いワゴン車に乗った人物に、復讐をするために。

姉たちのおかげで、奇跡的に復活した玲子だったが、その容姿と身体能力は大きく変貌を遂げていた。

口は耳近くまで大きく裂け、その身体能力は常人をはるかに超えるものだった。

「そんなわけで、あたしは口裂け女になって、唯一の手がかりである白ワゴン車を片っ端から襲撃してるってわけ」

山道のと真ん中で昔話もあれなので、貞子はワゴン車の運転席、礼二郎は助手席、玲子には英斗が不貞腐れたまま寝入ってしまった後部座席に移動していた。

「なるほどね」

腕を組んだまま助手席で玲子の事情を聞いていた礼二郎は、短く呟いた。

「…………あの……口裂け…………さん」

黙って運転席で聞いていた貞子が、後部座席に振り返りながら口を

開いた。

「何よ？……もう別に何もしないわよ」

貞子にまだ警戒されていると思った玲子は、不貞腐れたようにそっぽを向いた。

「……そもそも普段は事故にまでわざとまでいって口裂け女の役割をしないように心掛けてきたのに、あんたらあたしを見ても動揺して事故起こしてくれないんだもん」
まるでこつちが悪いような言い分だ。

この人、僕に口裂け女の役割をしようとしてた時、思いっきり楽しそうだったんだけどな……。

単純に口裂け女の役割をしたいのに、対象者がその存在だけでビビって事故ってしまうため、やりたくてもやれなかったのでは？と礼二郎は半眼になりながら思った。

「いえ……そういう……こと……ではなく……て」

玲子の言い分を聞いて、貞子は首を振ると、

「もし……良かつ……たら……倶楽部……に……入り……ませんか？」
と言った。

「はあ？！」

「へ……？」

貞子の突拍子もない発言に礼二郎は驚き、玲子は意味がよく分からないため首を傾げた。

「都伝……倶楽部……って……言うんで……すけど……復讐……するの……情報……とか……いるで……しょ？」

「情報？情報があるのか？」

情報という言葉に、玲子が食いついてきた。流石に白のワゴン車を片っ端からという自分の風漬しのようなやり方には疑問を持っているようだ。

「レンチ……君」

「……。ええ。ありますよ。一人、そういう情報集めにすごく長けたやつがいるんで」

礼二郎が答えると、玲子は妙に改まって、

「……できれば、その、紹介してもらえないか？」
と言ってきた。

「レンジ…君」

「…………。ああ、もう、わかりましたよ。今からナルトさんに聞いてみますから」

貞子の懇願するような視線に耐えられず、礼二郎は渋々承諾すると、携帯電話を取り出した。

樹々の携帯電話の番号をリダイヤルしながら、

きつとあの人、速攻で了解しちゃうんだろうなあ。

と礼二郎は渋い顔のまま思い、

「でさあ、ちよつと聞きたいんだけど」

「何で……すか？……口裂け…さん」

「ボンタン飴、持ってない？」

「…………ごめん…なさい……持って…ません」

「だよねえ」

都市伝説な二人の会話に、思わず頭を抱えるのだった。

都伝倶楽部活動記録その壱 「ボンタン飴を持って歩くやつなどそうはいない」

最後まで読んで下さりありがとうございます。

都伝倶楽部活動記録その弐「空回りは誰だってる」(前書き)

第二話です。

都伝倶楽部活動記録その弐「空回りは誰だってる」

見つけました!!!

わたしはついに見つけたのです!

思えば、長い道のりでした…

どうもこんにちです。

わたし、メリーさん。

ピンクのフリルいっぱいドレスを着たアンティーク人形です。

ただの人形と言われればそうなのでしょうが、わたしの歴史は割と古く、作られて30年　古ぼけたアンティークショップの片隅に常にぼつねんとしていました。

子供を連れた親子が来店すると、手に取ってくれるかもしれない、気に入ってくれるかもしれないとわたしはドキドキしていましたが、そんな機会は全く訪れませんでした。

わたしって、そんなに愛玩人形として魅力がないのだろうか、自信をなくしていたところに手に取ってくれたのが、前の主人である小さな可愛い女の子でした。

あの時の感動は、今でも鮮明に思い出すことができます。

思えば、あの頃がわたしは一番幸せでした。

ですが、それももう昔の話で、今は石丸町と花岡町を繋ぐ山道にある汚い汚いゴミ捨て場にいます。

子供と言うのは実に残酷なものです。

あれだけ人形であるわたしを愛玩してくれたのに、要らなくなったらあっさりポイです。

しかも捨て際に言った言葉が

「……………。なんかキモいのよね、これ」

これには流石のメリーさんも立腹というものです。

こんな気持ちを抱えたままこの臭いゴミ捨て場で朽ちていくのはまっぴらごめんだと思ったわたしは、ついに自分の意思で動くことを決意しました。

「んしょ、んしょ」

真夜中の冬空の下、街灯のない真っ暗なゴミ捨て場で私は必死にゴミの山越えをしています。

気分はまさに脱獄囚です。

今は真っ暗なので、自分の容姿は確認できませんが、きっと正しいことになっているでしょう。

そう思うと、気分はどんどん鬱になります。

「いけません。気持ちは前向きに前向きに……」

長く一人でいたせいか、独り言も随分多くなつたように思われます。わたしは必死に独り言で自分を鼓舞しながら、ほとんど何も見えないゴミの山を突き進みました。

そしてわたしは、夜明け前についに山道まででることに成功したのです。

あたしが、石丸町の高校が近いこの外層がコンクリの変わった家になし崩し的に居座って、そろそろ一週間になる。

なんか、妙に居心地がいいんだよね…。

トレンチコートに赤いワンピースなあたし 加島玲子、通称口

裂け女は、寒風が緩々と吹くのも特に気にせずに、ベランダで沈みかけた夕陽を何の気なしに見つめていた。

「口裂け……さん」

背後から声がして振り返ると、一週間前に知り合った、腰まで長い髪を持ち、その青白い顔はどこまでも陰気を誘う同類の山村貞子が、湯気の立つカップを二つ持って立っていた。

「……………。何よ？」

「……………いや…寒い……………かなと…思っ……………」

そう言つて宮沢は湯気の立つカップを一つ、こちらに差し出した。

「……………。どーも」

あたしは自分で言うのもなんだが、素直な性格ではないため、かなり無愛想に貞子からカップを受け取った。

カップの中にはココアと、飲みやすいようにストローが入っていた。

熱いココアになぜストローと思うだろうが、あたしの口は耳まで裂けているためストローで喉近くまで持つていけないとただこぼしなのである。

無駄に気が利くのよね、この女。

内心そう思いながら、あたしは普段から口の周りを覆っている大きなマスクを取ると、ストローからココアをすすった。

「……………」

「……………」

気が利くのは結構なことだが、この女はどうしてこう口数が少ないのだろうか？

一週間前に出くわして以来、会話はそこそこあるものの、必要以上のことをほとんどしゃべらない。

常に騒がしく、無駄話の多いこの倶楽部の創始者で情報担当のナルト　渦巻樹々や、変に老成した、小言の多い宮沢礼二郎。正式な部員でないのにも関わらず、このコンクリの家を提供している二人共通の友人、不知火英斗あたりとは割と普通に貞子は会話して

いるようにあたしは思う。

確かに同類の中には、怪奇という性質上極端に無口の奴が大勢いる。

だが、この女はどうもそうではない。

まさか、まだ警戒してんのか？

確かに出会いが会いだったため分からなくもないが、すでに一週間も経っているし、本音を言うところの連中には感謝しているのだ。

姉二人を轢き逃げで失い、両親からはこの姿を自分の娘とは信じず失踪扱い。姉二人が死んでからのこの約一年は、まさにホームレスに近い生活を送っていた。

そんな生活を省みず、ただただ私怨のために白ワゴン車を襲っていたあたしに居場所を与え、情報すら無償で提供してくれる連中に、あたしは感謝したりないくらいに感謝している。

連中も、この一週間であたしことを「口は多少悪いが、根はいい奴」と評価したらしく、口の裂けたグロテスクさもなんのその、なかなかフレンドリーに接してくれている。

この女をのぞいて。

そもそもこの都伝俱樂部なるものに勧誘してきたのはこの女だというのに、あたしにたいして気に食わないことがあるようで、時折今のように、会話するわけでもないのにこちらをじっと見つめている。

あたしはこういふどこか気まずい雰囲気はとことん苦手だ。

これまで一週間、我慢に我慢を重ねてきたが、もう限界である。

「ねえ……貞子。あんた言いたいことがあるのならいいな。見ててイライラする」

あたしはナルトのような回りくどい会話は嫌いなので、単刀直入に聞いた。

「え……？」

貞子は、青白い顔を明後日の方向に向けながらすつとぼけた。

白々しいことこの上ない。

「え？じゃねーわよ。アンタ、気を遣う割に妙に態度が威圧的なよ。いったいなんなの？」

「そんな…こと…ない」

「あるって。……ま、大方予想はついてんだけど」

「……え…？」

「ずばり、礼二郎でしょう？」

あたしが礼二郎の名前を出した瞬間、貞子のカップを持った手が震えた。図星のようだ。

「………」

黙りこくって、青白い顔をらしくもなく赤に染める貞子に、あたしは思わず苦笑した。

「やっぱりね。アンタ、あたしと礼二郎が話しているのを見て羨ましそうな顔してたし」

「……だって…なんか…すごく…仲…よさ…そうに…いつも…話し…てる…から」

すっかり湯気の引いたカップを執拗に弄くりながら、貞子は顔を伏せた。

「それであたしに妬いて、あんな威圧的な態度とってたってことが？」

「ご…ごめん…なさい」

「謝んなくてもいいって」

申し訳なさそうに頭を下げる貞子に、ぞんざいに手をヒラヒラさせてあたしは言った。

「いや、別にいいんだけどさ。しかし、アンタ、あれのどこがいわけ？」

「………？」

「だってあの男、かなり意味不明じゃん」

あたしの礼二郎に対するあんまりと言えはあんまりな評価にも、貞子は特に怒った様子もなく、キョトンとした顔で首を傾げた。

「何ていうか……いい意味でも悪い意味でも空気っぽいっていうか。ビビりでヘタレかと思えば、そうでもなかったり。どこか後先考えてそうに見えて、実はぼんやりしてたり、鈍感なのか鋭いのかもよくわからないし。で、極めつけは呪殺を受け付けない体質ときた」
あたしはそこで一旦言葉を止めて貞子の反応を見た。

貞子は顎に人差し指を当てて、考える様に目を細めたが、

「レンチ……君……は……前々から……あんな……感じ……だから……特に……変……とは……思わ……ない」

「前々から？…あ」

そう言えば前に聞いたが、この女は貞子であると同時に礼二郎の姉の礼奈なのだ。

今の台詞は礼奈の意見なのだろうとあたしは思った。

「なるほど……アンタと礼二郎の関係って何か妙に複雑ね」

「……私も……そう……思う」

貞子が妙にしみじみと言うのを聞いて、今の台詞は貞子と礼奈の共通する内心なんだろうとあたしは思った。

ジリリリリリリ…。

だしぬけに昨日取り付けられたシンプルな電話機が鳴った。

「ナルトか？」

この電話が繋がっていることを知っているのは、都伝倶楽部の連中と月々の電話代を払うことになっている礼二郎とナルトの共通の友人だけである。

あたしはベランダからリビングに戻ると、ココアの入っていたカップをテーブルに置き、廊下中央にある電話機の受話器を取った。

「もしもし、加島だけど？」

あたしがそう言うで一瞬沈黙があったのちに、かわいらしい女の子の声が聞こえてきた。

『もしもし。わたし、メリーさん。今、石丸高校の前にいるの』

休日の石丸町立高等学校。

運動部の活発な掛け声が聞こえる中、校舎の事務室横にある公衆電話の受話器を置いたわたしは、釈然としない表情で腕を組みました。
「加島って誰なんでしょう？」

昔のわたしの持ち主の家に電話したのに、持ち主とは違う苗字を語る人物が電話に出てきました。

「……………あ。もしかしてもう引越しちゃっているとか……」
確かに、あり得ない話ではないです。

でもそうになると、大変困ったことになるのです。

今の電話で、わたしとはまったく関係のなさそうな加島さんがわたしの呪いにかかってしまいました。

てつきり持ち主がまだ済んでいると思っていたわたしのミスです。
何せわたしの呪いは、私の電話に受け答えした時点で成立してしまう厄介なものなのです。

故に、わたしは加島さんの家に、前の持ち主がいないと分かっているにもかかわらず、行かなければなりませんし、加島さんは間違はなく死にます。

悪いことしちゃったなあ。

と思いつつも、これも前の持ち主に会うための必要な犠牲を割り切っている自分もいて、わたしは愛玩人形なのに、つくづく都市伝説なんだと思い知りました。

「今の加島さんって人が持ち主の引越先なんかを知ってい

るかもしれませんが、殺す前にそこだけはしっかり聞きださない」と悲観してしまうが、わたしはとりあえず前向きに考えます。

「……………？……………電話……………レンチ君？」

電話の受話器を置いたあたしは、貞子の方に振り返って首を横に振った。

あたしの動作で不思議そうな表情をした貞子。

「……………誰……………??」

彼女が疑問に思うのも当たり前だ。

何せ電話を通したのはごく最近なのだ。それを知っていて、なおかつかけているのは都伝倶楽部の連中だけなので、貞子の疑問はもつともだ。

「一応名乗ってたな……………確か、メリーとか言ってた」

「……………メリー……………さん……………？」

「そうそう、メリーさん。何か舌足らずのかわいい感じの声だった」
「……………女の……………子……………？」

「だろうな。今学校にいるって」

いたずら電話の類だろうと思ったが、あたしがそう言った途端、貞子の表情が俄かに変化した。

「学校に……………いる……………って……………そう……………言っ……………て……………きた……………の……………？」

「ああ、一方的にそれだけ言っただけで切れた。何なんだろうな？ 一体」
あたしが軽い感じでそう答えると、貞子は若干緊張感を漂わせてあたしに詰め寄った。

「な、なに？」

その詰め寄り方が異様な雰囲気があったため、思わずどもってしまったあたしだったが、そんなあたしの態度などお構いなしに貞子は、
「それ…私…達…と…同じ…同族…」
と言った。

「へ？」

同族…ってことは…。

「同じ都市伝説系の化け物ってことか？」

あたしの問いに貞子はこくこくと頷き、

「たぶん…また…かかって…くる」

「また？」

「そう…そうやって近づ…いている…ことを…知らせ…てくるの」

「それで？ 最後には真後ろにでも立って電話の相手を殺ろうっての？」

あたしは冗談交じりに言ったのだが、貞子は糞真面目に再びこくこくと頷き、電話を凝視した。

ジリリリリリリリリ…。

貞子の予想通り、再び電話が鳴り響いた。

俄かに表情が変わったあたしと、相変わらず青い顔の貞子は、流し目でお互いを見あう。

「……………」

ジリリリ…。

「……………」

ジリリリ…。

「……………」

シリシリ…。

「……………でない……………の？」

シリシリシリ…。

「……………。あんだ、出してみる？」

「……………怖い……………の？」

「そんなわけないでしょ！いいから出るって！」

シリシリ…。

「はい……………山村…です」

何だか渋々といった感じで貞子が出た。

「……………」

貞子は特に表情を変えないまま受話器を耳にあてていたが、すぐに電話機へと受話器を戻した。

「で？」

その後も特に表情を変えなかった貞子にあたしは聞いた。

「メリーだった？」

貞子はこくこくと頷き、玄関の方を指差した。

「今……………家の…前…にいる……………って」

「はや！」

あたしは思わずのけぞった。

「……………怖い……………の？」

そんなあたしに、貞子は懐疑的な視線を送っていた。

「だから違うつて言ってんでしょうが」

別にあたしはメリーのことは怖くない。

相手はもとより、自分もれっきとした都市伝説なのである。同族に会う度にいちいちビビってなどいられない。

「ホント……………？」

貞子はまだ信じていない。この一週間の間に気付いたことだが、貞子は案外ねちっこい。

「ホントだって」

さつきからのあたしの態度は、ただ単に面倒事になりそうな予感に警戒心を強めていただけなのだ。

貞子の誤解を解くのが面倒なあたしは、話をメリーに戻した。

「次の電話で、後ろに現れるんだよね？」

「……うん」

「で、殺しちゃうと？」

「……うん」

まあ、それは貞子の言う通りだろう。そうならない都市伝説などありはしない。あたしとて本来は殺す側にいるわけだし。

そうは言っても今は殺される側の立ち位置に違いはなく。

あたしは腕を組むと、しばし考えた。

まあ、殺しに来るって言っても、あたしも貞子も実質もう死んでんだからシカトぶっこいてもいいわけだ。でも流石にそれじゃ面白くないし…。

電話機の前で思案顔のあたしを、ぼんやりと見ている貞子。

しばらくしてあたしは組んでいた腕を解くと、

「ねえ、ちょっと考えたんだけど」

あたしの発言に、貞子は不思議そうに首を傾げた。

「わたし、メリーさん。今あなたの家の前にいるの」

わたしは、先ほど部活帰りの学生から盗んだ携帯電話を手にしてそう言いながら、自分の仮説に確信しました。

今、確かにわたしはわたしを棄てた持ち主の家の前にいます。

全体的にコンクリで出来ており、甲子園の塀のごとく枯れたツタが張りついているこの家は、わたしがいたころからたいして変わっていません。

綺麗に手入れされた玄関を見て、わたしは前の持ち主が引越してしまっていることをここで確信しました。

「何という綺麗さ」

携帯電話をパタンと閉じながら、わたしは感嘆の声を漏らしました。前の持ち主だとうはいきません。

几帳面に掃除された玄関の前に、これから中にいる綺麗好きらしいこの住人を脅かし、殺さなければならぬと思うと若干心苦しいです。

しかしながら、呪いは始まってしまっているのです。どこぞのビデオから出てくる女と同じで、一度始まったらこちらが途中でやめることは出来ません。

わたしは呼吸していないにも関わらず大きく深呼吸し、携帯電話を再び開きました。

願わくば、綺麗好きなだけで、実はものすごい人でなしであってほしいです。

呼び出し音が鳴る中、わたしはそんなことを思いながら、ゆっくりと泥だらけで汚い小さな自分の手を玄関の扉にかざしました。

これで電話が繋がった瞬間、中の人間の背後に立てるのです。

「はい」

数回の呼び出し音の後、加島と名乗っていた女の人が電話に出ました。

その瞬間、わたしの人形な体は玄関口から掻き消えて、

わたしは気付くと家の中に現れており、リビングと思しきところに立っていました。

私の正面には、背の高いスラリとしたトレンチコートの女の人と、白で長袖のワンピースを着た腰まで届いているロングヘアの女の人が並んで背中をさらしていました。

「わたし、メリーさん。今、あなたたちの後ろに」

呪いのセオリー通りにわたしは言葉を発し　そして、

「！！？？」

絶句、してしまいました。

わたしが決まり文句を言う前に、その二人の女の方は勢いよく振り返ると、あり得ない速度で私の目の前に顔を寄せてきたのです。

わたしの眼前に迫った、口が耳まで裂けた女の人と、生気がまるで感じられない青白い顔の女の人。

それらがわたしの目の前でどこか愉快そうに顔を歪めました。

それはわたしの呪いすら霞んで見えるほどの、強烈な呪いの感覚でした。

「ひ……あ……」

声にならない悲鳴を上げたわたしは、そのまま頭が真っ白になっていくのをただ受け入れていくしかありませんでした。

「で？」

とある所用を終わらせた僕　宮沢礼二郎は、所用先で一緒にいたナルトさんと別れを告げ、本拠地に遊びに行っている貞子さんを迎えに来たわけなのだが。

「メリーと名乗る人形がいきなり電話してきて、何となく癪になったので、悪戯心でこの人形がやってきたところへ逆に脅かしたら、人形が本気でビビってのびちゃったと？」

本拠地のリビングで貞子が出てきたホットココアをありがたく頂きながら、僕は貞子の片言な説明を受けてため息をついた。

ホント、貞子さん来てからこんなばっかだなあ。

内心そう思いながら、僕はここに居座っている都市伝説の口裂け女がいないことに触れることにした。

「口裂けさんは？」

「お風呂……場」

「……何で？」

聞き返すと、どうやらそのメリーなる人形はかなり泥だらけで汚らしいことこの上ない状態だったらしく、不憫に思った口裂け女が洗淨しているのだそうだ。

「口裂けさんもなんだかんだでお人好しだね」

「悪いかな？」

背後から声がして振り返ると、バスタオルに巻かれている金髪の人形を抱いた口裂け女が、仏頂面で立っていた。

「いや、そんなことはないよ？」

僕は人形を抱いた口裂け女を見て、あまりの微笑ましさに含み笑いをしながらそう言った。

「……………。笑ってんじゃねーわよ」

「ごめんごめん。その様子だとやり過ぎたことは反省してるみたいだね」

「うるさい」

どうやらちよつと凶星だったらしく、ばつが悪そうにそつぽを向いた口裂け女に、僕は肩を震わせながら笑いをかみ殺した。

そんな僕の様子に、手の内に人形があるために思い切った行動の出来ない口裂け女は、見る人が見たら失神してしまいそんな禍々しい目つきで僕を睨んでいた。

僕らがそんなやり取りをするのを、普段ならちよつと機嫌悪そうに見ている貞子が、今日は困ったように笑っているだけなのを見て、僕は少し驚いた。

ここ一週間の間、この二人は同族にも関わらず、妙にギスギスした空気が常にあった。

それが今ではほとんど感じられない。

この人形を通して、少しは仲良くなったのだろうか？

僕はそう思い、バスタオルに包まれた愛玩人形にこっそりと感謝した。

都伝倶楽部活動記録その弐「空回りは誰だってる」(後書き)

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

都伝倶楽部活動記録その参「幽霊だつて呪うのには理由があるのだ」(前書き)

第三話です。

都伝倶楽部活動記録その参「幽霊だって呪うのには理由があるのだ」

「宮沢君つてさ、親いないんだよね？」

「……。いきなり黒い質問だね。ナルトさん」

「ナルトじゃない渦巻。……。まあ、いいじゃない。ちょっと暇なんだから答えてよ」

「ちよつと暇だからする話題じゃない？」

「いいから答えなさいよ」

「……。いないよ。交通事故でぽっくり」

「だよな？」

「知ってんならいちいち聞かないでよ」

「まあまあまあ。てことはさ、原因はそれなの？」

「何が？」

「宮沢君の靈感體質よ。そのころから見えるようになったと？」

「何それ？」

「よくテレビとかであるじゃない。何かショッキングなことが起きて今まで眠っていた力がこう、使えるようになるって感じのさ」

「……。いや、違うよ。アニメの主人公じゃないんだから」

「じゃあ、その前から？」

「うん。親が事故に遭う前からちよくちよく見えてた。今本拠地にいる都市伝説二人組みたいに、接触したり絡んでくることはなかったし、こつちから絡むこともなかったけど、物心ついた時にはもう見えてた」

「そりゃ宮沢君に絡もうなんて幽霊はいなかったでしょうね」

「何で？」

「だって宮沢君、触れるだけで呪いを無効化できちゃうじゃん。これってほぼ呪いで構成されてる幽霊たちには致命的じゃない？」

「確かに今まで気にもしてこなかったけど、だからこそ僕はこの年齢まで生きてこれたんだろうね」

「そりゃそうなんだろうけど、何であの都市伝説二人には何で効果がないの？いや、それ以前に何であの二人は普段幽霊の見えない一般人にまで視認できるのよ？」

「…………。君は貞子さんが僕の姉だって見破るだけの情報集能力がありながら、なんでそうとぼけるのさ？無駄に韜晦とかしてんじゃないの？」

「…………？」

「…………カルト好きならわかるだろうって言ってるの」

「いや。前にも言ったでしょ？下手の横好きだって」

「…………なんだか釈然としないなあ」

「はいはい、私のことはいいから。分かってんならどういうことなのか答えてよ」

「…………うん。まず僕の体質だけだね。この体質は、呪いそのものを無効化するのではなくて、呪いを使って行う殺人行為を無効化する、らしい。遺伝なのかなんのはわからないけど」

「…………うんうん。…………ん？つまり呪い本体は無効化できないってこと？」

「そう。貞子さんの時も口裂けさんの時も、殺すために使用された呪いを無効化することはできたけど本人を無効化することは出来なかったから、そういうことなんだろうね」

「なるほどね。宮沢君は盾にはなれるけど矛にはなれないわけか」

「いやな言い回しだね」

「人畜無害なあなたにはお似合いじゃない。で？何で都市伝説なの二人は視認できるの？」

「決まってんでしょうが。二人ともざっくり言っちゃえば　ゾンビだからだよ」

「……………」

「……………」

「…………。あ」

「…………ホントとぼけてるよねえ」

晴れ渡った土曜日。

時刻は午後二時過ぎ。

今月一番のひどい寒風が吹く中、今日も石丸町の商店街は土曜日に
関わらず、活気がない。

そんな中で相変わらず細々と営業しているアンティークな喫茶店、
エルダン。

その一番奥の席で、裾の長い黒のコートを椅子にかけてミルクティ
ーをすすっている青少年　宮沢礼二郎と、その対面の席でモカブ
レンドを飲んでいる童顔にお下げの少女　渦巻樹々は、来店して
からずっとこんな調子で会話を続けていた。

たまの日曜日にも関わらず、二人が喫茶店で無駄話をし続けてい
るのには訳があった。

「来ないわね」

樹々は白いベルトの腕時計を見ながら、渋い顔をした。

「十二分の遅刻だよ」

店の壁にかかった鳩時計を見やり、礼二郎は頬杖をつきながら言っ
た。

「まったく、話は二日前にしておいたんだからもつとキビキビして
欲しいもんだわ。あの常識知らずが」

「ナルトさんが常識を語りますか」

「ナルトじゃない渦巻」

本気で定着しつつあるあだ名を否定して、樹々も頬杖をついた。

「もしかしてばっくれる気なんじゃない？」

礼二郎はそんな樹々を見やりながら、ふと思ったことを口にした。

「何ですって？」

樹々の片眉がぴくりと跳ねた。

「いやさ、君や僕と関わりとろくなことがないって思ってんじやないのかなってね」

「……………。私達を疫病神とでも思っているの？彼は」

「かもね」

「最っ低。ていうか何より心外だわ。そんな風に思われるなんて」
憤然とした面持ちで答える樹々に、礼二郎は特に表情は変えず、

「だってほら、冬休みからこっち、あいつ踏んだり蹴ったりじゃない？貞子さんに電話越しでビビらされたり（りんぐ第四話「好奇心は身を滅ぼす」参照）、退魔師にばったくられて金欠になったり（りんぐ第五話「クリスマススイブとお坊さんは相容れない」参照）、サデル坊主を目の当たりして失神したり（りんぐ第六話「何事もほどほどが肝心」参照）、果ては先週の日曜日での遊園地で、貞子さんのせいで狙っていた彼女に逃げられ、その帰りにふて寝して起きたら目の前に口裂けさんがいてまたも失神する破目になったり…………。ほら、関わりたくないと思う理由はたくさんあるじゃない」と、ここに来る予定になっているはずの遅刻男、不知火英斗のここ最近の不運な出来事を礼二郎は片っ端からあげてそう言った。

樹々はそれを聞いて半眼になると、

「でもそれ、ほとんどは自業自得でしょ？」

ばっさりと礼二郎のささやかなフォローを切り捨てた。

「…………。まあ、そうなんだけどね」

樹々の身も蓋もない言い方に、英斗のフォローを諦めた礼二郎は、だしぬけにテーブルに置いていた携帯電話が鳴ったのを見て苦笑した。

「あいつからメールだ」

礼二郎はそう言って携帯電話を開くと、メール内容を確認して樹々に見せた。

差し出された携帯電話の画面を見て、樹々は盛大に舌打ちした。そこには実に簡潔に「悪いがドタキャンする」と短く表示されていた。

二日前。

木曜日の石丸町立高等学校の放課後は、体育系の部活で今日も賑わっていた。

寒空の外の賑わいとは対照的に、校舎は部活をやっていない生徒達の談笑が時折聞こえるだけの閑散とした状況となっている。

そんな夕暮れ時、二年C組の教室には、セーラー服に学校指定の紺のカーディガンを羽織った樹々が怪訝な顔をして自分の席に座っていた。

その帰る準備の真つ最中であつた背の低い童顔少女の前で、同じセーラー服の少女が思いつめたように立っていた。

「あ、あの、渦巻さんですよね？」

思いつめた少女は、俯き加減で樹々に話しかけた。

「そうだけど。何か用なの？私に」

「わ、わ私、お、思井鐘利伊沙って言います」

「……知ってるわよ。A組の双子でしょ」

樹々は訝しげに答えた。

思いつめたボブカットの少女 思井鐘利伊沙はA組の双子と言われて曖昧に微笑んだ。

思井鐘利伊沙と思井鐘亜里抄は、この学年では有名な双子だった。

その理由として、双子であることや、その容姿が美人であるというのもそうだが、何より妹である亜里抄がかなり積極性の溢れる活発な少女で、何かと行事でよく目立っていたからだ。

姉の利伊沙はそんな妹とは対照的で消極的かつ地味であり、二人は度々比較されていた。

カルト好きな割には友人関係の広い樹々は、B組にいた妹の方には面識が多分にあるが、A組の姉とは今回初めて喋った。

「……………」

「……………」

「……。私に用があるじゃないの？」

帰る準備をしていた樹日々の前に立ったのはいいものの、もじもじしているだけでいつこうに話す気配がない利伊沙に、樹々は段々と焦れて語尾も荒く尋ねた。

「……………」あ、あの、し、不知火君に、聞いたん、ですけど、都市伝説を、調べて、いるって、本当……ですか？」

都伝倶楽部のことだろうか。

不知火英斗に聞いたと利伊沙は言ったので十中八九そうなのだろう。

しかし口の軽い男である。次会った時に釘をさしておかなければないと樹々は二つの意味で思った。

「まあ、趣味でちよつと齧つてゐる程度よ」

英斗に対する不満はおくびにも出さずに樹々は答えた。

嘘は言っていない。都市伝説とオカルトは全くの別物なので正解でもないが。

「なら、あの、調べてもらいたい、都市伝説があるん、ですけど……駄目ですか？」

樹々の言葉を聞いて、利伊沙はやや前のめりになると勢い込んでそう言った。

利伊沙の普段は見せないような食いつきぶりに、樹々は目を細めた。

「……別に駄目ではないけど」

「駄目ではないけど……な、何ですか？」

「……あなたも分かっているとは思うけど、不知火君のせいで、冗談で都市伝説や心霊現象を教えるとか調べてみたらつて言ってくる人はたまに居るのね。でもあなた、どうもそういう人たちと違うような感じだし……なんだか腑に落ちないのよね、あなたがそういうこと言うのって。……まあ私の気のせいなのかもしれないけど」

利伊沙は、樹々の問いかけに焦ったように体をもぞもぞと動かし、視線をあちらこちらへと振り回した。

本当に落ち着かない。

そんな利伊沙の挙動不審っぷりにイライラの募る樹々だったが、なんとか堪えた。

「た、大したことじゃないんです。ただ岬トンネルの怪異の検証と一緒にしてほしいだけなんです」

岬トンネル。

隣町に続く国道沿いの山の中にある古いトンネルで、長さは百メートルほど。街灯も全くなく、何かと不気味な噂が絶えないトンネルである。

しかし隣町と近く、また不気味な噂が絶えないが故に有名であり、その有名さ故に樹々にはかなり前に嫌がる英斗を連れてすでに検証

に行っていた。

結果は、ものの見事に噂のすべてが不発だった。

「あそこなら、いろいろ噂はあるけど、全部デマよ？」

「そ！そ、そうなんですか？」

樹々のデマ発言に、利伊沙はずいっと勢い込んで聞き返した。

利伊沙が寄った分だけ後ろに引きながら、樹々は肯定した。

「ええ。岬トンネルでしょ？その昔、トンネル付近で事故死した女の子の霊が出るとか、元はあのトンネルは軍用道路で、下半身しかない軍人が夜な夜な闊歩しているとか、情報が曖昧でさ。それはそれで面白そうだったから不知火君連れて検証してみたの。去年の夏に」

「……はあ」

「で、結局何も出てこないし、トンネル付近であった事故や軍用道路の話も裏が取れなかったから、結論としてデマってことになったわ。だから」

樹々は立ち上がると、机の横に掛けていた学校用のカバンを取った。
「今更あそこ絡みで噂がたつても、デマが見間違いの可能性が高いわ。大人しいあなたが何であんなところ検証しようなんて思ったのか興味がないわけではないけど、行くだけ無駄だから、今回はパスってことで」

樹々は言うだけ言って、踵を返してもう話すことはないとはかりに歩き始めた。

「あ、ああ、ありがとうございます」

去っていく樹々に利伊沙はそう言つと、小走りで教室を出て行った。

樹々はというと、

「　　ありがとう？」

利伊沙の台詞に小さな違和感を感じて、彼女が出て行った教室のドアを凝視していた。

樹々が利伊沙と話していた時刻より少し経った頃。

自宅のマンションの几帳面に片付けられたキッチンで、学生服にエプロン姿の礼二郎は今日の夕飯を何にしようか悩んでいた。

冷蔵庫を開け閉めしながら、材料の確認とそれらの材料からできる料理を模索する。

一通り確認して、昨日の晩に食べたハンバーグの具が残っていたので、それを使って春巻きを作ることに決定した。

「貞子さーん。夕飯なんだけど、春巻きで　　って、何してんの？」

リビングでテレビを観ているとばかり思っていた呪いの塊は、フロアリングの床の上で奇妙な匍匐前進を繰り返していた。

かさかさかさかさ　　。

「……………」

かさかさかさかさかさ　　。

「…………貞子さん？」

かさかさかさかさかさ　　。

礼二郎の声にも気づかずに一心不乱に奇妙な匍匐前進をする貞子を見て、礼二郎は何かに気づいたように手のひらを叩くと、ただポツリと呟いた。

「　　ゴキブリの真似？」

「……ち……が……う……う……!!」

言葉がぶつんと途切れる話し方をする貞子にしては即答に近い突っ込みに、礼二郎は吹いた。

「じゃあ、何なの？」

「……あ……れ……!!」

貞子が寝そべったまま指を指した方向にはテレビがあり、昨日レンタル屋で借りたホラー映画が流れていた。

ちょうど主人公が屋根裏で死んだ怨霊にとり殺される最後のシーンが映っており、怨霊はズルズルと家の二階から匍匐前進でにじり寄っている。

「あー、あれの真似なんだ？」

「真似……じゃ……ない……研……究……」

「研究？」

礼二郎は寝そべっている貞子の横にしゃがみながら聞いた。

「どうやら最近いろいろと不満があるらしく、そのうちの 하나가「誰も怖がってくれなくなった」というものらしい。」

これに関しては、おそらく今貞子が接している人間がすでに貞子に慣れてしまっている礼二郎や樹々だけだからそう感じているのだが、貞子はそうは思っていないらしい。

「十分怖いと思うけど？」

礼二郎が言くと、貞子はぶんぶんと首を振って、

「ツンツン君（英斗のあだ名）……で……さえ………苦い……顔……するだけ……で……怖が……ってくれ……ない」

長い前髪で顔が隠れているため、表情は分からなかったが、明らかにトーンは落ち込んでいた。

礼二郎は内心ちよつとだけその可愛さに悶えながら、

「本物のホラーの君がホラー映画の演出を参考にするとか、やっける事が本末転倒だって。そんな演出しなくても貞子さんはみんなの恐怖の対象だよ」

そう言って貞子の頭を撫でた。

「……ほんとう?」

ああ、こういう変に甘えた感じは姉さんの影響なんだろうな。年上なのに弟の僕によく甘えてたんだよね、姉さんは。

「うん、ホント」

礼二郎は内心でそんなことを思いながら貞子に笑いかけた。

ジリリリリリリ……。

だしぬけに学生服の上着のポケットに入れていた携帯電話が鳴り、礼二郎はその場に腰をおろしながら電話に出た。

『よう。呪いの塊との同棲生活は順調のようだな。我が友、宮沢礼二郎』

「…………。君はその後、遊園地の彼女はとうまくってるのかな?」電話の相手は彼の友人、不知火英斗だった。

『うるせーよ。あん時の落とし前はついてねーんだからな礼二郎!お前、覚悟しておけよ』

「はいはい。で、今日はどうしたの?」

吠える英斗を適当にあしらいながら、礼二郎は先を促した。

『ああ。ナルトから伝言だ。「土曜日、午後二時までにエルダンに集合」だつてさ』

「…………。倶楽部活動かな?」

『そうらしい。前に一回検証して不発だった岬トンネルを再度検証してみたittyてよ。ホント好きだよなあ、あいつ』

「君も行くの?」

『一応呼ばれてはいる。岬トンネルは石丸町の端だからな。足が欲しいんだろ』

「なるほどね」

寝そべったままの貞子が悪戯で脇を突いてくるのを払いながら、礼二郎は答えた。

『正直言つと行きたくねーんだよね。』あなたには二つの意味で

釘を刺さなきゃならないからちゃんと来なさいよ?」とか言ってるし」

「あはは。それは難儀だな」

英斗の泣き事を笑い飛ばした礼二郎は、ふと視線を貞子のいる床に目を向けた。

あれ? いない。

そこには寝そべっているはずの貞子がいつの間にかおらず…。

「と…りゃ…!」

控えめかつ途切れ気味な掛け声とともに、気付かれないように背後に回っていた貞子が、後ろから礼二郎の脇を思い切りくすぐった。

「わひゃ!?!」

完全に不意を突かれ、礼二郎は脇をくすぐられて奇声を上げると、しゃがんでいた体勢から後ろに倒れ込んだ。

それを待ち構えていたかのように真後ろで受け止めた貞子は、クツクツとおかしそうに笑っていた。

「おい、どうした? 礼二郎。何やらお前が発したとは思えないような奇声が聞こえたんだが?」

「気のせいだ」

英斗の怪訝な声を短く否定して、礼二郎は自分を抱き留めている貞子を横目で睨んだ。

今電話中だから、ちょっかい出さないで。

彼の目は明らかにそう訴えていたが貞子は全く堪えておらず、やはりおかしそうにクツクツと笑っていた。

「おい…‥ なんか不気味な笑い声がほんのり聞こえるぞ」

礼二郎と貞子は現在密着しているため、携帯電話が貞子の小さな笑い声を拾っていた。

「何でもない。貞子さんが笑ってるだけだ」

「……。えらく近距離から聞こえたけど、お前ら一体何してんの?」
「…何って」

礼二郎は改めて状況を確認すると、尻もちをついた状態で後ろから

貞子に抱き締められている。

『礼二郎？』

押し黙った礼二郎に英斗が訝しげに呼ぶ。

「な、何でもない」

考えてみたら今のこの状況は非常に恥ずかしいのではないのか？

『。。。どした？声がどもってるぞ？』

「だ、だから何でも無いって」

完全に意識してしまい、羞恥心に耐えられなくなった礼二郎は立ち上がろうとするが、貞子は離そうとしなかった。

「ちょ、ちよつと、貞子さん、離して」

やりとりを聞かれないように携帯電話を手で押さえながら、礼二郎は後ろの貞子に慌てて声をかけた。

「。。。えー」

意識してしまい、照れている礼二郎とは裏腹に、貞子が不満そうに頬を膨らませた。

『おい、礼二郎。どうしたんだよ？』

携帯電話から英斗の不審がる声が聞こえる。

「あ、えつと、とりあえず！土曜日の午後二時に喫茶店だね？」

とにかく早く会話を終わらせなくてはと思った礼二郎は、強引にまじめに入った。

『あ、ああ、そうだけど、お前大丈夫か？』

「だ、大丈夫だよ。それじゃ、土曜日ね」

『おう』

残りの会話もそこそこに礼二郎は携帯を切ると、貞子の腕から逃れようともがいた。

「貞子さん、いい加減離して」

「。。。何で？」

「は、恥ずかしいでしょ？」

「。。。？？？レンチ君。。。あつたかくて。。。気持ち。。。いい。。。のに」

「はい？」

顔を赤くして振り返る礼二郎に、貞子は長い前髪の隙間から柔らかく微笑んだ。

「う」

そんな貞子の表情に、礼二郎はさらに顔を赤くする羽目になったのであった。

二日後。

午後二時半。

土壇場でキャンセルをしてきた英斗に憤慨しながらエルダンを後にした樹々と、英斗のフォローに見事に失敗した礼二郎は、その足で岬トンネルへと向かっていた。

迂闊ながら英斗がドタキャンすること予測していなかった樹々は徒歩でエルダンに来ていたため、岬トンネルまで礼二郎が乗ってきた自転車に二人乗りをすることになった。

「そつえば、貞子さんは今日どうしてるの？」

「本拠地で口裂けさんと一緒にのんびりしていると思うけど？」

「ああ、本拠地にいるんだ？大丈夫なの？」

「何が？」

「あの二人、この一週間の間ずっとギスギスしてたじゃない」

「……してたねえ。お互い嫌っているわけではないらしいけど」

「私、すぐに意気投合するもんだと思ってたんだけど、分からないものね」

「その辺はいくら同族でも人間と変わらないってことでしょ？」

「まったく。貞子さんに会ってからこっち、都市伝説のイメージがどんどん壊されちゃっていけないわ」

岬トンネルに続く山道を走る自転車の後ろに跨っている樹々は、白い息と共にワザとらしく嘆いた。

礼二郎は自転車をこぎながら、嘆息という名の白い息を吐くと、

「君のイメージなんてどうでもいいよ。それより、岬トンネルに行く詳しい事情を教えてよ」

と言った。

「何？二日前に不知火君から伝言の電話きたでしょ？聞いてないの？」

樹々にそう言われ、二日前の英斗と電話した時の状況を思い出した礼二郎は、ほんのり頬を赤くしながら、

「ごめん、あの時は立て込んで集合する日時と場所しか聞いていなかったんだ」

「？……そう」

一瞬雰囲気の変わった礼二郎に、樹々は首を傾げたが、すぐに説明を始めた。

「説明する前に、今週一度も学校に来なかった生徒がいるんだけど、誰だかわかる？」

「来ていない生徒？……さあ？」

樹々の質問に、礼二郎はろくに考えずに分からないと答えた。

「考える気ないでしょ？てか、学校普通に来てれば嫌でも耳に入り

「そんなもんだけど」

「しょうがないだろ。知らないもんは知らないんだから」

「呆れた。……もしかしてあなた、自分の周りに情報閉鎖空間でも張ってんじゃないの？」

開き直った礼二郎に、言葉通り呆れた表情の樹々は大きくため息をついた。

「B組の思井鐘亜里抄。名前くらいは聞いたことあるでしょ？」

「B組……。ああ、双子の派手の方ね」

随分とざっくりしてるわね、と樹々は思いながら先を続けた。

「そう、その双子の派手な方。その亜里抄が、かれこれ今週の月曜から金曜まで学校を休んでいるの」

「風邪なんじゃないの？こじらして長引いてるとか」

もつともなことを礼二郎は言ったが、樹々はニヤリと笑って首を振った。

「私も実は風邪が何かだろうと持ってたんだけどね。どうもそうじゃなかったのよね」

「？……どうということさ？」

「結論から言うわよ。これはあくまで私の推論だけど、『思井鐘亜里抄はすでに死んでいる可能性がある』」

「……。は？」

さっぱり意味が分からない。

「どうよ？」

「いや、どうよって。過程すっ飛ばして結論だけ言われてもね」

困惑する礼二郎に樹々は、

「それもそうよね」

と今更ながらに頷いて、再び口を開いた。

「そもそも、疑問を持ったのは双子の姉である利伊沙が二日前に私に話しかけてきたことがきっかけなの」

「……ふーん。話しかけてきた内容は何だったの？」

「ずばり、岬トンネルを検証してくれ」

「…………じゃあ、その利伊沙さんの依頼をこなす為に岬トンネルに行くの？」

「違うわ。岬トンネルは随分前に検証してその噂のすべてがデマだってことは分かっているの」

「なら、それでいいんじゃないの？」

「……。あなた、考える気ホントにないのね。おかしいと思わないの？ 普段おとなしくて冗談も苦手で常に周りにビクついてばかりいる、そんな人が単身で私に岬トンネルと一緒に検証してくれなんて普通言うと思う？」

樹々に捲し立てられて、礼二郎は唸りながら考えると、

「考えにくいね」

「でしょ？ しかも岬の噂はデマだって教えたらすごく嬉しそうにありがとうなんて言ったのよ？ 何かちぐはぐな感じがしない？ 本当に興味があつてそういうことを言うてくる人間なら、デマだって言われたら間違ひなく落胆するはずなのに！」

「……それは君だけだと思うけど」

「何か言った？」

「いいや。……あ、もしかしたら王様ゲームとかの罰ゲームのノリでいいいや行く羽目になつてたんじゃないの？ ほらそういう人なら一人で行くのは怖いから、そういうのに耐性のある人を連れて行きたくなるものだろうし」

「それも考えて彼女の親しい友人をあたってみたけど、そういうゲームをしたことはないって。だいたいさあ、デマと聞いてもとりあえず来てくれって言わない？ そういう人ならなおさら」

「……ああ、そっか」

礼二郎は納得したように頷いた。

その様子を見ながら、樹々はさらに続けた。

「私は、この利伊沙さんの態度に引っかけかりを覚えてあれこれ調べてみたの」

「それで？ 何かわかったと？」

「それはもういろいろね。まず分かったのは岬のトンネルに新しい噂が出来ていたということ」

「新しい噂？」

「そう。あのトンネルを通学路に使っているA組の御厨晚児が吹聴していたわ。あのトンネルを通ると、女の子の幽霊に遭うってね。ホントに見たのかはあやししいけどね。もし本当なら亜里沙さんの可能性があるわ。幽霊に最初に遭遇したのは妹の亜里抄さんが来なくなった初日だっていうし」

「……月曜日……か」

山道は坂道に差し掛かったので一生懸命立ちこぎしながらも、礼二郎は律義に答える。

「そういうことよ。そしてこれが決定的に近いんだけどね、学校では風邪で休みとなっているけど、実際には警察に失踪届が出ているのよ。亜里抄さんの」

「失踪 届？」

「そう。両親が出したらしいわ。学校側は生徒に混乱をあたえないためにあえて病欠ってこにしているみたいね」

「……君の情報収集にはホントに感嘆するよ。警察方面の情報なんて一体どうやって手に入れたんだい？」

「ふふ……企業秘密」

「さいですか っと」

短い坂道を越えて緩やかに下る山道に、礼二郎は一息ついた。

「まあ、時系列に言えばこうよ。何かの理由で失踪した亜里抄さん。亜里抄さんが学校に来なくなった初日に目撃されたとされる女の子の幽霊。利伊沙さんの性格ならまずありえない岬トンネルの検証依頼 どう？繋がっているように見えない？」

「つまり、ざっくり言っちゃうと利伊沙さんは亜里抄さんの失踪に関係している……ってこと？」

「関係っていうか、利伊沙さんが殺っちゃってるじゃないかって思うのよ、私は」

「…………。いや、それはさすがに……深読みしすぎじゃない？」
どうにも突拍子もない話に、礼二郎は顔を顰めながら、樹々に向かつて言った。

礼二郎の台詞に、樹々はニヤリと笑うと、

「だから、岬トンネルに行くのよ。私の推測が正しいかどうかを判断するために、靈感体質のあなたを使つてね」

周囲を木々に囲まれた岬トンネルは、まだ日の高い午後の三時前だと言ふのにどこか仄暗く、その異様な存在感を醸していた。

岬トンネル入り口に自転車を立てかけて、礼二郎と樹々は岬トンネルの入り口の前に並んで立っていた。

「周りは山と森。街灯はなし。トンネルは入り口から出口にかけて緩やかに下り坂……なるほどねえ、ホラースポットにはもってこいだ」

黒のコートのポケットに寒そうに手を突っ込みながら、礼二郎は言った。

「まあ、雰囲気だけで、ここで流れた噂は全部デマだったけど」

「……ちなみにさ、それどんな噂だったの？」

「ん？御厨君の見たの以外でってこと？」

「そう」

礼二郎が頷くと、樹々は視線を上にあげて考えるそぶりをしながら答えた。

「ん、御厨君が見たの以外でなら、例えば事故死した女の子の霊が出るとか、元々このトンネルは軍用道路で、下半身しかない軍人が夜に闊歩しているとか、だいたいそんなところかな。……って何でそんなこと聞くのよ？」

「……いや、その……。それさ、ホントにデマだったの？」

「……何で？」

何故か半眼になって言う礼二郎に、樹々は眉を八の字にして聞き返した。

「いや、だって　さつきから君の腕を掴んでるからさ。その事故死した女の子が」

ズザアアアア！

礼二郎のその一言を理解した瞬間、樹々は文字通り跳ね上がると極めて俊敏に礼二郎の後ろに隠れた。

「……。何ビビってんの？」

半眼のまま自分の背後に隠れた背の低い童顔少女を見下ろす礼二郎。流石に見慣れているだけあって、霊がいたという程度では動じない。「び、ビビってなんかいいわよ！」

「……。声を震わせながら言われてもねえ」

普段、カルト系が大好きだとか貞子や口裂け女といった本物の都市伝説と余裕で接しておきながら、幽霊にビビっている樹々に嘆息し、

でもこれは、流石にちょっとやばいかもなあ。

と、改めて『幽霊のごったがえす』岬トンネルを見やった。

軍服姿の幽霊、現在の若者の格好したチャラそうな青年の幽霊、ハイヒールを履いた妙齢の女性の幽霊、その他にもたくさんこの場所があるいはこの周辺で亡くなった人たちの霊が、岬トンネルの入り口から出口にかけて昼の商店街かと言わんばかりに密集してい

た。

「って、っていうか何！？デマじゃなかったって言うの！？」

やばいかもと思ってる割にはのんびり構えている礼二郎に対して、デマで片付いていた樹々はショックが大きかったようだ。

「まあ、そうだね。デマとかじゃなくて、単に君がここにいる霊をまったく感知できなかったんだろうね」

「な、何よそれ。納得できないわ！」

「そう言われてもねえ、これだけ幽霊が集まってんのに一人も見えないとなると、君は相当幽霊と相性が悪いんだね」

基本的に幽霊は見えるものではない。だが別に礼二郎のように霊感体質でなくても対象となる幽霊と知り合いであったり、対象が見る側に何か強い思いを抱いていたり、見る側が対象に何か強い思いを抱いていたり、あるいは単に波長があってその幽霊だけ見えてしまうことがたまにある。

なので、これだけ霊が集まっていると、全部ではないにせよ、一人や二人本当に見てしまっている人がいたとしてもおかしくはない。おそらく幽霊を目撃した御厨晩児は、これらの可能性のどれかに該当するのだろう。

「どうする？君には見えてないだろうけど相当な数の幽霊が跋扈しているよ？」

あまりの幽霊の多さにさっきから辟易してしいる礼二郎は、後ろでビクついている樹々に帰宅を示唆する台詞を言った。

「こ、ここまで来て帰れる訳ないでしょ！？御厨君が見たって言い張る女の子の霊が思井鐘亜里抄かどうかを確かめるまでは意地でも帰らないわ！」

大量の幽霊という事実、恐怖がずり上がるのを虚勢で誤魔化しながら吠える樹々。

「これだけいると探すの大変だよねえ。つか、御厨君が見たっていう幽霊が必ずしも思井鐘妹とは限らないんじゃないの？いなくなった初日に女の子の霊をみたって言っただけで、思井鐘妹を見た

とは言っていないんでしょう？」

それを確認しにここに来ていいるということを礼二郎は理解していたが、この中から探すのかという憂鬱さについ愚痴をこぼした。

「あ、あなたは話を聞いていたの？それを確認しに来たんじゃないっ」

考えていたことをさらに樹々に言われ、礼二郎は渋い顔をした。

「それが面倒くさいんだよ」

「が、我慢してよ。見えるのはあなたしかいなんだから」

礼二郎は内心うんざりして「もう好きにしたら？僕は帰るよ」という言葉が喉まで出かかったが、さっきからビビりまくっているこの童顔少女をこんな不気味な所において帰るわけにもいかず、

「……わかったよ。とにかく出口まで歩いて思井鐘さんがいるかどうかかわかればいいんだね？」

「そ、そう、そういうことよ。ほら、わかったんなら早く行きましょっ」

礼二郎の背中をせわしく押しながら言う樹々に、なんだかなあとやるせない表情をしながら、礼二郎は岬トンネルに入って行った。

「どう？いた？」

「早いよ。まだ入ったばかりじゃん」

トンネル内にいる幽霊達の顔を確認しながら歩く礼二郎（傍目からはキョキョロしているようにしか見えない）は、後ろから礼二郎の足取りの遅さにじれったそうにしながらもぴったりとくっついていゑる樹々に呆れていた。

「早くしてよ、呪われちゃうでしょっ」

「ヒステリックな声を上げるなよ。心配しなくても君は呪われないから」

「な、何で言いきれるのよっ」

「そりゃあだって、いくら霊たちが君を呪おうとしても君自身が彼

らをちゃんと認知出来ていないからね。大抵の呪いは声をかけられ
たら返事をするのと同じように、幽霊が呪ったのを呪われた側が認
知しないと呪いは成立しないんだよ」

呪いは全部が全部そういうものでもないのだが、あまりビビられて
いると鬱陶しいので、礼二郎は口から適当なことを言った。

「……な、なるほどね。ちょっと安心したわ。見えないも悪くない
わね」

「……………」

礼二郎は、簡単に信じて安堵する樹々を尻目に、この人は何を持っ
てカルト好きなんて言っているんだろう、と胸中で首を傾げた。

そうしてしばらくは霊の憂鬱そうな顔を覗き込みながら、緩々と
樹々を引き連れて歩く。

しばらくして、トンネルの中ほどまで来た時に見覚えのある容
姿の女の子が目についた。

「あ……………」

「何っ？いたの！？」

「見覚えのある女の子がいるね」

「……そう！そうなのね！思井鐘妹はいたのね！？」

「……………」

「……………」

「……ちょっと、黙らないでよ、何よ？」

「……………。いやさ」

「何よ？」

「僕の記憶が正しければ、思井鐘妹はロングヘアに軽くウェーブが
かかった髪型をしてたよね？」

「？………そうよ」

それが何？と言いたげな樹々に、礼二郎は向き直った。

「なら、多分、この目の前に立っている見覚えありまくりの女の子
は思井鐘妹じゃない」

礼二郎は断言したが、いまいち要領を得ない樹々は、眉間にしわを

寄せた。

「はあ？」

「だから、思井鐘妹じゃない」

「はあ？」

「だから」

「うつさいわね！なら誰だって言うのよ！？」
焦れて喚く樹々に、礼二郎は肩を竦めながら、

「この幽霊の女の子は、思井鐘姉　利伊沙の方だ」

と言った。

「……………。え？利伊沙？亜里沙じゃなくて」

「うん。妹じゃなくて姉の方」

とぼけた表情の礼二郎と困惑気味の樹々は、しばらくその意味を理解しかねて顔を突き合わせたまま沈黙した。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………。あ」

唐突に沈黙を破り、樹々がつぶやいた。

そして、

「あーはっはっはっはっはっはっは！」

次の瞬間、樹々は大声で笑い始めた。

樹々の笑い声がトンネルに反響し、礼二郎は顔を顰めたが、そんな事などお構いなしに樹々はしばらく笑い続け、

「宮沢君！謎はとべてすけた！！」

礼二郎に向って親指を立てた。

「トリックの上田か、君は」

一方の礼二郎は岬トンネルについてから暴走気味な樹々についてい
けず、ただただ冷静にしかねなかった。

樹々は、そんな冷めた礼二郎の視線やツツコミにはまるで動じず
にビシッと幽霊の女の子を指さした。

「学校に來ている思井鐘利伊沙は、実は思井鐘亜里沙ってことね！
？」

「ナルトさん、そっちは自殺した傷痕軍人だよ。もうちょい右
だよ」

そう言いながら樹々の指した指の方向を律儀に微調整させる礼二郎
に、やはり構わずに樹々は続ける。

「これはあくまで私の推測だけど、一週間前、思井鐘利伊沙は妹で
ある亜里沙に殺された。恐らくこの近辺だね。殺された動機は多分

あなたの彼氏絡みなんじゃないの？思井鐘利伊沙さん」

樹々の推測に、先ほどからぼんやりと立っていた幽霊の女の子

思井鐘利伊沙は緩慢な動きで樹々を見た。礼二郎にはその表情はど
こか驚いているようにも見えた。

「当たってるみたいだよ。……てか、ナルトさん、流石に女子だけ
あって周囲の恋愛事情にも詳しいんだね」

「ちよつと宮沢君。変なところで感心しないでよね。こう見えても私、
女子高生なのよ？」

「まあ、そうなんだろうけど、見てくれは小学生と変わらない体系
だし、口を開けばカルトだの都市伝説だの物騒な話が多いから、そ
ういうピンクな話には無縁な人なのかと思ってた」

「失礼しちゃうわね。私だって人並くらいには色恋やってんのよ？
呪いの塊を恋愛対象として見ちゃうようなあなたと一緒にしないで
よ」

「べ、別に僕は貞子さんことをそういう風には……」

「またまたあ。もう言っちゃいなよ。『実は僕、貞子さんのことが
大好きです』って」

「い、いい加減にしてよ。ほらほら！話が脱線してるよ」

「……あなたが変なこと言うからでしょうが」

いろいろと追及したかった樹々だったが、礼二郎に強引に促されてしょうがなく話を本筋に戻した。

「これは私が前々から思っではいたことなんだけど、思井鐘亜里沙は思井鐘利伊沙の彼氏に横恋慕していたんじゃないかって。前に姉の彼氏が超かつこよくて何か嫉妬しちゃったわ的な話を聞いたことがあるし。もしかしたらそれで相当もめたとか……」

「当たってる…みたいだよ」

横で聞いている礼二郎が利伊沙の表情を見ながら言った。

それを聞いて満足そうに樹々は頷くと、さらに続けた。

「やっぱりね…。で、その彼氏は結局亜里沙にはなびかなかった、とか」

礼二郎は利伊沙を見ると、利伊沙はちよつと照れたようにして俯き小さく頷いた。

「……………。当たってるよ」

「……………。これが当たってるってことは……いよいよ最悪ね。多分、亜里沙はどうしてもその彼氏を自分の物したかった。だから　　つまり」

焦らし焦らしに言う樹々に、怪訝な顔をする礼二郎だったが、瞬間閃いた顔をして掌をたたいた。

「　ああ！なるほど、そういうことね。つまり亜里沙さんはあまりの彼氏さん欲しさに利伊沙さんを殺して、自分が利伊沙さんになり変ったってことか…ふんふん、へえ　　って」

樹々の言わんとしていることを悟り、うんうんと途中まで納得した風で相槌をうっていた礼二郎は、

「　そんな馬鹿な話があるかあああ！」

あまりの馬鹿さ加減につい吠えてしまっていた。

「うっさいわね。反響して頭がガンガンするじゃない」

思わず耳を押えへて非難する樹々。

「自分だってさっきでかい声で高笑いしてたじゃないか」

「それとこれとは話が別よ」

「…………。まあ、いいや。話を戻すけど、自分の姉妹を殺してまで入れ替わりつて、さすがにそれはないと思うんだけど」

どうにも非現実すぎて信じきれない礼二郎だが、樹々はむしろ自信ありげに、

「なら利伊沙さんの反応を見て判断してみなさいよ」と言った。

樹々に言われて、礼二郎は恐る恐る利伊沙の方に向き直ると、利伊沙は困ったような顔をして礼二郎を見、そして樹々を右手で指さして、左手で小さく を作った。

「…………。大正解なのかよ」

「ほうら、そうでしょう」

決して威張れる事ではないのに、樹々はない胸を反ってまでして大いに威張った。

「んなアホな…」

まだ俄かに信じられない礼二郎を無視し、樹々は先ほどまで見せていたビビっていた姿など微塵も感じさせずに、トンネルを出るべく自転車の置いてある入口の方へ足早に歩き出した。

「ちよつと、どこいくのさ？」

慌てて追いかけながら、礼二郎は聞いた。

「電話するのよ」

歩きながら樹々は答えた。

「電話？誰に？」

「…………。宅配業者にちよつとね」

「…………。はあ？何で宅配？」

「自分の実の姉を殺して、姉になりすまして男をかすめ取った利伊沙 じゃないわ、亜里抄は今、私のデマ発言に安堵しまくってると思うのよ」

「…………。いや、だからさあ。宅配とか安堵とか、何で今日のナルトさんは謎ばつかしゃべりだすかなあ。説明してよ説明」

「ちょっと考えてみなさいよ。姉を殺した次の日に、その殺した場所ので幽霊らしき女の子を見たなんて話が出たら普通犯人ならどう思う？いろいろな不安になるでしょ？何かの予兆なんじゃないかとか、呪われるんじゃないかとか……で、その不安がピークになって亜里抄は私にここを検証してくれなんて言って来たのよ。何もないんだってことを確認して安心したかったから。けど、検証などしなくても私がすでに検証していてデマだってことを言った。亜里抄って、勉強は出来るけど結構単純な子だからそれを信じたのね。嬉しそうにありがとうなんて言っていたから」

さっきの呪いに関する嘘っぱちの解釈をあっさり信じた君が言うなよ、と礼二郎は胸中で思いながら、

「……………。まあ、安堵していることは分かったよ。で、宅配がそれとどう関わるんだよ？」

と言った。

「それなんだけどね。このままじゃ思井鐘姉が不憫すぎるでしょ。だから懲らしめてやろうと思って」

「それで 宅配？」

全く分からないといった感じの礼二郎に、樹々は若干面倒くさそうにしながら、

「警察にこの辺に死体があるので探してくださいって言っても信じちゃくれないでしょ？」

「失踪届が出るから探しはするんじゃない？」

礼二郎はもつともなことを言ったが、樹々は嫌そうな顔をした。

「後が面倒でしょ？それ。私、死体の第一発見者になんてなりたくないし、警察の執拗な事情聴取なんて受けたくないもん。だから、そついうのを専門にしている宅配に電話するの」

樹々はトンネルから出るとおもむろに携帯電話を取り出し、電話帳を開く。

「そんなの専門にしている業者なんてあるの？」

懐疑の目で礼二郎は言った。

「あるわよ。黒鷲死体宅配便っていつてね。サービスエリア範囲外だから、来てくれるかどうかは正直五分五分だけど。彼らの主な仕事は、死体の搜索、死体の修復、イタコによる死体からの依頼の聞き取りと報酬の商談、ハッキングによる周辺情報の収集ってところかしら？死体の代弁者な彼らが死んだ利伊沙の無念をきつと晴らしてくれるわ」

「うわぁ」

なんともアンダーグラウンドな話に、若干引き気味な礼二郎の視線がちくちくと痛くはあったが、電話帳から目当ての電話番号を見つけた樹々は通話ボタンを押した。

二日後。

「も、もし、見かけたらご連絡をお願いします」

「……………はぁ……………」

火曜日の晴れた昼下がり。

石丸町と隣町である花岡町を分断する小丸川付近にあるリバーサイ

ドマンション。

その礼二郎宅の玄関先で、貞子は年齢の割には老けこんで見えるスーツを着た壮年の男にビラを渡されていた。

ビラには、礼二郎と同じ年の双子の女の子の写真が載っており、見かけたらこちらに連絡をお願いしますと下の方に大きく電話番号が書かれていた。

貞子を見ても少しも反応を示さなかったビラの男は、疲れきった顔で頭を下げると、緩慢とした動作で去って行った。

貞子はそのやつれきった後ろ姿をしばらく悔しそうに眺めていたが、何も言わずに玄関のドアを閉めた。

リビングに戻り、ビラをテーブルに置くと、その足でベランダに行き、干しかけていた洗濯物の続きを始めた。

礼二郎のボクサーパンツを干しながら、貞子は何気なくそばを流れる小丸川に視線を向けると、河川敷を歩く人影が見えた。

歩いているのは、土に埋まっていたかのような泥だらけの格好をしたボブカットの半分腐りかけている女の子。

その女の子は彼女自身と全く同じ容姿をした女の子の死体の足を掴んでおり、ズルズルと引きづっていた。

貞子の視線に気づいたのか、腐りかけた女の子は足を止めると、貞子の方へ顔を向けた。

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続いたが、貞子がおもむろにぺこりとお辞儀をする
と、腐りかけた女の子も丁寧な頭を下げた。

頭に湧いたウジ虫がポタポタと地面に落ちる。

まるで近所のあいさつのようなやり取りをおこなった貞子は、何も
なかったかのように洗濯物の続きを始め、女の子も再びズルズルと
死体を引きずりながらその場を後にするのであった。

都伝倶楽部活動記録その参「幽霊だって呪うのには理由があるのだ」(後書き)

最後まで読んで下さり、ありがとうございました。

都伝倶楽部活動記録その肆「夢は夢だからこそ素晴らしい」(前書き)

第四話です。

都伝倶楽部活動記録その肆「夢は夢だからこそ素晴らしい」

私 道祖尾愛保は、花岡町立高等学校の二年三組の教室を出た途端、冬の空気がブレザー越しに体を撫でて思わず身震いをした。

時刻は午後五時十二分。すでに教室には誰もおらず、私は今日日直のはずだった刃香治亜鳴と百々天使がばっくれたので、仕方なく日直をしていて遅くなった。

学生鞆を背負い直し学校指定の灰色のマフラーの位置を直すと、学級日誌を片手に職員室へと向かう。

ストーブのきいた職員室で三組担任のノツポな教師、田丹牡先生に愛想無く日誌を手渡すと、そそくさと帰路についた。

「うわぁ……さむ」

外の予想以上の冷え込みに思わず顔を顰めて呟く。

私の家は学校から四キロ先にある住宅街だ。本来は自転車通学なのだが、生憎タイヤがパンクしており、今は自転車屋に直しに行くのが面倒くさいのでずるずると徒歩通学を続けている。

校門を出て右に折れると、後はひたすらまっすぐ。

石丸町の町境の近くまで歩くのだが、この辺になると道路も舗装されておらず、砂利道を電信柱に付いているか細い電球の光を頼りに歩くことになる。

時間を確認すると午後六時三分。途中で寄ったコンビニに長く居過ぎたようだ。

じゃりっ。

少し離れた後ろから、私とは別の砂利を踏む音が聞こえてきた。

私は一瞬身体が竦んだが、またすぐに歩き出す。

すごくびっくりしたが、近所のおばさんが買い物帰りなのかもしれ

れないしと、変な風に意識しないよう努めた。

じゃりっ。

再び、砂利を踏む音。しかも今度はかなり近くで聞こえた。

近所のおばさんじゃない！

おばさんは挨拶をちゃんとする人だ。この近さで挨拶してこないのはおかしい。

私はここで漸く確信した。

じゃりっ、じゃりっ、じゃりっ。

自然と歩幅が広がり、早足になるにつれ、後ろから聞こえる砂利を踏む音も多く早くなる。

「は、は、は、は、は」

妙に荒い息をする背後に感じて私はいよいよ暗い砂利道を全速力で走り始めた。

悪寒が全身を貫く。

「はあ！はあ！はあ！」

背後の荒い息がさらに荒くなる。私の息も荒い。

そして、次の瞬間、

「あ
」

私は背後から何者かにナイフで刺されて

二月五日、午前六時。

私は携帯のアラームに反応して、ベッドから飛び起きたのだった。

二月五日。午後十二時三十分。

石丸町立高等学校の二年C組のクラスに在籍している、薄青のパーカーに学ラン姿の宮沢礼二郎は、窓際から二番目にある自分の席に座っていた。

その窓際から見える空はどんよりと曇っており、その下に広がる石丸町は冬という季節も相まって、今日もどこか色あせている。

お昼休み。

購買部で買ったコーヒー牛乳と売れ残りのジャリパンをもそもそと食しつつ、窓越しに空に広がる曇天模様をぼんやりと見つめていた礼二郎は、

「わーお、どうしたんだ、我が友、宮沢礼二郎！今日は弁当じゃねーのな！」

先ほどドタドタと騒がしくクラスに帰ってきたジェルで尖らした髪が特徴的な彼の友人、不知火英斗に嫌そうに眉を寄せた。

昼食くらい静かに食べたいと曰ころから思う礼二郎だが、彼が来るとことごとく騒がしくなる。嫌な顔もしたくなるというものだ。

「今日はちよつといういろあつて弁当が作れなかったんだよ」

そっけなく答えると、英斗はニヤリと笑った。

「なんだよ、いろいろって あ、わかった。貞子絡みだろ」

「……………」まあ、僕がいろいろって言ったら、そうなるよね」

「ん？今回は違うのかよ？」

「……いや、あつてるよ」

憑かれた　もとい、疲れたように肩を落としながら礼二郎はジャリパンを齧った。

「ほらみる。どーせ乳繰り合っていて遅くなつ　あべしっ」

英斗の下世話な勘繰りを無言のチョップで阻んだ礼二郎。

さすがにこの時間に公共の場で下ネタを繰り広げるわけにはいかない。

「この昼食時間中に深夜帯の話題を出してくれるなよ」

「いちいち痛えんだよ、お前のチョップはよ」

頭をさすりながら愚痴る英斗であったが、すぐに立ち直ると、

「……まあ、しかし、お前と貞子はある意味深夜帯だな」

「ちよつと待て。僕を入れるなよ、れっきとした人間だぞ」

都市伝説ということを考えれば、確かに貞子は間違いなく深夜帯に語るべき人物だが、そこに自分が入っているのがどうにも解せない。

「お前だって似たようなもんだろうが」

だが、英斗はそう思っておらず、呆れも交えて半眼で礼二郎に言い返した。

むつとして言い返そうとした礼二郎だったが、悲しいことに否定材料が見つからず、

「あー、はいはい、どうせ呪殺の効かない特異体質ですよ」

拗ねたふりをしてジャリパンを齧った。

英斗はそんな礼二郎を見てケタケタを笑っていたが、ふと視線を感じて視線を横に向けると、教室の後ろの方で弁当を広げている女子グループが、何やら不透明な視線を送っていた。

その本心の読めない女子の視線に、英斗は怪訝な表情をすると、女子グループは目を逸らした。

「どうしたの？」

英斗の行動を不審に思った礼二郎が、食べ終わったジャリパンの袋くしゃくしゃと丸めながら聞いた。

「なんつーかよ。去年の年末にあった貞子訪問事件（りんぐ第三話「朝ご飯はちゃんと準備しよう」参照）以来、お前妙にみんなから距離置かれてるよな」

英斗の言葉に礼二郎は苦笑した。

「こんなに表面化したのは君のダブルデートの時に貞子さんに運転手頼んだ時からだけだね」

「なんだよ、俺のせいだって言うのかよ？別に俺は言いふらしてなんかいないぞ」

「分かってるよ。僕が浅はかだっただけさ。だが、まあ、大卒に言えば君のせいだ」

礼二郎はのんびりと言うと、コーヒー牛乳に口をつけた。

どこか楽観的な礼二郎に、英斗は眉を顰めた。

「お前、状況分かってる？貞子訪問事件でお前は陰でスタンド使いつて言われてんだぞ」

「大分ニュアンスが違う気がするんだけど？傍に立ってるわけじゃないし、立ち向かうべき困難とか、そんな仰々しいものないし、それに」

「もういい」

締まりのない顔で笑う礼二郎に、英斗は苛立ちを覚えた。

「あとな、礼二郎。思井鐘双子の失踪。あれ、お前とナルトが絡んでんじゃないかってもっぱらの噂だぞ。何せ姉の利伊沙と最後に話をしたのはナルトだって話だし。そもそもお前ら岬トンネルに妹の幽霊を探しに行ってるしな」

「そうだね」

「なあ、何があつたんだよ、岬トンネルで」

「それは言えないって何度も言ってるでしょうが」

にべもなく礼次郎は突っぱねた。彼の表情を見る限り、答えたくない秘密があるというよりは、単純に思い出したくないといった感じだが。

英斗も礼二郎がそう答えることは分かっていたらしく、フンと鼻

を鳴らすと詮索の矛を収めた。

礼二郎は半分ほど残っていたコーヒー牛乳を一気に飲み干すと、周囲に視線を向けた。

すると教室で談笑や食事中の生徒の何人かが慌てて顔を反らすのを視界の隅に捉えた。

疑惑と好奇。

恐らくはそんなところだろうと礼二郎は思った。

貞子訪問事件の時、礼二郎は冬休みを越せば皆の関心は他の所に行っているだろうと思っていたが、こうも立て続けに怪異に巻き込まれていると、そももいかにらしい。

あまり目立つことが好きではない礼二郎にははた迷惑な話だが、この状況の一端を担っているであろう都伝倶楽部をやめようとは露ほども思っていないかった。

少なくとも、駆け落ちした当時、姉と貞子さんに何があったかを知るまでは…。

「おーい、どうした？顔が怖いぞ」

「え？」

英斗の声で仄暗い思考から浮上した礼二郎は、慌てて笑顔で取り繕った。

「大丈夫かよ？顔色がよくねーぞ」

心配そうに顔を覗き込む英斗から身を反らしながら礼二郎は困ったように苦笑した。

「……心配してくれるの？君らしくもない」

「だから茶化すなつての。そら心配くらいするだろうが。ただでさえお前の日常は急速に非現実化してるんだからな」

いつになく真面目な英斗に、礼二郎は本当に困ったように頭を掻い

た。

礼二郎と英斗が会話する三十分ほど前。

石丸町立高等学校から少し離れた住宅街にあるツタだらけのコンクリの家　本拠地では、長い黒髪をポニーテールし、いつもの白い長袖のワンピースにフリルのついたエプロンを着けた貞子が、いつも通りの生気ない顔でキッチンに立っていた。

礼二郎の学校登校と同時にこの本拠地に遊びに来ていた貞子は、本拠地に居候中の口裂け女　加島玲子があまりにも料理下手だということを知り、率先して昼食を作るためキッチンでまめまめしく動き回っていた。

「悪いなー。丸投げしちゃって」

戦力外通告を受け、大人しくリビングのソファに腰を下ろして文庫本を読んでいる、紅いワンピースに大きなマスクの女、玲子はマスクの下で申し訳なさそうな顔をした。

貞子は気にしないでといった表情で首を横に振った。

「……そう……言えは……メリー……ちゃんは？」

少し前に電話で来ることを予告しながら現れ、逆に玲子と貞子に返り討ちにあい、そのまま居ついてしまった呪いのアンティーク人形　加島メリー（返り討ちの後、すっかり玲子に懐き、同じ名字を名乗りたいというメリーの希望からこういう形になった）が先ほどから姿を見せないなので、貞子は玲子に聞いた。

「ああ、あいつなら……」

玲子が答えようとした矢先に、

「ま〜ち〜や〜が〜れ〜！」

と間延びした幼女の声が聞こえた。

貞子が声のした方へ振り向くと、風呂場続く洗面所からリビングの方へ、フリルをふんだんにあしらったピンクのドレスを着たアンティーク人形のメリーが可愛い顔に似合わない鬼の形相でこちらへ迫っていた。

「……………したの？」

包丁を持ったまま思わず身構える貞子に、メリーはこれまたアンティーク人形には似合わない新聞を丸めて棒状したものをブンブンと振り回し、

「ゴキブリです〜！」

と貞子の問いに答えた。

見ると、人差し指ほどの黒光りした虫が、可愛い殺し屋に追われながら楽園という名のキッチンに向かって爆走していた。

ゴキブリと聞いて貞子も目の色が変わった。

キッチンに立つ呪いの塊に、流石のゴキブリも何か不穏なものを感じたのか、ぴたりと足を止めた。

貞子は、金縛りに遭ったかのように動かないゴキブリに包丁を向けた。

すると、金縛りに震えるゴキブリはひと際大きく痙攣したかと思うと、そのままあっけなく絶命した。

ようやく追いついたメリーが、死んだゴキブリと貞子をきょとんとしながら交互に見た。

そんなメリーに、貞子は不敵に　もとい、不気味に笑い、

「また……………つまらぬ物を……………呪って……………しまっ……………た」

と、どこかで聞いたような台詞を口にした。

メリーは、貞子の笑みにみるみる高揚した。

「す、すごいです！貞子さんの呪いって、条件無視の上に無差別なんですね！」

メリーが口走ったように、基本的に呪いを発動させるためにはそれ

なりの手順を踏まなければならない。メリーは電話による予告。玲子は「私、綺麗？」の質問がそれにあたる。

結果的に、これらの手順にリアクションが出来る者が呪いのかかる対象であり、それ以外　つまりゴキブリなどは対象外となる。

これらを踏まえると、貞子はそのすべてを無視して呪いを使ったことになる。

キラキラとした憧れの視線を向けられて、恥ずかしそうに顔を反らす貞子。

だが、まんざらでもないようで、照れ隠しに始めた包丁捌きはかなりリズムカルだ。

「……………あんた、ビデオからじゃないと呪えなかったんじゃないかってっけ？」

この様子を本を読みながら聞いていた玲子は、訝しげに貞子に聞いた。

彼女が疑問に思った通り、彼女にもVHSという呪いの条件はあるはずなのである。

「……………最近……………気付いた……………んだけど……………」

どうやら貞子が言うには、あのビデオは彼女の呪いを簡易的に扱えるようにした装置ということらしい。

その話を聞いた玲子は、読んでいた本を閉じるとマスクの下の顎に手を当てた。

「……………つまりこういうこと？本当はその気になれば、その姿を見ただけで即死させることができるくらいアンタは危ない怨霊だと、間接的に　つまり、鏡越し、あるいは写真、映像に映った呪いをかけようとしているアンタを見せると強制的に一週間で見た対象を殺せると気付いた誰かが、アンタを利用しようとして、ビデオに定着させた　と」

玲子の推測に、貞子はごくごく頷いた。

「でもそれだと、宮沢さんみたいな　呪殺無効の能力がないとちよつと無理がありませんか？」

ティッシュの置いてあるテーブルに手の届かないメリーは、持っていた新聞紙でゴキブリを丁寧包みながら言った。

「なるほど……メリーの意見はもつともだな　案外あいつが犯人だつたりしてな」

冗談のつもりで言った玲子だったが、貞子は眉間に皺を寄せると玲子を睨みつけた。

「レンチ……君は……そんな……ことしない」

「加島さん、さすがにそれはデリカシーがないです」

貞子に睨まれ、ゴミ箱にゴキブリを包んだ新聞紙を捨てていたメリーにも非難され、玲子は、

「悪かったよ！冗談だ、冗談！」

と、バツが悪そうに文庫本ですでにマスクで隠れている顔をさらに隠しながら言った。

玲子の謝罪を聞いてもどこか憤然とした態度が抜けきらない貞子は、まな板にあるニラを今度は乱暴に切り始めた。

「……レンチ……君が……犯人なら……寝言で……あんなこと……言わ……ない……もん」

ぶつぶつと言っていたが、玲子とゴキブリを捨て終わって玲子のいるソファをよじ登っていたメリーは、互いの顔を見合わせた。

寝言？

二人の内心は一つの疑問で一杯になっていた。
それはつまり、

「礼二郎とアンタって、一緒に寝てんの？」

「宮沢さんと貞子さんは一緒に寝てるんですか？」

というものであった。

いや、もちろん朝とかに礼二郎を起こしに行った時に聞いたのかもしれないという可能性は捨てきれない。

だが、朝ごはんはもっぱら礼二郎が作っているということを二人

は知っている。

そのため、礼二郎が貞子を起こしに行くことはあっても貞子が礼二郎を起こしに行くようなことはまずないと思っている。

聞く可能性があるとすれば、夜に寝入りが早い礼二郎のそばにいたということ。それはつまり一緒に寝ているととってもおかしくはないのではないか。

その結論に瞬時に到ったメリーと玲子は、二人で目配せをしてどちらが聞くかを譲り合い、結果、譲り合いに負けたメリーが聞くことになった。

ソファの上で立つと、両手をもじもじさせて、とても聞きづらそうに口を開いた。

「あのう……貞子さんは一緒に……寝てるんですか？」

声量はかなり控えめなため、それじゃ聞こえないと玲子が口を出そうとした時、

「……一緒に……寝てる……っていう……より……忍び……込む……みたいな」

貞子は案外地獄耳だったらしく、しつかり答えてくれた。

とらえようによってはかなり問題のある回答だったが。

「忍び込む……貞子さん、礼二郎さんに夜這いしてるんですか？」

このアンティーク人形は意外とハートが強いらしい。玲子が聞きにくいと思っていた質問をこうもあっけなく無邪気にできるとは。

恐らく最初の質問に答えてくれたので、調子に乗ったのだろう。

「よ……！」

一方の聞かれた貞子は青白い顔をほんのりと赤くすると、包丁を持ったまま危なっかしくわたわたし始めた。

「そ………そういう……の……じゃ……ない……」

「？………じゃあ、どういふのだよ？」

素直に答えてくれる貞子に、玲子も調子に乗ってさらに問い詰める。

「………」

「………」

「……………」

三人（？）の都市伝説がしばし沈黙して、

「だって……………レンチ…君って……………あたたくて……………気持ち…いい…から……………つい」

「……………」

「……………」

貞子の回答に玲子とメリーは顔を見合せてさらに沈黙し、再び貞子の方へ視線を向けた。

そして呆れたような半眼の視線で、二人は同時に言い放った。

「夜這いじゃねーか」

「夜這じゃないですか」

「ち……………ちが……………う！」

その後、貞子の拙い説明により、ただ単に礼二郎の布団に潜り込んで一緒に寝ていただけだということが分かった。

それと同時にわかったのは、今朝、仰向けに寝ていた礼二郎が、自分に覆いかぶさるようにして寝ていた貞子に対してすごく動揺したらしい。

朝ごはんも食べられず、ろくに会話もできなかったと貞子はしょんぼりしながら言った。

それを聞いた玲子はニヤリと意地悪そうに笑い、メリーは微笑ましそうに笑った。

「ほほう、いいの頂いたわ。これで礼二郎をしばらくはからかえそうだ」

「本当に仲がいいんですねえ、宮沢さんと貞子さん」

「……………あう」

ここにきてようやく自分が墓穴を掘っていることに気がついた貞子は、恥ずかしそうにうつむくのだった。

「ねえ、あんた大丈夫？」

ぼんやりとしていた私は、隣の席に座っている茶髪でブレザーを着崩した少女　百々天使に、横の席から顔をのぞかれて我に返った。
「え？」

慌てて黒板上の時計を見ると時刻は午十二時四十分を指していた。

花岡町立高等学校の二年三組の教室の窓側最後尾で昼食の弁当を食べていた私は、弁当を半分以上残したままぼんやりと虚空を見つめていたようだった。

「はあ、あんた今日ぼんやりしすぎい。午前中二度も指されたのに二度ともボーとして聞いてないし」

横で指定のスカートを短くしているのにも拘らず、大股開いてメロパンをかじりながら言う天使に、私ははしたないと思いながらも、「ごめん、昨日変な夢見たせいかな、なんか気が入んなくて」と言った。

「夢？」

天使が訝しげに聞き返したので、私は少し話すかどうか迷い、

「うん、もう覚えてないんだけど、なんかこう、怖い夢」

結局、食事時にする話でもないと思ったのではぐらかした。

「ふーん、悪夢ってやつかなあ。私はそう言うの見たことないなあ」

天使がそんなことを真顔で言うので、わたしは茶化すつもりで、

「百々は美男子に囲まれるような逆ハーレムとかの夢見てそうだよ
ね」

と言ったら、天使は目を見開いた。

「　　何で分かったの?!」

「え…マジなの……」

思いのほか当たってしまったって「すげえじゃん！超能力？！」と興奮する天使に、私は苦笑を浮かべながらも内心大いに引いていた。

しばらくして天使は落ち着くと、最後のメロンパンの人かけらを口に放り込みながら、

「あ、そーだ。悪いんだけどさあ、愛保お。今日の日直代わってくんない？」

本人は可愛いと思っているぶりっ子調で私に言って来た。

「え？」

「いやさあ、うちの彼氏がどーしても会いたいって言うからさあ、ってどうしたの？そんなに驚いた？」

今度は私が見開く番だった。

「貞子さーん、迎えに来たよー」

午後四時。

石高からそう離れてもない住宅街にある蔦に覆われたコンクリの家『本拠地』についた礼二郎は、自転車を塀の内側に立て掛けると、玄関を遠慮なく開けながら中に声をかけた。

「あ、礼二郎さん。いつも御苦労さまですー」

すぐにリビングから顔を出したのは、アンティーク人形のメリーだった。

ちよこちよこと歩きながら玄関の方へ来るメリーに、礼二郎は屈みこんで視線を合わせると、

「あれ？メリーちゃん一人？」

「あ、はい。わたし一人ですよ」

にこやかに言うメリーに、礼二郎は可愛いなあと和みつつ、

「それで、あの二人は？」

「あー、二人とも突然『プリ……ン……食べ………たい』『お、いいな！よしちよつとコンビニに買いに行ってくるか！』って感じでプリンを買いにコンビニへ」

律儀にモノマネも挟みながら言うメリーに、礼二郎は困ったように頭を抱えた。

「あー、もう。あの二人は自分の容姿つてもんをちよつとは考えて行動して欲しいんだけどなあ」

「まあまあ。そう困らなくとも。何でしたら中で待ちませんか？コーヒーでも飲みながら、あ、残り物ですけど、クッキーも確かまだあまってたと思いますし」

「うーん……しょうがないか。ごめんね？なんか気を遣わしちゃって」

礼二郎が申し訳なさそうに言うと、

「いえいえ！実はわたしも一人で待つの退屈してまして」

メリーは愛くるしい笑顔をみせながら首を振ってそう言った。

それを見て礼二郎も一緒に微笑むと、二人はリビングの方へと足を向けた。

私は、花岡町立高等学校の二年三組の教室を出た途端、冬の空気がブレザー越しに体を撫でて思わず身震いをした。

時刻は午後五時十二分。

すでに教室には誰もおらず、私は今日日直のはずだった刃香治亜鳴は部活、百々天使は彼氏とデートと言う事でばっくれてしまったので、仕方なく私が日直をする羽目になり、帰りが大幅に遅れた。

学生鞆を背負い直し、学校指定の灰色のマフラーの位置を直すと、学級日誌を片手に職員室へと向かう。

ストーブのきいた職員室で三組担任のノッポな教師、田丹牡先生に愛想無く日誌を手渡すと、そそくさと帰路についた。

「うわぁ……さむ」

外の予想以上の冷え込みに思わず顔を顰めて呟く。

私の家は学校から四キロ先にある住宅街だ。本来は自転車通学なのだが、生憎タイヤがパンクしており、今は自転車屋に直しに行くのが面倒くさいのであると徒歩通学を続けている。

校門を出て右に折れると、後はひたすらまっすぐ。

石丸町の町境の近くまで歩くのだが、この辺になると道路も舗装されておらず、砂利道を電信柱に付いているか細い電球の光を頼りに歩くことになる。

時間を確認すると午後五時四十分。

私は帰り道の途中にあるコンビニエンスストアで、思いのほか長い間、時間をつぶしていた。

現在立ち読み中だが、手に持っている雑誌はすでに三度読み目に入っている。

それでも私が雑誌を置くなり買うなりして出て行こうとしないのはひとえにあの悪夢が絡んでいるからである。

冗談じゃないわ。コンビニに入るところまでは見た夢とまんまじゃない！

そう、今のところいったいどういう現象なのか理解に苦しむが、とにかく放課後からこのコンビニに入るまでの出来事がまるで瓜二つなのである。

もはや既視感などと悠長に驚いている場合ではない。

このまま行けば私は確実に何者かに追われ、そして。

はっ、そんな馬鹿な……。どこぞのホラー番組じゃあるまいに。

想像したことを頭で否定はしてみたものの、どこかつつかえたようなしこりがぬぐい切れてない。

何かが、理解できない何かが私にこのコンビニからであることを拒んでいる。

行けば、お前は死ぬ。

まるで根拠が無いのに、そんな言葉が浮上する。

そんな思考に苛まれ、雑誌を持つ手に無意識に力が入ってしまい、しまったこれお買い上げじゃんなどと私が束の間の現実逃避をしていると、

「ここで最後だからな」

「うん……ここで……最後……にする」

コンビニの扉をあけながら、女が二人入ってきた。

私は何の気なしに彼女らの方に目をやり、再び雑誌に視線を戻そうとして 戻せなかった。

まるで死人のような青白い手足、腰近くまである長い黒髪はうつむき加減の顔を完全に覆っている。そんな幽霊のような女と、背が

高く、トレンチコートを着た口に大きなマスクをした女。

そんな彼女らを見て、私が最初に思ったことは、「何この女たち。キモッ」だった。

恐らくコンビニにいたその他のお客や店員も同じ考えに至っているようだが、関わらない方が吉と思つてか、皆意識して見ないようにしている。

彼女らは奥のデザートコーナーへ行くと、あれこれ物色しているようだった。

「あつたか？」

「……うん……あつ……た」

「はあ。やつとかよ。たかがプリンで隣町までとか、私らつてもしかしなくても今すげーアホなのかも」

チラリと聞こえた会話からあの二人は隣町の住人らしく、この系列のコンビニにしか売っていないドデカプリンが目当てらしい。

わざわざプリンのために隣町まで来るところは確かにアホらしいが、私も季節限定のナンチョリソなる商品を隣町まで買いに行った経緯があるため、手放して馬鹿に出来ない。

そんなことを思いながら携帯電話の時計を見ると、午後五時五十分になっていた。

コンビニの外はすでに日は沈み、ほの暗い闇が辺りを浸透し始めている。

私は力みすぎて駄目にしてしまった雑誌を手にもレジに並ぼうとして振り向くと、

「ひっ！」

例の幽霊のような女が二歩ほど手前でレジ袋に包まれたプリンを片手にこちらをじつと見つめていた。

生気のかけらも感じないその瞳に私は声にならない悲鳴を上げると、その場で金縛りにあつたかのように動けなくなった。

女は半分以上髪に覆われている顔で、唇をどこか卑屈そうに釣り上げたてクツクツと不気味な笑いを響かせていた。

私は正直怖くて泣きそうになっていたのだが、女の後ろからさつきまで一緒にいた大きなマスクの女がおもむろに現れ、女の頭を遠慮なく引つ叩いた。

「……痛」

意外と可愛い声で呻いた幽霊のような女が、頭を摩りながら振り返ると、マスクの女は、

「余計にビビらしてんじゃねーよ!」

ときつい声で女を叱咤した。

「……だつて」

頭を摩りながら不服そうにつぶやく幽霊のような女。何なんだ?こいつら。

マスクの女はその後さらに一言二言小言を言うと、私の方を向いて「分かっているとは思うけど、もうしばらくは出るなよ?」

と真剣な目つきで言ってきた。

「え?」

それってどういう事?と、私が聞く前に、マスクの女は幽霊のような女の襟首を掴むと、そのまま引きずるようにコンビニを後にした。

分けわかない。

特に悪いことしたわけでもないのに、こつも不気味なことが連続的に周りで起こることに、私は恐怖を感じると同時に妙な苛立ちを感じていた。

とりあえずレジに雑誌を乱暴に置いて、会計を済ました私は、すぐにコンビニを出ると、住宅街手前にある十字路の歩道の前まで憤然した足どりで歩いていた。

とそこへ、対面からたつた今歩道を渡りきった男がこちらを見た途端に顔色を変えた。

そのあまりにもあからさまな変化だったため、私は思わず立ち止って彼を凝視した。

男は私としばし目を合わせると顔色を赤黒く変化させ、目と眉を吊り上げた。

明らかに激怒しているその男に、私はどうしたらいいか分からず黙っていると、男は私を睨みつけながら大声で怒鳴った。

「夢と違っじゃねーか!」

都伝倶楽部活動記録その伍「男女間のイザコザは関わないのが吉」(前書き)

ようやく第五話までかけました。長かったあ

都伝倶楽部活動記録その伍「男女間のイザコザは関わらないのが吉」

二月五日、午後十二時三十分。

教室で宮沢礼二郎と不知火英斗が仲良く昼食をとっている中、おさげでチビな都伝倶楽部の自称部長である渦巻樹々は屋上にいた。寒風吹き荒れる寒空が広がる誰もいない屋上で、セーラー服の上からはおっているカーディガンの裾を直しながらメロンパンと牛乳というしょぼい昼食を早々に食べ終えた樹々は、眉間に皺を寄せて携帯電話と睨めっこしていた。

『件名：手伝ってくれない？』

本文：今日、ウチの彼氏が浮気しそうだから尾行したいんだ』

このメール画面に書かれた穏やかとは言い難い内容の文面に、樹々は大きく嘆息した。

この全くもって穏やかではないメールを送ってきたのは、彼女の友人である石丸町立高等学校の二年二組に在籍する仙人掌佐緒林である。

学習委員長を務め、何かと真面目な性格であり、セミロングに眼鏡とキツめのイメージがあるが、ややぽっちゃりした体形がそのキツさを程よく中和しており、さおりんというあだ名のような愛くるしい名前も相まってクラスには慕われている人物だ。

同じ学校内なら直接会って話せばいいのだが、生憎くそ真面目だけが取り柄のはずの佐緒林は、どういうわけか学校に着て早々、ろくに授業も受けずに早退していた。

『件名：落ち着きなよ』

本文：あなた、病気で学校早退したんじゃないかった？」

『件名：』

本文：ごめん、それ仮病なんだ。今日メールで他の女とデートする約束をしていたからもう我慢ならなくなっちゃって。早めに尾行の準備して何としても現場押えようと思ったから！」

『件名：』

本文：尾行って（汗）まあ、あなたが早退するのは別に構わないけど、どうやって知ったのよ？そんな自分の彼氏が浮気する情報なんて。まさか彼氏の携帯電話の受信メールを自分の携帯に転送してんじゃないでしょうね？」

『件名：流石！』

本文：そうよ。転送してるわ。だから知ったの。それでナルトちゃん、現場に踏み込むにしてもさ、一人じゃちょっと精神が持たないかもしれないから一緒にいて来てくれない？」

「勘弁してよ」

佐緒林のメールを読んで、樹々は思わず呻いた。

この佐緒林の彼氏、兼坂楽気は現在隣町である花岡町に住んでいる、丸顔で手足の長い、ヒョロヒョロとした男だ。

中学までは石丸町に住んでおり、樹々や不知火英斗、あと何かと生徒間の話に疎い宮沢礼二郎も中学時代彼と同じクラスになったことがあり知っていた。

決して悪いやつではないのだが、優柔不断と言つか女にだらしないと言つか、正直樹々はかなり苦手意識を持っていた。

『件名：ナルトじゃない、渦巻だ。』

本文：悪いけど、学校を早退するつもりはないから。それにそんなに早くからスンバイしなくたって、どうせド田舎な花岡町での高校生同士のデートなんだから、わざわざ尾行しなくたっていいんじゃない？大体どういうルート行きそうか見当つくでしょ？狭い町なんだし」

超常現象や心霊スポットの検証ならまだしも、思井鐘双子失踪の一件で他人の恋愛事にはあまり関わりたくなくなってしまった樹々は、自分に行かない事を告げてそのかわりに適当にアドバイスすることにした。

『件名：一緒に行つてはくれないの？』

本文：そうは言うけど、花岡は石丸と違って広いからルートの見当なんてつかないよ」

『件名：』

本文：花岡の高校生のデートなんてどうせ金のない貧乏デートなんだから最後はどっちかの家でのおんびりつてのが相場でしょ？そうになると母子家庭で母親がお水の仕事で夕方から誰もいなくなる兼坂の家が都合いいって思わない？』

『件名：』

本文：すごいすごい！なんか渦巻にそう言われるとそんな気がしてきたわ！じゃあ、私これから彼の家に行くね！』

「……………え？これから？」

樹々は顔を顰めた。

まだデートも始まってすらいないのに？

『件名：』

本文：今行つたつてあいつのお母さんが寝てるだけで、あいつ学校でいないでしょ？何する気よ？』

『件名：

本文：何って決まってるじゃない？カメラとかボイスレコーダーとかを設置すんのよ。言い逃れない証拠を絶対に掴んでやんだから！』

現場踏み込んで問い詰めるんじゃない？てか母親がこの時間は居るってさっき言ったじゃん、と樹々は思ったが、どうも佐緒林は普通にメールしているように見えて内心混乱しているらしい。

『件名：

本文：そんなもん、たとえ撮れても大した証拠にはならないわよ。それより現場踏み込んだ方が早いわ。私も学校が終わった後なら付き合っただけから、余計なことしないで』

彼女が下手に動くと警察沙汰になりかねないと判断した樹々は、渋々そうメールした。

午後四時十五分。

プリンを買いに行った貞子達の帰りを都伝倶楽部の本拠地のリビ

ングで待っている礼二郎は、ミルクと砂糖が均等に入ったコーヒ―を飲みながらアンティーク人形のメリーとおしゃべりに興じていた。「礼二郎さんは、礼二郎さんみたいな能力を持った別の人と会ったことってあるんですか？」

「僕と同じ能力？ いや、ないけど」

「そうですか？」

「？……どうしてそんなこと聞くの？」

「あのですね、今日のお昼に貞子さんたちとお話してたんですけど、貞子さんってわたしたちの中じゃずば抜けて呪力が高いんですよ」「うん、そうみたいだね」

礼二郎もそれは何となく接していて理解していたので肯定した。

「お昼の時にも話したんですけど、貞子さんって呪いの発動条件がないみたいなんですよ」

「……………」

「あ、呪いの発動条件っていうのはですね、えっと」

「いや、それは知ってる」

礼二郎はメリーが自分の表情を見て勘違いし、発動条件の説明しようとするのを制止した。

「メリーちゃんの場合は電話で、口裂けさんは「私、綺麗？」って質問がそれにあたるわけでしょう？」

「よく知ってますね。……………あ。ってことは気付いてました？」

「まあ、何となくは。それも踏まえてナルトさんには情報集めてもらってるんだけど、あの人他人のトラブルに首突っ込みまくってるせいで遅々として進んでないんだよね」

渋い顔をして愚痴る礼二郎に、メリーは可笑しそうに肩を揺すった。「その様子じゃ、わたしの元持ち主や玲子さんの轢き逃げ犯はいつになるかわからないですね」

ジリリリリリリッ。

そう言つて笑い合う二人を遮るように、『本拠地』の黒電話が鳴り響いた。

「……………。電話ですね？」

「何だかいやな予感しかないな」

礼二郎はそう言いながら黒電話の前に立つと、おもむろに受話器を取った。

夕暮れの花岡町へ向かう製鉄現場沿いの十字路、通称鉄屑通りで、樹々はセーラー服にカーディガン、学校指定のマフラーをしっかりとしてペチャンコの学生鞆をぞんざいに肩にかけて立っていた。

お昼頃に佐緒林からメールをもらってから、ここで待ち合わせる手はずになっているはずが、肝心の佐緒林がいつまでたっても来なかった。

「まったく、何やってんのよ」

携帯電話の時計を見ながら愚痴る樹々。時刻はここへ着いてから約十五分が経過しようとしていた。

イライラしながらなおも突っ立っていると、佐緒林らしき人物が自転車でこちらへ走ってくるのが見えた。

「あー、来た来た。……って何よあれは」

向こうからは十字路が角になって見えていないようだが、なにやら重そうなシヨルダーバックを抱えていた。

そのせいか、遠目からでも息が上がっているのが分かる。

私を自転車に乗せて向こう町まで行ける体力あるのかしら？

自転車に乗れない樹々が不安を胸中で呟いていると、一生懸命自転車を漕いでいる佐緒林の前に、脇から立ちふさがる様にして若い男が飛び出してきた。

佐緒林が驚いて急ブレーキをした瞬間、さらに二人の男が佐緒林の自転車を囲むように立ち塞がった。

男たちはみな若く、だぼついた服を着ており、一見して不良だと分かる格好をしていた。

「な、何なんですか！？」

佐緒林の悲鳴じみた声が、遠いここまで聞こえてきた。

ま、まずいわね、これは。

ここまでの状況を十字路の陰から見ていた樹々は、あせった表情をしながら携帯電話を取り出した。

アドレス帳を開いたところで車のエンジンが聞こえ、樹々はハッとした顔で佐緒林の方を見ると、黒塗りのワゴン車が来ていた。

両脇を男たちに囲まれ、口を塞がれている佐緒林がその車に強引に乗せられた。

まずいますまずい！！

目の前で友人が拉致されてしまった樹々は、とにかく自分一人ではどうにもならないと判断し、警察に連絡しようとして かけるのをやめた。

車の運転席に座っている茶髪の男に見覚えがあったのだ。

「へ、へ、変態だ……。変態が絡んできた！佐緒林ピーンチ！」

何かと卑猥な噂が絶えない石高OBは割と多いが、その中でも群を

抜いて変態だったと言われる男がいる。

それが、今運転席に座っている男、向垣内十字だった。

事情通な樹々は、彼に纏わる生々しくもゲスな伝説をいくつか知っており、その中でも特にゲスだったのは当時付き合っていた彼女を男四人でまわした拳句、山道に捨ててくるというものだった。

数々あるゲスな伝説もあくまで噂の域を出ていないため、彼が警察に厄介になったという話は聞かないが、そんな変態な彼が今、運転席にいるという事は少なくとも営利誘拐といった目的で佐緒林を誘拐したのではないことは、樹々にも十分に察することが出来た。

警察に通報しても、事実確認やらなにやらで間違いなく探し出す頃には拉致した男たちにやられている可能性が高い。

そうなる前に警察より素早く動いてくれる人間に連絡しなくては！！

樹々がそうこう考えを巡らしている内に、黒塗りのワゴン車はウターンして走り出した。

ナンバープレートを頭の中で復唱しながら電話をしようとして、彼女は、

「あ！連中の目的地がわかんないんじゃないじゃない！」と今更なことを口走った。

徒歩の樹々が走る車の尾行など出来るはずもなく、途方に暮れていると、

ジリリリリリリッ！

だしぬけに樹々の携帯電話が鳴り、彼女がおもむろに携帯電話の画面を見た。

「え？」

そこに表示されていたのは警察より先に電話しようとしていた相手、

宮沢礼二郎の電話番号だった。

『もしもし？都伝俱樂部の人ですか？』

『本拠地』のリビングと玄関を繋ぐ廊下に設置された黒電話に出た礼二郎の耳に、可愛らしい感じの男の子の声が聞こえてきた。

あれ？貞子さんやナルトさんじゃなかったのか？

予想していた声と違ったため、礼二郎は警戒心を高めて、

「そうですが、そちらはどなたですか？」

と聞き返した。

その礼二郎の対応で彼の肩にしがみついて聞いていたメリーも、表情を硬くしながら成り行きを見守った。

『初めまして。僕、悟って言います！』

「……………。はあ。悟君ですか」

『はい！』

「……………」

『……………』

「……………」

『……………』

「……………」

『……………。あー、えっとお、僕、悟って言うんですけど』

「ええ。聞きましたよ。それで何の用ですか？」

『……あ、あれ？リアクション違います！！悟なんですよ？！悟！』

「は？」

全く意味が分かっていない礼二郎に、悟と名乗る男の子は何故か動揺したようだった。

『いやいやいや！そちらは都伝俱樂部ですよね？！』

「そうですけど」

『な、なら僕が悟って名乗ったらピンと来るものがあるんじゃないんですか？』

「……。はあ。ピンと来る……ですか？」

礼二郎が理解できないでいると、肩口にいるメリーが礼二郎のもみやげを引つ張って説明を求めた。

礼二郎は「ちよつと待つてくださいね」と悟と名乗る男の子に言うのと、受話器を手で押さえて、

「何？メリーちゃん」

「いったい誰なんですか？」

「それが……悟君って子から電話なんだけど」

「悟君……ですか？」

「うん、悟君だって。メリーちゃん知ってる？」

「知るわけじゃないですか……。わたし都市伝説ですよ？」

知らない理由としてはおかしい返答であったが、礼二郎は納得したように頷くと、

「だよね？都市伝説がこんな可愛い感じの男の子と知り合いなわけじゃないよね」

「そうですよ！わたしこう見えても呪いの人形なんですから！

あ、もしかしたらナルトさんとかに用なんじゃないんですか？」

「そんな感じにも聞こえなかったんだよね。……それに、なんかこっちが何かを察してくれないからプリプリ怒ってるし」

「あゝ。いますよね、そういう子。相手に合いの手入れてもらわ

ないと会話が成立しないっていうか」

「そうそう。ちょっと困るよね」

「それはもう困りますよ。わたしなんか空気読めないから特に困ります」

「うんうん。つまり彼はこまったちゃんなわけだ」

「間違いありませんね。彼はこまったちゃんです」

「うん、こまったちゃんだなあ」

話がまとまらないまま、何となく二人で納得し合っていると、受話器から悟が可愛い声を張り上げた。

『こらあ！！ボケボケした会話してんじゃない！！』

その声を聞いて礼二郎は再び受話器を耳にあてた。

「あ、ごめん、聞こえてた？」

『聞こえてはいませんが、悟ったんですよ！何ですか、こまったちゃんって！僕が言いたいですよ！あなたたちに！』

「元気のいい子ですね。悟君は」

メリーがそう言うと、

『に、人形に子供扱いされたあ』

悟はさめざめと泣いている風な声を出した。

「ちよつと待つて。君、なんでメリーちゃんが人形だってこと知ってんの？」

先ほどの会話に疑問を抱き、礼二郎は眉を寄せて訝しげに聞いた。

それを聞いた悟は、泣いているふりをあつさり辞めた。

『だからさつきもいったでしょ。悟ったんですよ』

その言葉を聞いて、礼二郎はハツとした。

「…………。もしかして、君、都市伝説の悟君？」

礼二郎の言葉を聞いて、受話器から可愛い声で長い長い溜息が聞こえてきた。

『やっとうですか。もう、気付くの遅すぎやしませんか？』

都市伝説の悟は自らの存在を肯定した。

正確には都市伝説のさとるくんと言われており、特定の条件下で

呼び出せる現代妖怪の一つである。メリーさんの要領で呼び出し主の背後に現れてこちらの質問を何でも答えてくれるというものであり、質問を用意していないと彼と一緒に魔界に連れていかれると言われている。

「えっと……何で？」

横で聞いていたメリーが怪訝な表情でつぶやく。

本来前述したとおり、こつくりさんと同様にオカルト的なスタンズでいうところの召喚系の化け物である彼は、こちらから行動を起こさないと現れることはないのだが、何故かこの電話の悟君は自分から行動を起こしてきた。

メリーはこの部分を含んだ問いかけをしたのだ。

『まあ、確かに呼ばれない限りは出るつもりはないのですが、別に呼ばれなくたって僕はいつでもどこでも電話を媒体にして存在を現すことができるんですよ』

ちよつと質問とずれたことを得意げに語る悟に、

「ふーん。で、何でうちに電話してきたの？」

礼二郎は特に気のない返事をする、ようやく要件を訊ねた。

が、悟はそんな礼二郎の質問などまるで聞いておらず、

『り、リアクションがホントに薄い……。やっぱり実体化してる口裂け女や貞子にはインパクトでは勝てないのかぁ……。ちえ』

と嘆いていた。

悟の嘆きを聞きながら、礼二郎はどうしてこう都市伝説の連中は人をおどろかすことにこうも一喜一憂するんだろうかとぼんやり思い、

「あ、今わざとわたしを外して言ったでしょう!？」

と、メリーが悟の言葉を聞いて耳元で怒鳴った。

「メリーちゃん、うるさいよ……。まあ、何でもいいけど、用事ないなら切るよ?」

質問に答える化け物なのに、ろくに答えもせずに自分の事ばかりしゃべる悟に、いい加減面倒になり始めた礼二郎は、ぞんざいな感じでそう言った。

『待つて待つて！何でそんなに冷たいの！？仮にも都伝俱樂部ならもつと歓迎してよ！都市伝説なんだよ、僕は！』

「いや、もう何か相手するの疲れたって言うか」

『うわっ、酷い！君が呪殺無効の特異体質じゃなかったらとつくに呪い殺しているところろだよ！まったく』

「おー、悟ってるね」

悟に呪殺無効の体質を当てられて、礼二郎は棒読みの関心を示した。
『心がこもってない！』

そのうち齒ぎしりでもしそうな勢いの悟に、うんざりしている礼二郎。

その肩にいる礼二郎にうるさいと言われて黙っていたメリーが、ボソツと口を開いた。

「もしかして……悟君……入部希望なのですか？」

『！？』

「おいおい、メリーちゃん。それは流石にないでしょう？だって都市伝説のさとるくんだよ？こんな俱樂部に入部して一体何の得が

」

メリーの予想を鼻で笑おうとして、悟の反応がないに気づいた礼二郎は押し黙った。

『……………』

「……………」

『……………』

「……………。マジなの？」

『だって！口裂け女がこの俱樂部すげえ自慢してくるんだもん！そりや最初はさ、呪ってなんぼの僕たちが楽しそうにするとか言語道断だと思ってたけど、嫌がらせみたいにこの黒電話に何度も呼び出しては貞子さんやメリーちゃんと楽しそうにしてるのを聞かせてさ！何なのあの人？！鬼なの？！僕だつてずっと一人で寂しかったのを耐えて頑張ってきたのに！人が羨むのを見るのがそんなに楽しいのかあの口裂けは！わざわざ電話してくるなら仲間に入れ

てくてもいいじゃないですか！何で毎回放置なんだよ！」

どうやら、口裂け女の玲子にずいぶん前から煮え湯を飲まされ続けていたらしい。

悟は、涙声で堰を切ったように捲くし立てた。

全く何やってんの、あの人は。

と、礼二郎は悟の話を聞きながら、胸中で嘆息し、その横でメリーが不憫そうに黒電話を見つめた。

「そういうことなら、部長のナルトさんには事後承諾になるかもしれないけど、入ってもいいんじゃない？」

何となく可哀想になったので、礼二郎はそう言った。

『本当ですか？！やった！』

礼二郎の言葉を聞いて素直に喜ぶ悟。

そんな無邪気な声を聞いて礼二郎は、またイメージしてたの違うとか言つて落胆するんだろうなあ、ナルトさん　と内心思っていると、

『やっぱ落胆されちゃいます？』

礼二郎の思考を悟った悟が困ったように言った。

「何でもかんでも悟るなよ」

『いいじゃないですか。そういうものなんですから、僕は。でもやつぱり部長さんには気に入られた方がいいですよね？』

「うーん」

「わたしみたいにしゃべる人形は一発で容認されたけど、悟君は下手したら近所のいたずら小僧と勘違いされるかもですね」

メリーが可笑しそうに言うと、悟はしばし黙った。

「……………。悟君？」

「もしかして怒っちゃいました？」

沈黙が長いので、二人が顔を見合せて首を傾げていると、

『悟りました！！』

だしぬけに悟が大声でそう言った。

あまりの大声に、礼二郎は思わず受話器を耳から離し、メリーは驚いて礼二郎の肩から落ちそうになった。

「な、何？」

礼二郎が促すと、悟は声高らかに、

『今現在ピンチな部長さんを救えれば、何のわだかまりもなく入部できますよね！』

そう言った。

礼二郎とメリーは、再び顔を見合わせると、

「ナルトさん、今ピンチなの？」

「ナルトさん、今ピンチなんですか？」

と同時に呟いた。

黒塗りのワゴン車が走り去った後、鳴った携帯電話を見て樹々はすぐに通話ボタンを押した。

「宮沢君、ちょうどよかった！今すぐ本拠地に行つて加島さんに黒のワゴン車を見つけて追うように行つてくれない？緊急事態なの！」携帯電話にしがみつく様に捲くし立てた樹々に、

「今口裂けさんは貞子さんと一緒にプリンを買いに行つててつかまらないから、かわりにメリーちゃんを行かせるよ。メリーちゃんが現れれば女の子犯してる場合じゃなくなるだろうから。君の方には英斗を行かしておいたから、あいつと自転車で現場まで来て。じゃ

あ、時間ないから切るね」

「はあ？！ちよ、ちよっと待って！言ってる意味がわかんないんだけど！」

一方的にかかってきて、一方的に電話を切られた樹々は、困惑と焦燥が入り混じった顔をして、再び礼二郎に掛けなおしたが、すでに話し中だった。

「もう！何なのよいったい！」

わけのわからない事がたて続けに起きていることに、樹々は地団太を踏んだ。

午後五時二十二分。

黒のワゴン車は、石丸町から花岡町へ入り、町の中心からはかなり外れている山道を走っていた。

ろくに舗装されていない山道を、車体を揺らしながら進むワゴン車。

しばらく走ると、今は使われていないホテルの廃墟についた。

天子神岳ホテル 通称化け岳ホテル。

花岡町の数少ない心霊スポットの一つであり、12階建てという大きさも相まって、花岡町からならどこからでも見えるという廃墟である。

昭和四十六年に廃業し、以後ずっとそのままになっているため老

朽化が激しく、近所の子供が遊ばないように入れそうな入口にはすべて南京錠が掛けられている。

廃墟の傍らにワゴン車を止めた茶髪の運転手　向垣内十字はサイドブレーキをかけて運転席から降りると、ポケットから鍵束を取り出した。

その間にワゴン車の後部座席のドアが開き、だぼついた服装に野球帽をかぶった男とだぼついた服装に鼻ピアスの男とだぼついた服装にスキンヘッドの男が目隠しされ猿轡をかまされ両手を拘束された佐緒林を引っ張って出てきた。

移動中、さんざん抵抗した佐緒林だったが、疲れたのか今はぐったりしている。

「十字さん。こいつすでにへばっちゃってるんですけど、大丈夫っすかね？」

スキンヘッドが正面玄関にかけられた南京錠をいじっている十字に呼びかけた。

「疲れていようが氣い失つていようが、俺らのやることは変わねーんだから関係ねーよ」どこか抑揚のないその言葉に、佐緒林は言いようのない恐怖が現実味を帯びてきて震え上がった。

「んー！んー！」

疲れた身体にその無理やり力を入れて逃げようとするが、目隠しされて前後不覚気味な上、猿轡のせいでろくに悲鳴も上げられない。

心ではすでに過保護気味の両親に、浮気中かもしれない彼氏に、お化け好きの友人に、助けてと叫んできたが、もちろんそんな漫画みたいな都合のいいことが起こるとは佐緒林も思っていなかった。

まさに絶望と言えた。

「お、ようやく自分がどうなるか自覚してきたみたいだな」

野球帽が力なくもがく佐緒林の頭を驚掴みながらニヤついた。

今からこのヤ二臭い男達に弄られるのかと足が震えた。

「おいしい。きりきり歩けよ」

鼻ピアスが右腕を引っ張る。

アイマスクに涙を吸われながら、佐緒林は鼻ピアスから香ってくる汗臭い体臭に吐き気を催しそうになる。

と、その時。

ぱりら〜、ぱらぱぱぱ〜、ぱりらら〜、ぱりらら〜。でげで〜ん、でげでげでげで〜ん……。

必殺仕事人のテーマの着メロが鳴り、一瞬場の空気が止まった。必殺の曲が流れる中、南京錠を開けた十字がおもむろにポケットから携帯電話を取り出した。

「…………。十字さん、その着メロまだ変えてなかったんっすか？」ホテルの廃墟で必殺の曲は、ほの暗いこの時間帯と相まって何かと心臓に来るようで、スキンヘッドが嫌そうな顔でそう零した。

十字はそんなスキンヘッドの小言を何事もなかったかのようにスルーして携帯電話に出た。

「…………。誰だ？」

十字がそう言うのと、電話の相手はクスクスとこちらを小馬鹿にしたような声で笑い出した。

「誰だ、てめえは」

癪に障る笑い方に、十字の声に不機嫌さが増した。

その様子に、佐緒林をホテル内に運ぼうとしていた三人の不良も動きを止めて何事かと顔を見合わせた。

『スクスク…………。あ、間違えた。クスクス、クスクス』

可愛らしい女の子の声なのだがどこか生気を感じさせない。そんな声に、十字は神経を逆なでするような感覚になって語気をさらに荒げた。

「おい。喧嘩売ってんのか？」

『わたし、メリーさん』

「メリーだあ？てめえなめてんのか？」

『わたし、メリーさん』

「てめえ、俺が向垣内だつて知つててやってんのか？ああ？」

『わたし、メリーさん』

「うるせーんだよ！」

十字は携帯電話に向かつて吠えたと、荒々しく電話を切った。

「誰だつたんすか？」

スキンヘッドが尋ねると、十字は忌々しげに、

「知らん。メリーとかなんとかほざいていたが、全く意味が分からん」

と答えた。

「メリー？……ああ。それあれつしょ？メリーさんの電話つてやつ」
野球帽がケラケラしながら答えた。

「何だそれ？」

鼻ピアスが聞くと、野球帽はなおもケラケラしながら答えた。

「知らない？都市伝説つてやつよ。その電話を受けた人間は死ぬつて」

「うわ、じゃあ十字さん危ないじゃないっすかあ？やつぱ心霊スポットのホテルなんて選ぶんじゃないっすか？」

野球帽の説明に、スキンヘッドが悪乗りしてそう言った。

「……………。くだらん」

十字がはき捨てるように言った瞬間。

だつだ、だだ、だつだ、だだ、だつだ、だだ、だつだ、だだ

古畑任三郎の曲の着メロが流れて、再び場の空気が固まった。

しばらく硬直していたが、あわててスキンヘッドがズボンのポケットをまさぐった。

「お前、ホント古畑好きだよな」

どこか呆れたように鼻ピアスが言う中、スキンヘッドは携帯電話をズボンの右ポケットから取り出すと、通話ボタンを押した。

「も、もしもし」

『わたし、メリーさん』

「うお!？」

可愛いがどこか抑揚の感じられない女の子の声が聞こえ、スキンヘッドは思わず景帝電話を耳から離れた。

そして離れた携帯電話から、

『わたし、メリーさん』

『わたし、メリーさん』

『わたし、メリーさん』

と録音テープをループさせたような声が、聞こえてきた。

「早く切れ!」

十字に怒鳴られて、スキンヘッドは我に返るとあわてて電話を切った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………んー、んー」

周囲は懐中電灯がないと足元すらおぼつかない暗さになり、冷え込みが激しくなっているにも関わらず、不良たちは嫌な汗をかき始めている。

誰の表情もみな凝り固まっており、漂っている不気味な雰囲気を払拭できずにいる。

「んー!んー!」

まあ、約一名現状をいまいち把握していない女子高生がいるが。

「なあ……これ、本格的にやばいんじゃないっすか？」

野球帽が不安そうに十字を見た。

「うっせ！ただのイタ電に何ビビってんだ」

「でも……」

「いいから早く、中に連れてけ！」

完全に意気消沈したメンバーに十字は声を張り上げた。

だんっ、ぱーらーらー、だだんっ、ぱーらーらー、ぱらぱらぱー、
ぱらぱらぱー

まるで駄目押しのごとく鳴り出した西部警察のテーマの着メロに、
不良たちは一気に血の気が引いていた。

鳴り続ける西武警察に押されて、野球帽がワナワナしながら携帯
電話を取り出した。

しばし鳴っている携帯電話を凝視すると、

「お前出るよ！」

と真向かいにいた鼻ピアスに携帯電話を放った。

反射的に受け取ってしまった鼻ピアスは、

「やだよ！お前の携帯だろ！」

と言って投げ返す。

野球帽は再び自分の手元に戻ってきた携帯電話をブンブン振り回
しながら、

「十字さん！これ、どうしたらいいっすか！？」

と叫んだ。

どうもこのメンツでは位が高いらしい十字は、イラついた表情で、
「着信拒否すりゃいいだろ！早くそいつ連れて中に入るぞ！」

と怒鳴り返すと、先に一人で中へと入って行った。

「ど、どうする？」

鼻ピアスが他の二人に訊ねると、スキンヘッドは佐緒林から手を放した。

「お、俺は降りるぜ。何か悪戯にしては手が込み過ぎてる」
それ聞いて、野球帽も彼女から手を放した。

「俺もっ。こんな不気味な環境じゃ勃つもんも勃たねえ」

青い顔して言う野球帽に、鼻ピアスも頷くと、

「だな。十字さんには悪いけど……」

三人はお互いの結論に頷き合つと、佐緒林を放置して脱兎のごとく逃げ去った。

「おい！お前ら！いつまで待たせ」

先にホテルに入っていた十字が痺れを切らして戻つてくると、目隠しに猿轡をかまされて両手を縛られている佐緒林以外誰もいなかった。

「あ、あいつら！ビビッて逃げやがったのか？！」

悪態をついて連中の名前を呼ぶが、返事は返つてこなかった。
しょうがないので、十字は佐緒林を連れ込もうと彼女に手を伸ばした。

が、彼女に触れた瞬間、何か得体のしれない冷気が十字の体を逆なでし、思わず手を放すと身震いした。

「な、何だ？！」

明らかに冬の寒さといった季節的な物ではなかった冷気に、彼は動揺しながら彼女を凝視した。

目隠しをされているはずの佐緒林は、まるで見えているかのよう
に十字の方へ首を向け、縛られた両手で器用に、しかしゆっくりと
猿轡を外した。

「お　おい」

やっと彼女の様子がおかしいことに気付いた十字は、慄きながら彼女の行動を見ていることしかできなかった。

猿轡を外した佐緒林は、涎があごに垂れるのも構わずに口を三日月型に歪めると、

『わたし　　メリーさん。……今、あなたの目の前にいるの』

十字の悲鳴は、ホテルの廃墟に盛大に響いたのだった。

「説明してくれない？何だったの、あの状況は」
「……………はい」

午後八時。

あの後、英斗の自転車に乗って遅れてやってきた樹々が目にしたものは、精神が崩壊した十字を前に、呪いの人形メリーと屈んでハイツチをしている礼二郎、そして気絶して地に伏している佐緒林の姿だった。

「がーがー。ぴー」

完全に精神がイってしまっていた十字は、何も無い闇の虚空を見上げて、FAXの真似事をずっとしており、樹々は気味が悪いので見ないように心掛ける羽目にま で な っ た。

とりあえず、隣町から自転車に樹々の乗せ、二人乗りで全力疾走して疲労困憊な英斗と一緒に、佐緒林を家まで届けた一行は、現在は本拠地で皆休憩がてら礼二郎は樹々に説明を求められている状況になっていた。

ちなみに英斗は佐緒林を送り届けた後「俺：帰るわ」と言ってそくさと帰路についた。恐らくは現場に放置してきた頭のイカれた十字を見て関わない方がいいと判断したのだろう。

しかし、彼とは違って当事者でもあるはずの樹々は、途中から完全に置いてきぼりにされて虫の居所が悪かった。

「おい、メリー。一体何があつたの？」

リビングで対面する二人を尻目に、プリンを買って帰って来ていた玲子は、状況が掴めずにいた。

同じように一緒にプリンを買いに行っていた貞子も状況が分かっていないのが、早々に理解することを諦めたのか、キッチンで素知らぬ顔で冷凍の蕎麦を茹でている。

貞子が麺を茹でている工程を見ていたメリーは玲子に振り返ると「…………。たまにわたしたちが楽しそうにしている時に限って受話器が外れているから不思議には思ってたんですけどね」

まったく答えになってない返答を半眼でした。

「はあ？」

玲子はメリーの意味深な発言に余計に首をかけるのだった。

「都市伝説のさとるくん……………ねえ」

礼二郎は事の発端である悟と名乗る少年からの電話と、その少年が都伝俱樂部に入部したがっている件、そして今回の佐緒林拉致の現場にいなかったはずの礼二郎が、当事者であつた樹々より早く動けたのかを説明していった。

「そう、その悟君。君の役に立てば、大手を振つてこの俱樂部に入れるじゃないかって彼が目論んでね。それで彼が君の現状とその予測された未来を自身の能力で悟つて役立とうと思つたつてわけ」

「私が鉄屑通りで佐緒林と待ち合わせしてたのも悟つたつていうの？」

「うん。君らが浮気調査するつもりだったのも含めてね」

「……………そんなことまで…。あの黒のワゴン車がどこに行くかも？」

「うん。向垣内とかいう変態とその連れの電話番号まで綺麗に悟つてくれたよ。おかげでメリーちゃんが大活躍」

礼二郎がにつこり笑つてそう言うのを、樹々は半眼で腕を組みながら、

「……………。やり過ぎ」

と短く呟いた。

礼二郎は樹々にそう言われてもにこやかな顔を崩そうとはせず、
「まあ、彼は自業自得だよ。メリーちゃんの呪いを真正面から受けて死ななかつただけマシだよ」

「それはそうだけど、下手したら死んじやつてたかもしれないのよ？いくら呪いが法に裁かれないからって」

「何言つてるの？彼はメリーちゃんがいくら頑張つたつて死ぬことはなかつたさ」

えらく自信満々に礼二郎が言うので、樹々は訝しげに彼を見た。

「何で言い切れるのよ？」

「そりゃ、僕がいたからだよ」

「………………。あ」

合点がいったように樹々は膝を叩いた。

「あー、そっか。だからあなたも現場にいたわけね。……まあ呪いの人形とハイタッチしてたあたりはどう見ても抑制役じゃなくて共犯っぽかったけどね」

メリーの呪いはその呪力を包丁や鎌に具現化できる玲子と違って極めて弱い浸透系の呪殺能力である。

その効力は呪殺無効の体質である礼二郎が傍にいただけで大きく半減してしまうというのを樹々はようやく思い出した。

「なんだよ、悟とそんなことしてたのかよ。あたしも呼べよなあ」

キッチンで二人の話に聞き耳を立てていた玲子は、肩にメリーを乗せながら彼女の特等席であるソファに座りながらそう言った。

「口裂けさんも貞子さんも携帯電話持っていないから呼ぶに呼べなかったんだよ」

礼二郎がにこやかに言い、

「ちえっ」

拗ねたようにソップを向く玲子。

それをまあまあと慰めるメリーを尻目に、樹々は口を開いた。

「それで、そのさとりくんってのとは今話せるの？」

「ああ、うん。話せるよ」

礼二郎は頷くと、学ランのポケットから自分の携帯電話を取り出すと、アドレス帳から悟君と書かれた番号を呼び出し、

『もしもし？』

「あ、悟君？僕だけど」

『はい、お疲れさまでした。しかしうまくいきましたねえ』

「うん。君のおかげで傷つかずに済んだよ、彼女」

『それは何よりですね』

「うん。で、部長が話したがってるんだけど」

『わかりました。かわってください』

悟が緊張した声でそう言ったので、礼二郎は携帯電話を彼女に渡した。

樹々は携帯電話を受け取ると、

「もしもし？あなたが悟君？」

『は、はい。部長さんですか？』

「ええ。都伝倶楽部の部長、渦巻樹々です」

『ど、どうも、都市伝説のさとるくんです』

「今回は友達を助けてくれてありがとう。彼女の代わりにお礼を言うわ」

樹々は電話越しにも関わらず、頭を下げてそう言った。

『いえ……僕は悟っただけですから。実際に動いてくれたのは宮沢さんとメリーちゃんですし』

礼を言う樹々に、照れたように謙遜する悟。

「うん。それはそうかもしれないけど、ここまでスピーディーに行動を起こせたのはあなたが悟ってくれたからよ。おかげで無事に解決したわ」

『??……いえ。解決はまだしてませんよ?』

悟の言葉に、樹々は怪訝な顔をした。

「終わっていないっていったいどういう事？」

樹々の表情とその台詞に、話を聞かずに蕎麦を作っている貞子以外の三人の表情が、にわかに曇った。

『言葉通りの意味です。このままではまた数日中に同じようなことが起きます』

「は？　ちよっと、どういうことよ?!」

樹々にとって聞き捨てならないのも無理はない。それはつまり、また別の誰かに佐緒林は凌辱されるということだ。

悟はさっきまでとはうって変わってどこまでも冷静で抑揚のない声で、

『先ほどの一件は凌辱されそうになっていたところを防いだだけで、

そうなった原因には一切何もしていません」

「原因？」

『そうです、原因です。部長さんはおかしいと思わなかったんですか？なぜ、彼女が狙われたのか』

「え……………まさか、偶然じゃないって言うの？」

『そうです。そのまさかです。でなければ可愛いとは言え、あんな荷物満載な自転車女を好き好んで連れ去ると思いますか？』

「……………。確かに」

考えてみれば、違普遍はほとんど女の人など通りはしない屑鉄通りで、まるで待ち伏せたように男たちが現れたことに違和感があった。『あの連中は頼まれただけ。実際にそうしろと指示を出したのは別にいます。……………部長さんならわかりますよね？』

「……………」

悟にそう言われ、しばらく樹々は思案顔になった。

学校での人間関係は良好である彼女に恨みを持つ人間はまずいない。基本的にそりが合わない人間でもそれなりにつき合い方を心得ているため、滅多なことで相手に恨みや憎悪を持たれることなどそれこそ彼女にとっては皆無だ。

そんな彼女を恨む、憎悪する相手なんて……………。

「あ」

いた。

佐緒林の彼氏の浮気相手か！

これはあくまで推測だとして、もし浮気相手が彼女の彼氏である楽気のことを本気で好きだとしたら、そういう風に彼女を陥れ、自分が本命になろうとしたのではないだろうか。

なんともゲスな話だが、もとより男女間の恋愛というのは下手するとどこまでも醜くなるものだとは相場は決まっているし、なりより思井鐘姉妹の一件がそれを物語っている。

『どうやら分かったようです』

悟は樹々の思考を悟ってそう言った。

それを聞いて樹々は自分の考えに確信を持つと、

「ええ、分かったわ。ありがとう。入部の件は特に問題ないから。

今度ここの黒電話、わいわいトークができるように機種変更してあげる」

と告げた。

「あ、ありがとうございます！」

嬉しそうにお礼を言う悟に、こちらこそと言い返して電話を切った樹々は、電話の内容が気になっている礼二郎、玲子、メリーの顔を見直し、

「ゲスが一人、まだ残ってたみたいよ」

と酷く底冷えした声で言った。

「そうみたいだな。で、どーすんだよ？」

大よその事情を察した玲子が憤然としながら言った。

「わたしはもう今日呪力残ってないですからね、お二方のどちらかがお願いしますよ」

大よその事情を察したメリーは、玲子の膝に座るとお手上げのポーズをとった。

「口裂けさんはやめて下さいよ？あなたの呪力発動条件は今一つ使いづらいし、何より確実に相手死んじゃうし」

大よその事情を察した礼二郎が、立候補しようとしていた玲子を先取りして言った。

「ちえっ。何だよ、まだ何にも言っていないでしょ」

「その大きなマスク越しでも分かるような嬉々とした表情見たら、誰にだって何言おうとしているかすぐ分かりますよ」

「…………じゃあ、消去法で」

そう言いながら樹々はキッチンの方を見、それに釣られるように他の三人もキッチンに視線を向けた。

そこには、大よその事情を全く察していない貞子が、キッチンで

出来た蕎麦を立ち食い蕎麦のごとく啜っていた。

「……………」

「……………」

「……………」

しばらく蕎麦を啜っていた貞子だが、三者三様の視線がリビングから来ていることに気づくと、ビクリと肩を震わせて、

「…………… あげない…………… よ？」

と、蕎麦の入ったどんぶりを守りながら、とんちんかんことを言うのだった。

二月六日 午前一時。

兼坂楽気との楽しいデートを終えて自宅に帰ってきた茶髪の少女
百々天使は、すでに自宅の自室のベッドで淡いピンクのパジャ
マな恰好でゴロゴロしていた。

デートは申し分なく楽しかったが、ゴロゴロしながら携帯電話と
睨めっこしている天使の表情は優れなかった。

連絡が遅すぎる……………。

彼女が待っている連絡相手とは、元彼氏の間垣内十字であり、予定
通りなら日付が変わる前に連絡すると十字は言っていた。

「うまく行ったのかしら？…………… まさか未だにやりまくってる訳じ
やないわよね？」

楽氣の彼女　　仙人掌佐緒林が邪魔だった彼女は、十字に頼んで精神的に立ち直せないような傷を負わせてやろうと今回の拉致強姦を計画した。

連絡するのは二回。

拉致が成功した時に一回と終わってから一回。

拉致が成功したことは、デート中にメールが来たので分かっていたが、その後の連絡が一向に来ない。

もしかして失敗したのかしら？

あの変態な元彼は、今までこう言う事をしてきて捕まった事が無いことで有名だったはずなのに。

そう思いながら携帯電話をいじくっていると、だしぬけに携帯電話が鳴った。

「うおっ！」

全く以って女の子らしくない驚き方をした天使は、着信が十字であることが分かったと苛立たしい顔をして通話ボタンを押した。

「ちょっと！遅いじゃないのよ！何やってたわけ？！ちゃんと事は済ましたんでしょうね？！」

繋がったと同時に一気に捲くし立てた天使だったが、それに対して電話をしてきた十字は黙ったままだった。

「……。ちょっと話聞いてんの？！」

「……………」

返事がない。

「十字？……………何か言いなさいよ」

「……………」

再三話しかけても返事もしない十字に、天使はにわかに恐怖を感じた。

「ねえ、ちょっと……………お、脅かしてるつもり？馬鹿じゃないの？」

「……………」

「何か……言つてよ……ねえ」

何も言わない十字と電話が繋がったまま、天使は唐突にせり上がったきた恐怖に慄いた。

「……………」

「……………」

「ねえ！ふざけてんじゃないわよ！何か言いなさいよ！」

天使が怒鳴り声をあげると、電話口から十字の声が聞こえた。

『がーがー、ぴー』

「ひいあ！」

まるで抑揚のない感じで聞こえてきた十字の声に、天使は思わず持っていた携帯電話を放り投げた。

『がーがー、ぴー』

床に転がった携帯電話から、微かに十字の声が続く。

と、その時。

「天使？起きてるの？ここを開けなさい」

自室のドアの向こう側から、彼女の母親である天子の声が聞こえてきた。

「な、何だ……お母さんか」

その母親の声に、一瞬びくついたものの、母と言う存在に、恐怖と混乱に支配されかけていた天使の精神は急速に安定を取り戻した。ドキドキと激しく脈打っている心臓を抑えながら、床に落ちた携帯電話を拾い、通話を終了させた。

「天使？起きてるの？ここを開けなさい」

「だ　大丈夫。何でもないから。もう寝るから」

とドアの向こうに立っている母親に向って言った。

「天使？起きてるの？ここを開けなさい」

「だあかあら、もう寝るって言ってるでしょ？」

「天使？起きてるの？ここを開けなさい」

「……………お母さん？」

どうも様子がおかしいことに気づいた天使は、ぶり返してきた恐怖に思わずベッドの毛布を自分に引き寄せた。

「天使？起きてるの？ここを開けなさい」

まるでテープレコーダーでリピートをかけているかのごとく、同じトーンで同じセリフを言い続ける母親に、天使は涙目になりながら誰も見ていないにも関わらず、首を激しく横に振っていた。

「いや…………いや…」

「天使？起きているの？ここを開けなさい」

「いやあああああ！いやあああああ！」

「天使？起きてるの？……………ここ、開けるわよ？」

金縛りにでもあったかのように身体が動かせず、絶叫をあげる天使をさらに追い詰めるかのように、鍵をかけているはずのドアがゆっくりと開いて行った。

そして。

花岡町の住宅街に響いたはずの天使の絶叫は、誰にも聞かれることはなかった。

都伝倶楽部活動記録その陸「人の話はちゃんと聞くこと」(前書き)

第六話です。

都伝倶楽部活動記録その陸「人の話はちゃんと聞くこと」

私の声……。

誰か聞こえますか？

誰か、私の声を聞いてください。

誰か……。

誰か……。

私の声を……。

二月十日。午前十時三十分。

土曜日なのにも関わらず閑散とした商店街のちょうど中央に位置する本屋、伽藍堂の中では、開店から三十分も立ち読みを続けているはた迷惑な少年がいた。

銀縁眼鏡をかけた中肉中背のその少年　杉田公平は手にしていた『実録！怪談百夜』と書かれた本を閉じて元あった場所に戻すと、その横に置かれている『季節外れの怪談全集』を手に取った。

もともと彼は立ち読みを普段からするような人ではない。

いつもなら欲しいものを予め決めておいて、購入したらさっさと店を出てしまう人なのだ。

にも関わらず、購入する意思のない本を立ち読み続けているのは訳があった。

「やっぱりないな」

公平は、短く呟いた。

そんな、誰ともなく呟いた彼の耳に、

「はあ。やっぱりないの」

と落胆する女の声が聞こえた。

声がしたはずの空間には誰もいないのだが、彼は特に気にせず、

「うん。最近のホラー本にはアンタのことは一切掲載されてないね。やっぱ今時のホラーでは流行らないんだよ」

と続けた。

「あーあ、なんかそれものすごく寂しいなあ。一昔前は小学生たちの恐怖の代名詞だったのに、あたし」

「そうだな。オレも小学生の時は結構話題になってたしな。三階女子トイレの一番奥の個室はアンタが出るって」

「あー。そう言えばあたしアンタの通ってた小学校に居たこともあったわね」

「うん。でも結局さ、勇気ある女子たちによってその噂は払拭されてたよな。アンタがちゃんとやることやってりや忘れられることもなかったんだろうけど」

「棘のある説教はごもつともだけど、そもそもあの女子達、検証すべき個室を間違ってたのよ！あたしはその当時は奥から三番目の個室にいたのに！」

公平は、悔しそうな声の聞こえた誰もいない空間をチラリ見して、季節外れの『怪談全集』を元あった場所に戻すと、

「まあ、今後はもつと騒いでくれるような学校のトイレに住み直すことも検討に入れておいた方がいいかもな」
誰もいない空間に向かって呟いた。

「そうね！今回のことで知名度は地の底なんだってわかったし、返り咲くならやっぱり田舎より都会よね！」

開き直ったようなカラ元気を醸す声に、公平はバツが悪そうに頭を掻いた。

「何か：ごめんな。あんまり役に立てなくて」

「ううん、そんなことないよ。せっかくの金曜日から今日にかけて、こうしてあたしのわがまま付き合ってくれただけでも有り難かったし」

どこかはにかんだような雰囲気のある声に、公平は微笑むと、

「明日は槍でも降るのかと言わんばかりの素直さだな」

「うっさい！」

説明が遅れたが、今公平が話している姿の見えない人物は都市伝説の『トイレの花子さん』である。

最近是自己に会おうとする人が少なくなり、よもや存在を忘れ去られてしまっているのではと危惧した花子は、石丸町立小学校に住んでいた時に知り合った公平に、自分の知名度は今どれくらいなのかを調べてほしいと頼んだのだ。

昔から幽霊の声を聴くことが出来る公平は、突然そんなことを言われて戸惑いはしたものの、その申し出を快諾し、町内の本屋や学校の噂等を基準にして彼女の知名度を調べた。

その結果は惨憺を極めたが、花子は現状が分かったことで逆にそれがモチベーションに繋がったようで、鼻息荒く（と言っても公平には姿は見えないので想像だが）お礼を言うと言っている石丸町立中学校のB棟女子トイレへと帰って行った。

公平の耳は単に幽霊の声を聴けるだけでなく、原理は全く異なっているが、所謂ソナーに似た役割も持っている。

花子がいなくなったのを感じ取った公平は本屋伽藍堂から出ると、刺すような冷風が吹く外気に身を震わせながら着ていた水色のマフラーに顔を埋め、

「季節外れも甚だしいよなあ」

と言って持っていた携帯電話を開けた。

そこには同級生で悪友でもある小鳥遊雷太からのメールで『本

日の肝試しの予定』と書かれていた。

休日に学校に来ると妙にテンションが上がるのはなぜか？

あるいは誰もいない学校に来ると妙にテンションが上がるのはなぜか？

石丸町立高等学校の一年B組の誰もいない教室で、そんな益体もないことを考えていた俺　小鳥遊雷太は、先ほど同じクラスの杉田公平に送った肝試し参加の有無を問うたメールを待っていた。

窓際の女子の机の上で失礼にも胡坐をかいて座った俺は、窓の外でこの寒い中部活に勤しむ学生達を見ながら、「寒い中、よくやるよ」と独り言を呟いてみた。

俺と杉田はこの高校に入ってからからの付き合いなわけだが、実は俺は正直杉田のことをあまりよく思っていない。

特に鼻持ちならない奴でもないのだが、何を考えているのか分からない所があり、よくブツブツと独り言を呟いている。それも誰かと話しているかのような独り言で、よく傍にいたりする俺は時々不気味に感じる。

本来なら絶対に関わりたくないのだが、俺はそれでも奴に関わらないといけない理由があるのだ。

なぜなら、俺が好意を寄せている女子　四十川織女が杉田のことが好きだからだ。

四十川織女は今俺が胡坐を掻いている机の持主であり、長い黒髪に前髪がパツンとしていて実に美人な女子生徒だ。

その俺にとって天使とも言える女が、よりによって杉田にぞっこんなのだ。

このことに気づいた俺は、この高校に入学して一目で惚れた四十川との接点が欲しかったため、杉田と仲良くすることにした。

おかげでただ見ていた頃よりかは随分と仲が良くなった。

まあ、仲良くなったのはいいことだが、残念なのは仲良くなりすぎて、先週あたりから彼女の恋愛相談をちよくちよく受ける羽目になっていくことだ。

時たま俺の心をいい感じに抉ってくれる彼女の恋愛相談を『地雷原』と心の内で名付けているのは絶対にばれてはいけない俺の七つ秘密の一つだ。

俺は杉田のメールを待ちながら、四十川のことを考えているうちに何だかムラムラしてきたので、今座っている彼女の机に自分のナニを擦りつけてみることにした。

着ていた学校指定のジャージのズボンを膝まで下ろし、さあ、ケツがこの寒さで冷える前に終わらすぜ！と、勢い込んだところで

俺の携帯電話が鳴った。

「……………。よー。杉田あ。相変わらずメールで返してこないあたり物臭だなあ、お前」

『このくそ寒い時期に夏の風物詩な肝試しに誘うお前に言われたかないよ』

杉田は、こういうタイミングの悪さもピカイチだった。

「いいじゃん。お前どおおせ暇だろお」

『……………。そうでもなかったけどな、特に昨日は』

こう言う思わせぶりな発言も杉田の特徴だ。ここで何があったんだよ？なんて掘り下げようとしたところで奴は秘密主義者なのか、言葉を濁すばかりで核心に近いことは何も言わない。

まあ、それは俺に限らずよく一緒に行動している四十川に対してと同じなので、結果それを不満に思う四十川が俺を『地雷原』へと連れていくという悪循環が生まれるわけだ。

まあ、秘密を持っているのはお互い様なので、そこはグツと我慢している。

「今日の夕方は暇なんだろう？いいから付き合えよお」

『正直この時期にやるもんじゃないだろ？他のことじゃだめなのか？』

「お前石丸町に住んでんだから分かんたろう？娯楽施設が皆無でパチンコ屋と飲み屋ばかりなこの町に、俺ら健全な高校生が程よくスリルを味わえるような場所って言ったら、心霊スポットに他なんだろう？」

『健全な高校生は、このクソ寒い時期に好き好んで肝試しなんぞしないと思うが』

時折正論を吐く杉田はどういうわけか、心霊スポットや怪談話に対するノリが悪い。

が、俺より断然詳しかったりするため、嫌っているわけではないらしい。そこら辺の矛盾が更なる謎を呼んでいる。

「つつてもな。もう四十川も誘ってて『杉田君も一緒ならいいよ』って言うてるんだ」

自分で言いながら台詞の内容に少しイラッとした俺は、まだまだ精神的な修行が足らんのだろう。

とにかく、こいつを来させないと四十川はすぐに帰ってしまう恐れがある。

それではまるで意味がないので、杉田には何しても

『お前さあ、いい加減四十川さんに付きまとうのやめたら？そのうちこんでもない目に遭っても知らんぞ』

来てもらわなければならぬのだが、こいつはどうしてもこゝも俺の逆鱗を撫でるような発言ばかりをするのか。

「うるせーな。俺の勝手だろうが」

『うん。そりゃ恋愛は自由だけどさ。お前の恋愛観って恋愛ってよゝり変態って感じだからなあ』

「てめえ、はったおされたいのかよ！俺は変態は変態でも、変態紳士なんだからな！」

『…………。クマ吉の時点でもうアウトだって』（ギャグマンガ日

和 名探偵うさみちゃん参照)

こういう偉そうなことを言うのも、奴の気に食わない所の一つだ。

「…で？行くのか行かないのか？」

『行くよ。四十川さんと変態紳士を二人きりにして間違っても起きたらことだからな』

何だその言い草は！と喉まで出かかった俺だが、ここでゴネられても困るので、

「よし！決まりだな。集合場所は鉄屑通りの十字路。時間は午後六時ジャスト。行先は黒い家だからな！」

と手早く決定事項を杉田に言った。

黒い家。

石丸町の外れにある、なんてことはない普通の空き家だ。

雷太の話では、何年か前は核家族が住んでいたようだが、その両親が交通事故で死んで、子供たちが親戚に引き取られた後はそのまま放置されているらしい。

心霊スポットになっているあたり、やはり出るものは出るらしく、ここ最近で特に目撃が多いのは平屋の窓からこちらを見つめる女の幽霊だ。

具体的に被害を被ったり、悪さをされたりといったことはないらしいが、周辺の住民は怖がってその家の前をなるべく通らないようにしている。

午後六時。

乗ってきた自転車を道路の脇に置いた公平、雷太、織女の三人は黒い家の門前で思わず唾を飲み込んだ。

「け、結構雰囲気あるんだな」

この辺りは電灯がほとんどないため、黒い家は、日が沈んでほの暗い闇が辺りを包む中、その闇に滲むようにひっそりと立っていた。

最初こそ待ち合わせ場所にちゃんとして来てくれた織女に狂喜していた雷太がったが、黒い家の不気味な存在感にやや尻ごみしている様子だった。

織女も最初は「私肝試しとか行ったことないから、ちょっと楽しみかも」などと遠足気分ですらに話しかけていたものの、黒い家を見た途端にその口数は減った。

そして公平も表面上は平素を装っていたものの、かなりビビッていた。

「ね、ねえ。これって不法侵入になったりしないの？」

仄暗い雰囲気には怯えながら、織女は着ているクリーム色のコートのポケットに突っ込んで今更なことを言った。

もちろん不法侵入なることは間違いないが、そんなことを気にするようでは世の心霊スポット探検は成り立たない。

「なるだろうな」

公平が音楽を聴いていたイヤフォンを外しながら簡潔に答えた。

普段は幽霊の声を聞かないように耳栓やイヤフォン等を常備している彼。

イヤフォンを外した瞬間に、聞こえてくるかもしれない声に内心緊張を走らせたが、声は聞こえなかった。

だが、ソナーのような役割をも持つ耳が、明らかに中に何かいることを伝えてきていた。

トイレの花子さんのように、全部が全部こちらに対してフレンドリーというわけではないという事を公平はその身をもって知っているため、その存在に対して自身の警戒レベルを一気に引き上げた。

「多分そうなるだろうけど、今更やめるだなんて無しだぜ、四十川」

織女の不法侵入発言に雷太は難色を示した。

「ええ〜。だつてだつて、これちよつと怖すぎじゃん。何なのよアレ、家なのか暗闇なのかすら判然としないじゃない。ねえ、杉田君〜、ここやめてエルダンであつたらうよ〜。超寒いし」

織女は雷太に膨れ面を見せると、公平に満面の笑みを向けた。

公平は着ているショートのダッフルコートから使い捨てカイロを取り出し、

「まあ、確かに寒いけどオレこれあるし、いいわ。四十川さん一人で行つてきなよ」

と取り付く島もない感じで言った。

公平の態度にムツとする織女と、別の意味でムツとする雷太。

そんな二人の内情などお構いなしに公平は、

「で、どうするの？」

と乗り気ゼロの台詞を口にした。

「行くに決まつてんだろ。行くよな？四十川」

「えええ？……う、うん、まあ、杉田君が行くなら」

予想以上に怖そうな場所だったことは計算外だっただろうが、実はこの二人にとって肝試しは口実以外の何物でもない事を公平は察していた。

雷太は織女に惚れており、今回の肝試しは完全に彼女目当て。つまりとところ彼女に来てもらうために公平を呼んだのであるうことは今朝の電話からも容易に想像がつく。

織女はクラスの仲のいい友達に自分は公平のことが気になっていることを吹聴しているが、正直割と一緒にいながらそういう恋愛的な雰囲気になったことは今のところない。

公平は、織女がこうやって自分に好意があるかのように絡んでくるのは、もつと別の理由があると考えていた。

その考えに対して特にこれといった根拠はないし、被害妄想なのかもしれないが、露骨な言い寄り方に誠意を感じないのも事実だった。

何か、面倒くさいなあ。

黒い家の玄関へと歩きながら、公平は自身の二進も三進もいかない友好関係に渋い顔でそう思った。

「おお、そうだ、忘れるところだった」

玄関前まで来たところで、雷太が声を上げた。

「何？」

ややわざとらしい雷太の声に、織女は嫌そうに返した。

そんな織女の態度に心が折れそうになりながらも、雷太は背負っていたリユックからごつい懐中電灯を取り出した。

「そういうの持ってきてたんならもつと早く出してよ」

「ごめんごめん」

小言を言う織女に、平謝りをしながら雷太は懐中電灯の電源を入れた。

電気がついた懐中電灯は、黒い家の引き戸のすりガラスに貼りついていて人影を目視させるには十分な明りだった。

「ひっ！！」

「のわ！？」

「！！」

三人がその存在に衝撃を受けて硬直している中、すりガラスに貼りついていた女らしき人影はすううっと奥の方へ音もなく引いて行った。

「な、何……今の」

織女は震えながら何とか声を出した。

「お、俺が知るかよっ」

雷太は懐中電灯を玄関に向けたまま恐怖で身動きが出来ないようだった。

声すら出ずに驚いたまま硬直している公平は、幽霊を探知するソーの役割を持つ耳を持つていながら、この近距離まで来ていることに全く気付かなかったことに戦慄していた。

そして、どうやら相手は、今まで自分が相手にしてきた幽霊とは何かが違うようだと確信した。

「おい。ヤバいぞ、これは」

引き戸を注視したまま、公平は呟いた。

その呟きが聞こえた織女は、公平のダッフルコートの裾を強く掴みながら、

「や、やつぱり帰ろうよ」

を半泣きで訴えた。

「そ、そうだな！やつぱここはそういう危ない場所だってこ織女の訴えに、雷太は恐怖を払拭すべく元気よく答えようとして声が途切れた。

途中で言葉が途切れた雷太を怪訝そうに公平と織女が見ると、懐中電灯を持ったままガタガタと震えていた。

「た、小鳥遊…君？」

「…………。お、おい」

様子のおかしい雷太に、強張った表情のまま問いかける二人。

「あ、ああのさあ。俺達って…………友達…………だよなっ」

雷太は必死に訴えるような眼差しでそう言った。

その表情と台詞に嫌な予感しか感じない公平と織女ではあったが、それはそうだが。それがどうした？」

「ええ、まあ」

と答えた。

雷太は二人の返事を聞いて安心三割、不安七割の顔で歪んだ笑みを貼りつけながら、

「あ、あああ足を誰かに、掴まれて…いる気が、すす、するんだ」と足元を指差した。

「……………」

「……………」

押し黙る公平と織女。

そして二人は震えている雷太の足元を見ようとした瞬間、引き戸が物凄い勢いで開いた。

ビクリと肩を震わして公平と織女は思わず引き戸の方を向くと、すべて閉じられていて隙間などないはずなのに、生暖かい風が二人をざわりと撫でた。

「うわああああ!!」

その風が過ぎたあたりで雷太が逃げようと踵を返した瞬間、彼は何も見えない力に引きずり込まれるように、引き戸の内側へと引つ張り込まれた。

「杉田!四十川!助け」

雷太が最後まで言葉を発する前に、引き戸は彼を引きずり込んだ瞬間に激しい音をたてて閉まった。

あまりにも急な展開に、公平は恐怖を感じながらも若干混乱していた。

別にどこぞの祀られているものに不敬を働いたとか、洋画のホラーにありがちな『そういう目に遭うのは自業自得』的な行動もしていないのに展開が急過ぎる。

「だいたい、肝試し以前にまだ中にすら入っていないのだ　まあ、約一名強制的に今中にいるが。」

普段幽霊と世間話なんぞをしていたりする公平は、世の中に怪奇が存在することは漠然と理解している。が、今まで初っ端からフライング気味な怪奇現象を見せつけられるのは初めてのことだった。そこではたと気づいた。

それなりに耐性がある自分は、怪奇現象が目の前で起こってもある程度は何とかなってきただが、そういった経験が皆無であろう織女はそうもいくまい。

「四十川さん。俺はどうにか小鳥遊を連れ戻してみるからアンタは帰れ」

いくら変態紳士とは言え、呪い殺される道理はないと公平は思い、織女には帰宅を促すべく言葉をかけながら振り返った。

そこにはすでに脱兎のごとく自転車に跨って逃げ帰っている織女の姿があつた。

「……………えええ？…ちょ、何それー」

友達をあつさり見捨てて猛然と立ち漕ぎで逃げていく織女に、公平は思わず脱力しながら呻いた。

が、それが油断を招いた。

公平が再び引き戸に向き直った時、彼の耳は何かを感知したと同時に見えない力によって彼自身も雷太の二の舞を踏んだのだった。

上も下も分らない真っ暗な空間。

公平はいつの間にかそんな場所で、意識が朦朧とする中で立っていた。

「何だ？……ここ」

ぼんやりと霞む頭を振りながら彼は周囲を見渡したが、ただ黒い空間が続いているだけだった。

自分はさつき得体のしれない何かに家の中へと引き摺り込まれた。だとしたら、ここは黒い家の中？

「はは、そんな馬鹿な」

公平が辿り着いた自身の結論を一笑していると、

「私の声が聞こえますか？」

声がした。

「誰だ？！」

声のした方へ振り向くと、そこには眼鏡をかけた顔の渋い中年の男と、その男と同一年くらいの色白で不健康そうな女が立っていた。

「私の声が聞こえますか？」

女が再び同じことを言った。

「聞こえているよ。ってかアンタら誰だよ？」

女は公平の言葉に嬉しそうに微笑んで中年男に、

「ほら、待ってて正解だったじゃない。あなたが言ったようにあっちこっちに私たちの声が聞こえる人探してたらあと十年は時間の口スだったわ」

とふんぞり返って言った。

不健康そうな外見とは裏腹に、根は結構偉そうな性格のようだ。

「何を言ってる。あんときは俺が探しに行つて来るからお前はさつさと成仏しろと言つたはずだぞ。だいたい何だ、十年もロスって。俺はこの近辺から捜し始めるつもりだったんだからこうやって来るの待つてた方がむしろロスだったろうが」

「だってそれだとあなたと離れることになるから嫌って言つたじゃない。何回言わせんのよ」

「どうせ成仏先で会ふんだから、大した時間離れるわけでもないだろうが」

「それでも嫌なものは嫌なの！それに大ちゃんは絶対聞こえる人探すふりして、女湯覗に決まつてるもん」

「中学生のガキか、俺は！？」

「なりは大人だけど、大ちゃんはいくつになつてもスケベじゃない」「うるさいよ！だいたい女の裸ならお前で十分間に合つてるだろうが！」

「……………」

「……………」

「……………」

「も、もう！大ちゃんたら、いけずなんだからあ」

公平はもう我慢の限界だった。

「そんな台詞でキyunとなつてんじゃねーよ、おばさん！さつきからこつち無視してイチャつかないでくんないかな？！全くだい年して高校生同士のバカップルみたいなイチャつき方しやがって！……………っ！かアンタら誰なんだよ？！」

吠える公平に、中年男と女は驚いたように目を見開いたが、

「変わった子ねえ、この状況下で突っ込んできたわよ、この子」

「まあ、俺達の声が聞こえるってことは他の連中の声も聞こえるってことだからな、それなりに修羅場をくぐつてんだろ？から、肝が据わってんだろ」

「うちの息子とちよつと似てるかもねえ」

「人に理解されないことで苦労するあたりは確かに似てるかもな」

「そうね、若いのに大変よねえ」

「俺は親戚の子供か！　つか、アンタら誰なんだよ！？」

この突然現れた謎の中年男女に、最初こそ慄いた公平だったが、二人がこちらを無視して会話を続けていくので、自分の状況そっちのけで突っ込む羽目になった。

「ああ、済まないな。見苦しいところを思いっきり見せてしまつて」
「全くです」

「うふふふ、ごめんなさいねえ」

本当に申し訳なさそうに謝る男と、まったく反省の色が見えない女。公平はここまでのやり取りにどつと疲れを感じたが、現状は何も解決していないに等しいので、とにかく分からない事をこの二人に片っ端から聞いていくことにした。

「それで、聞きたいんだけど、ここは一体どこで、アンタ達はいつたい何者なの？」

「君は自分がどこに入つたかも自覚していないのか？」

「いや、だって黒い家の前で何かに引き摺りこまれて　あ。ここつて……黒い家の中？」

「あらあ、察しがいいわね」

何故か嬉しそうに女が笑い、それを男が窘めた。

その様子を見ながら、この夫婦らしき男女はどことなく狸と狐に似ているな、と公平は思った。

「それでアンタ達は？」

「私は宮沢和子よ。こっちは旦那の大ちゃん」

「大介だ。俺たちは昔ここに住んでた夫婦でね」

それを聞いて、公平はここに来る前に雷太から聞いた話を思い出した。

この家に住んでいた夫婦……ということとは。

「昔交通事故でなくなつた……」

「へえ。本当に察しがいいのね。まあ、この家の前で事故つちゃうなんて間抜けな話なんだけどね」

女 和子は感心したように言った。

「察しがいいいわけではなくて、友達の受け売りだよ。事故現場が家の前ってのは知らなかった」

公平が言い返すと、男は「ああ……」と頷き、

「……友達って最初に引つ張った子のことか」と言った。

「あ、そうだ。小鳥遊は？今どうなってる？」

「あの生理的にちよつと難がありそうな子なら、早々に返したわよ？ 私達の声、聞こえなかったし。むしろ聞こえてほしくなかったし。今頃は玄関先で意識を取り戻して慌てて逃げてると思うわよ」

言葉の端々に雷太に対する刺を感じた公平だったが、無事ならそれでいいと思い、思考を切り替えた。

「どうも話を聞いてると、俺みたいな聴き耳を探してた ということより待ってたみたいだけど？」

「そうなのよねえ。大ちゃんったら直接探すとか言っちゃうから止めるのに苦労したわ。ここで待ってた方が楽だし。あなたみたいな特殊な人間と私達って呼び合う性質があるからいつかこうなるって分かってたし」

絶対前者の理由が大部分を占めているだろうな、と公平は眉を寄せて思った。

「君の言う通り、俺達は君を待っていた。で、実は君に伝言を頼まれて欲しいことがあるんだよ」

大介が言った。

「伝言？」

「うちのぼーとした息子にね、伝えて欲しいことがあるの」

うふふ、と目を細めて笑う和子に、公平は愛くるしい狐を想像した。

「まあ、伝える分には構わないけど、俺アンタらの息子なんて知らないぜ？」

ここから出るためにも、出まかせでもいいから快く引き受けた方がいいだろうと思い、公平はまんざらでもない返事をした。

「大丈夫よお。あなた学校はどこ？」

「石高の一年だけど」

「あら、同じ学校じゃない！今年ってことは、息子の後輩かあ」

「え？マジ？」

「大マジだ。宮沢礼二郎。それが息子の名前だ。これだけ分かれば探すのは楽だろう？伝言、頼まれてくれないか」

大介の話に頷きかけた公平だったが、ここまでの話を聞いていくつか疑問点があった。

「ちよつと聞くけどさ。さっき自分の息子は俺に似て人に理解されないことで苦労するって言ったよな？ってことはアンタらの息子も俺のような能力を持ってるんじゃないのか？」

「持っている。怪奇現象を察知したり、幽霊を視ることができる」

「俺よりスゲーじゃん。だったら何でその息子に直接伝えない？声は聞こえなくても見えるんなら伝える方法はいくらでもあるだろう？」

公平の意見は確かに正論だった。

そもそも、公平のような能力者を探すつもりがあったという事は、この地に縛られているわけでもない。おまけに公平とは違って、伝えるべき相手は幽霊を直接見ることができるのだ。

何でこの夫婦は息子に伝えるべきことがあるにも拘らず、こんなところで全く関係のない自分を間に挟んでまで間接的に、しかもまどろっこしい手順を踏んでやっているのか全く理解できなかった。

「……やっぱり察がいいじゃない」

どこか寂しそうに、和子は呟いた。

大介もどこか思いつめたように目線を逸らしている。

「納得いく答えなら、ちゃんと息子さんに伝えてやる。だから真意を話せよ」

死んでいるとはいえ、仮にも目上の人間にこういう啖呵を切ったりするから自分は友達が少ないのだろうなあ、と二人の中年男女を見ながら頭の片隅で腕を組みながら公平は思った。

「迷っているんだ」

大介が、苦虫を噛み潰したような顔で言った。

「迷ってる？」

公平が鸚鵡返しに問うと、和子が、

「私たちがあの子に伝えようとしていたのは、自身の過去の詮索をやめてほしいということだったの」と引き継いだ。

「過去の……詮索？」

「うちの息子は約一年前に失踪した姉　私の娘ね　その姉の失踪時にあの子は罪を犯しているの」

「…………。どんな罪だよ？」

公平が訊くと、自傷気味に和子は口を歪めた。

「それを知ってほしくないっていう伝言を頼もって人にその内容を言う馬鹿がいると思うの？」

「…………それもそうか」

公平が頷くと、和子は続けた。

「その罪を知ったとき、息子はその罪を克服するかもしれないけど、その事実精神を病むかもしれない。もしかしたら自殺するかもしれない。そんな結果になったら困るから、過去を知ろうとしないで欲しいと伝えて欲しいの」

「だったら尚更アンタらが直接伝えるべき内容だろう？」

「無理なのよ」

「何で？」

「だって」

和子はややうつむき加減だった頭をバツと上げて、

「殺したくなっちゃうんだもん」

壮絶な笑みを公平に向けた。

あまりの迫力に、反射的に身構えてしまった。

「あー、すまん。うちの奴はちよつと表現がこう、アレでな」

大介がそういつて「どうどう、落ち着いて」と和子の背中をさすっている。

その様子を見ながら、いやいやいや、そういう問題じゃないだろう！？と公平は内心で突っ込みを入れた。

「じ、実の息子を殺したくなるって、頭大丈夫かよ？」

と言いながら、悪寒からくる冷や汗を止めるのに必死だった。

「彼女の言い方には若干の語弊があるんだが、分かってほしいのは、俺たちがすでに現世の人間ではないということなんだ」

大介の言い分に、公平は怪訝な顔をした。

「現世にいるのは息子だけ。息子を現世に一人残すくらいなら、いつそ殺してこちら側に来てもらいたい。そういう幽霊ならではな発想が、俺たちの思考を侵食しているんだ」

大介はひどく悲しそうな顔を見て、それはアンタらのエゴじゃないのか？と思っただ、口には出せなかった。

結局、どちらにしたってここから出るためには彼らの要求を飲まざる負えないことは公平も分かっていた。

「…………。分かった。「自分の過去を詮索するな」これを宮沢礼二郎先輩、に伝えればいいんだな」

しょうがないが受けるしかない。そんな感じで彼は夫婦に言った。

息子を自分たちのいる世界へ引き込みたいという気持ちと、過去に囚われずに現世で元氣よく生きていてほしいという二つの相反する気持ちを持った面倒くさい夫婦は、公平のその返事を聞いてひどく安心したかのような顔で、

「ありがとう」

と呟いたのだった。

午後九時。

夕飯もろくに食べないまま肝試しに言ったせいで酷くお腹が空いていた公平は、近所のラーメン屋さんで遅い夕食を食べていた。

その後。

公平は黒い空間の中ですぐに意識を失い、気が付いたら黒い家の玄関前で気絶していた。

元の世界に帰れたことは嬉しかったが、素直に喜べない自分があった。

ラーメンを食べる手を止めて、彼はかぶりを振った。

面倒くさいことを考えるのは明日に回そう。

俺は余計なことを考えずに夫婦の言ったことを宮沢礼二郎先輩に伝えればいい。ただそれだけのことだ。

公平はそう考えると、無事に帰れたらしい雷太と、無事に逃げ帰れたらしい織女からの着信が凄いことになっていることなど露知らず、大盛りのラーメンを食べることに集中力を発揮するのだった。

都伝倶楽部活動記録その漆「ストーカーのしつこさは尋常ではない」(前書き)

ようやく七話目(泣)

都伝倶楽部活動記録その漆「ストーカーのしつこさは尋常ではない」

二月十一日 日曜日。

休日の朝は寝坊と決めている不知火英斗は、この日も普段の休日通り十一時半にベッドから起きてきた。

不知火家はその昔、この地域ではそれなりに名の知れた富豪であり、土地を沢山持っていた。

英斗の父である英心はその土地を使って金儲けすることに長けており、不知火家は不自由のない生活を送っている。

今、住んでいる二階建てのこの家も英心が奮発して建てたもので、大きいマイホームを持てて英心は満足げだったが、母の餡緒美は掃除がすごく大変といつも愚痴をこぼしている。

「えーくん、ちょっと寝過ぎなんじゃないの？」

キッチンですでに昼御飯の支度をしていた餡緒美が、リビングにパジャマで入ってきた英斗に眉を寄せた。

「んー」

いまだ寝ぼけている英斗は生返事をする、テーブルに置いてあったテレビのリモコンを取り、チャンネルを忙しく切り替え始めた。これといつて面白そうな番組がないと判断した英斗は、適当にニュース番組をつけると、リビングの椅子に腰かけた。

「あれ？親父は？」

いつもなら今日は安息日だとか言ってテレビの前のソファでゴロゴロしているはずの英心が、今日はまた姿を見せていなかった。

「裏の倉庫じゃない？何か、物が溢れてるからいろいろと処分したんですって」

キッチンからの餡緒美の声に「ふーん」と感心なさそうに答えた英斗だったが、次の瞬間、

「 倉庫！？」

椅子から跳ねるように立ち上がった。

そんな英斗を見て、餡緒美はキッチンから驚いたように肩を竦めながら首を傾げた。

「な、何よー。急に大きな声出して」

餡緒美の言葉もそこそこに聞き流した英斗はパジャマのまま慌てて家を飛び出した。

この家の裏には、元はガレージだったのを改装して物置に使っている倉庫があり、そこは家族には内緒で英斗が第二のプライベートルームとして使用している。つまり、

「親父！」

倉庫を荒々しく開けた英斗が目にしたのは、軍手つけて頭に手ぬぐいを巻いている作業中の中年男、英心が英斗のコレクション「のカレー盛りと黄色いシャワー」を手にとって啞然としていた。

そう、この倉庫は英斗の自慰用のスペースだったのである。

おおお、お、遅かったあああ！！

父の手に持たれた卑猥な表紙の本を確認して、英斗は完全なる敗北を知った。

「え、英斗……。お前………」

信じられないといった顔つきで、英心は青い顔をしている英斗を見やった。

「あ、あは……はは……」

乾いた笑いを、頬を引きつらせながらする英斗に、

「貴様あああ！！何だこれはあああ！！？」

英心の雷が落ちたのだった。

その後、倉庫内にため込んだ成人向けの本やDVD　百四十四冊と七十二本がすべて英心の手で焼却　葬られた。

本来思春期な英斗がこういうものに興味を持つのを、父親は割と寛容な目で見るものだが、流石に内容が悪すぎたせいもあり、「俺はお前を変態に育てた覚えはないぞ！」との捨て台詞を残して、英心は倉庫内をきれいに片づけて家へと上がっていった。

英心が家上がった後も、あまりの落胆に肩を落として、綺麗に片付いた倉庫をぼんやりと見つめていた英斗。

しばらくそうしていると、隅の段ボールの上に置かれた古ぼけた大学ノートが目についた。

「?.....」

片づけ損ねたのか? と思いながらそのノートを手に取ると、大学ノートの表紙には『不知火英心日記』とマジックで丁寧に書かれていた。

「ほ.....ほほう」

その表紙を読んだ英斗は、まるで悪魔のような意地悪い笑みを顔に貼りつかせた。

「親父、面倒くさがりのくせにこんなの書いてたのかよ」

さっきまで失意のどん底にいたとは思えない回復ぶりを見せた英斗は、いやらしい笑みを浮かべた。

さぞ、この日記には俺に知られたくない赤裸々なことがまるでポエムのように書かれているに違いない。

そんなことを胸中で呟きながら、英心は好奇心と自身のコレクションを燃やされた腹いせに、日記を開いてみることにした。

『　月××日　　晴れ。

英心君が中学の同窓会に行く。私はそれをずっと前から知ってたけど知らないふりをして同窓会に参加した。私に話しかけてくる人は

皆無だったけど、英心君の顔を間近で見れて幸せだ』

『 月××日 晴れ、時々雨。』

英心君が彼女のためにカレーを作った。でもあの忌々しい女はそのカレーにダメだしばかりしてて英心君がかわいそうだった。私はいいと思うけどな、カレーに納豆っていうのも』

『 月××日 曇り。』

英心君、飲み屋で飲みすぎて帰り途中の路上でフラフラになってる。かわいい。吐いたゲロを見て今日のおかずにしようかすごく悩んだ』

『 月××日 雨。』

もう我慢できない、あの女。一日中いちゃつきやがって、ぶっ殺してやる。英心君の心には私だけがいればいいのよ。あんたなんか所詮肉便器なんだから！』

な、何だこれは？

最初は英心が赤裸々なことを綴っている日記ではと思い、嬉々としていた英斗だったが、読み進めるうちにこれは英心がつけていた日記ではない事が分かり、そしてこの日記があるということか、

「親父のストーリーカーの観察日記か！？これ！？」

なのである。

英斗は震えながら、まずあの親父にストーリーカーがいたという事実には驚愕し、そしてそのストーリーカーの日記が自宅の倉庫で発見されたことに軽く混乱した。

「何でストーリーカーの観察日記が倉庫にあるんだ？」

思った疑問を口に出して言いながら、首を傾げた。

見るところ、このノートの書き出しの日付は英心の大学時代からなようで、第三者の女の視点で自分の父のことが生々しく綴られてい

る。

英斗は青い顔をしたままパラパラとノートを捲つてみたが、一人暮らしをしていた父のゴミ袋まで漁っているといったような書き込みに気持ち悪くなり、すぐにノートを閉じた。

そしてやはり疑問に思うのが何故ストーカーの日記がここにあるのか、だった。

しばらく悩んだ英斗は結局気味が悪いので、英心に聞いてみることにした。

倉庫を出て家に戻ると、英心はリビングで牛乳を飲みながら餡緒美と話していた。

「もう終わったの？」

「まあ、一応な」

「どしたの？ 妙に青い顔して」

「いや何、ちよつとシヨツキングなことがあつてな」

「？？ ん？ 何か燃やした？ 焦げ臭いけど」

「ああ。ちよつとな」

「なあ、親父」

英斗が声をかけると、平素でこちらを見やる餡緒美と憤然とした態度でこちらを見やる英心がいた。

何やらまだ怒っているようだが、すでに英斗はそのことについてはどうでもよくなっていた。

こういった切り替えの早さは友人の礼二郎の受け売りである。

「何だ？」

「やだ、ちよつと何怒ってるのよ？」

英心の態度に驚く餡緒美を尻目に、英斗は「ちよつと話があるんだけど」と言つて自分の部屋がある二階を指差した。

「おう」

英心が頷くと、英斗は先に二階へと上がった。

「ちよつとなんなの？」

餡緒美が英心と二階に上がっている英斗を交互に見ながら訝しげに

聞いた。

「母さんは心配しなくていい」

英心はそう言うと、英斗の部屋へ向かった。

先に部屋に入った英斗は、少しして部屋にやってきた英心を見ると、神妙な面持ちでノートを英心の前に差し出そうとした。

「……？　！？」

彼はノートを差し出そうとした状態のまま、恐怖に凍りついた。

「どうした？」

英心が訝しげに聞いてくる中、英斗の視線はその英心の後ろに注がれていた。

女？！

彼が疑問符付きで驚いているのは、何分英心の後ろに立っているこの世ならざるものの存在が大き過ぎたためだ。

身体的特徴……というよりは着ている赤色の服装で女と推測は出来たが全体が把握できないその大きさは実にふざけていて、腹から上が天井を突き抜けている。

全身が透けて見えるそれに驚愕しながらも、叫び声をあげずに性別なんぞを確認しているあたり、自分もどこかの誰かさんに影響されてか、神経が図太くなったようだ。

英心は青い顔で自分の後ろを凝視している英斗にさらに眉を寄せると、

「どうした？　言っとくがあれはお前の為なんだからな。あんな糞で変態な世界観は知らんでいい」

「……。え、いや……」

自分の父が見当はずれな事を言っている合間にもその透けたでかい女らしきものは、ゆらゆらと揺れてどうにも落ち着かないようで、

それを見ている英斗も心が落ち着かなかった。

……そしてどことなく、英心に寄り添っているように見えなくもない。

「確かに、男だからそういうのに興味が湧くのはしょうがないかもしれないが、お前のはどう見たって行き過ぎた。恥を知れ、恥を」

どうにも挙動不審な英斗そっちのけでまた同じ説教をし始めた英心。その英心の後ろで半透明のでかい女は屈みこむように足を曲げていった。

天井から突き出ていた腹から上がゆっくりと下がってきて、胸、首、頭とその姿が露になっていき、

「ひっ」

その露になった顔が英心の真横ににゅいいと突き出るようにして薄らと笑いながら英斗を鋭く睨めつけた。

「ああああああ！」

目の前にいるつばの広い帽子をかぶった髪の長いこの女は間違いない自分を呪っている。

直観的にそう感じた英斗は、叫び声をあげるとベッドに飛び込んで布団を頭からかぶったのだった。

「こんにちはー」

「こん………にち………は」

時刻は午後一時。

昼食を口裂け女の加島玲子と一緒に本拠地で食べてきた紺のパーカ

ーにジーンズ姿の宮沢礼二郎と白いワンピースの呪いの塊な貞子は、先日不知火英斗から借りていた『本当にあった怖い話？ さっちゃん編』のDVDを返しに来ていた。

「はい」

中から英斗の母親である餡緒美の声が聞こえ、すぐにドアは開いた。
「あらあ、礼二郎君じゃない。久しぶりね」

数えるほどしか邪魔したことがないが、こちらの顔をちゃんと覚えてくれていたようで、餡緒美は朗らかに笑いながらそう言った。
が、その横に猫背気味で立っている、長い髪を前に垂らしているせいで全く顔が見えない怪しさ全開の女を見て絶句した。

「え……えっと？」

困惑気味に引き攣った笑顔をしながら餡緒美は礼二郎に説明を求める視線を送った。

「あー、うちの姉の礼奈です」

その視線に気づいた礼二郎は、あらかじめ用意しておいた台詞を口にした。

「お、お姉さんね……ずいぶん…その…ねえ？」

随分の後に不気味な人ねと続けかけて失礼と気付いた餡緒美は、言葉を濁しながら愛想笑いをした。

「それで、英斗君は御在宅ですか？出来ればちょっと話がしたいんですけど」

その愛想笑いに気づかないふりをして礼二郎が訊くと、餡緒美は頷いた。

「え、ええ。いるけど、今ちょっと変なのよね、あの子」

「はあ。変ですか」

もともと少し変だろうにと礼二郎は思ったが、さすがにそれを本人の母親の前で言う勇氣はなかった。

「お昼も食べないですつと部屋に閉じこもってんのよね。お父さんとひと悶着あったみたいだから仕方ないのかもしれないけどねえ」
どうやら不知火家は、ちょっとした修羅場中のようなのである。

面倒だし出直そうかと礼二郎が思い始めたとき、携帯電話が鳴った。

「……………あ？」

着信者はこの家の二階にいるはずの英斗からだった。

礼二郎は訝しげにしながら通話ボタンを押した。

『れいじろおお！おおお、お、俺！とり憑かれたああ！』

何の前触れもなく切羽詰った英斗の声が礼二郎の耳朵を直撃した。

「ちよつ……。何なの、いきなり」

「その電話、えーくん？」

音漏れした声から、餡緒美は自分の息子がかけてきていることに気づき、

「ちよつと、えーくん！二階にいるくせに何でケータイから掛けるのよ！失礼でしょ！」

二階に向って怒鳴った。

そんな餡緒美を尻目に、礼二郎はさつきから「とり憑かれた」を連発して言っている英斗に、ただならぬものを感じたので、

「すみません、ちよつと上らしてもらってもいいですか？」

と、肩を怒らせている餡緒美に申し出た。

「え？ああ、全然構わないわよ。ゆっくりしていったいいから話しかけられてスツと怒りを引つ込めた餡緒美の了承を得た礼二郎は、先ほどから不気味なだけで空気になるようになっていた貞子と一緒に上がることとなった。

二階を上がり、英斗の部屋のドアを開けると、そこには男部屋らしく散らかって雑多としている空間と、ベッドの上で毛布を頭から被って大福のように丸まっている英斗がいた。

「何やってんの？」

毛布にくるまったまま尋常ではない怯えを見せている英斗に、俄かに警戒心をあげながら礼二郎は尋ねた。

「こえーから毛布にくるまってんだよ！お前視えるだろう！？こう！……なんて言うか、でけえー女がよ！」

「でかい女？」

礼二郎は怪訝な表情で聞き返すと、辺りを見回した。

が、でかい女の幽霊なぞいやしなかった。

「いないけど？」

「そんなわけないだろうが！俺見ちゃったんだから！」

「いや、でも……」

礼二郎は改めて周りを見渡すが、彼が言うような幽霊はここにはいない。

礼二郎は後ろでキョロキョロしている貞子に視線を向けると、視線に気づいた貞子は首を横に振った。

「貞子さんも視えてないって言ってるけど？」

「そ、そんな馬鹿な！」

英斗は霊感体質である礼二郎と、実際のお化けそのものである貞子にいないと言われてうろたえると、毛布から少しだけ顔を出して部屋を見回した。

「……………！！」

英斗の視線は礼二郎のやや後ろで止まった。

「？……………どうしたの？」

「やっぱいるじゃねーか！！」

顔色真っ青にして、英斗は再び勢いよく毛布にくるまってしまった。

礼二郎も慌てて後を振り向いたがそこにはないもあらず、ただ散らかっていた。

貞子も同様なようで、英斗が見えたと言っている方向を見て首を傾げている。

「おいおいおい、ちょっと待ってくれよ。礼二郎にも呪いの塊にすらも見えないって俺ってまさかイカレたのか？……いやいやいやッ！そんなわけねーよ、だって都伝倶楽部のメンバー……って俺別に倶楽部に入ってたつもりないけども、そのメンバーの中じゃ俺一番まともじゃん。パンピーじゃん。常識人じゃん。そんな俺がどうして礼二郎にすら見えんものを見ちゃってるんだよ！？こんな能力開花したって嬉しくも何ともねーんだよ！怖いだけじゃん。意味ないじゃん！どうせならモテモテになる能力とか、金が楽に手に入る能力とか……！こう俺にとってもっと利益があるような……」

ブツブツと毛布の中から聞こえる愚痴に、
「最低だなー、君は」

どうせ手に入るなら能力よりもお金が増える財布が欲しいとか思ってた礼二郎が、自分の事を棚に上げて言った。

「と、とにかくだ！お前呪いを無効化できるんだろ？！なんとか俺にとり憑いてるその女何とかならねーのかよ！？」

「そうは言ってもねえ。僕はDVD返しに來ただけだし？この後もちよつと用事あるんだよね」

「何だとっ？！薄情者めが！友が困ってるのに見捨てる気か！頼む！なんとかしてくれ！」

「なんとかかって言ってもねえ」

礼二郎は幽霊は見えるし呪いが一切効かないが、だからと言って退魔等の技に長けているわけではない。

「こういうのが詳しいのはナルトさんでしょ？そっちに頼りなよ」

「あいつの俄か知識でーにかなんのかよ？！事は一刻を争うんだぞ！」

「いや、そうは言ってもさ」

礼二郎が嫌そうに言い返そうとした時、貞子が横から礼二郎の着ているパーカーの袖を引っ張った。

「ん、何？」

「……これ……幽霊……じゃ……ない……か……も……」

「え」

「！？」

貞子の途切れ途切れの台詞に、礼二郎は眉を寄せて、毛布に包まっている英斗はビクリと身体を震わせた。

「……あれ」

貞子が呟きながら、ベッドの脇を指差した。

「あ」

指を差された方向を凝視した礼二郎は、小さく言葉を漏らした。

「何?! 何だよ!?! お前らも見えるようになったのか?!」

毛布に包まれているため二人のやり取りが分からない英斗が騒ぐ中、礼二郎は貞子に示されたベッド脇に無造作に落ちていた大学ノートをしやがみ込んで食い入るように見つめた。

「不知火英心日記? ……何だこれ？」

「あ! てめつ、何勝手に読んでんだよ?!」

礼二郎が父のストーリーカーノートに気づいたのを知った英斗は、毛布の中から抗議した。

「いや中身は読んでないし触ってないから。でも君さ、こんな危ないもんどこで見つけてきたのさ？」

「危ないもの？」

訝しげに聞く英斗に、礼二郎は時間割でも訊ねるような軽い感じで、「うん。これうつすら呪い帯びてるよ」

と言った。

「……?! 何だと!」

「……多分……これ……呪具……の……類……じゃ……ない……かな？」

礼二郎の横から覗き込みながら、貞子が言った。

「呪具? ……あー、なるほど。貞子さんのビデオテープみたいなものか」

貞子の言葉を聞いて、礼二郎は納得したように頷いた。

「うん……中を読んで……だりした……その……読む……だ人を呪……
うように……設定され……てるん……だと思……う」

顎に手を当てながら思案顔でそう言った貞子に、英斗は毛布の中で頭を抱えた。

「俺……中身……読んじやつてるよおお、だからか！？だから得体のしれんでかい女を見る羽目になったのか！」

「だな。おそらく僕や貞子さんに見えないのは、その呪いが徹底的に条件を満たした人間にだけ影響するように出来てるからだろうなナルトさん辺りが面白がりそんな話だよな」

「うん……宮沢……君……また……面倒……な……ことに……のに巻き込まれ……たのね……とか……言い……そう」

「ははは。違うだね」

可笑しそうに笑う礼二郎と、厭らしげにクツクツと笑う貞子に、

「お前らふざけてる場合かよ！つかどーやってその呪い解くのか一緒に考えてくれよ！」

と、英斗は憤慨した。

「そんなの簡単だよ。その呪具を破棄しちやえばいいんだよ」

「へ？」

あまりにもあつさに礼二郎が言うので、英斗はやや拍子抜けしたように間抜けな声を毛布の中で漏らした。

「そ、そんなんでいいの？」

「うん」

「なーんだ！そんなに簡単なのかよ！よかったあ、何か面倒な儀式とかしなきゃいけないかと思っただじゃん」

理解した後、一転して陽気な声を出した英斗は「じゃあ、お願いします」と言ってさらに毛布の中に蹲った。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………。え？」

「何やってんだよ、礼二郎。早くそれ処分してくれよ」

「え？僕がやるの？」

「当たり前だろ、他に誰がいんだよ」

「いやいやいやいやいやいや。さも当然みたいに言わないでよ。君が勝手に呪われたんだろ。君が自分でやれよ」

「やだよ、俺呪われてる当事者だよ？そんな俺が元凶のノートに触れられるわけないだろ！何かあったらどう責任とってくれんだよ？！」

「知るかよ！」

「な！？　こんのつ、ド薄情がつ。お前どうせ呪われたって死なないだろ！それくらいやれよ！俺は命がかかってんだぞ！」

「どういう経緯でこのノートに入れたか知らないけど、どうせ自業自得なんだろ！誰がやるか！」

「　　ちよ、おま、それが呪いで苦しむ者に対する態度か？！」

「でかい女が見えるだけでピンピンしてんじゃん。そう言うのはちやんと命の危機に遭ってから言えよ！」

「普段から幽霊見えてるお前は慣れてんだだろうが！そういうのに慣れていない俺のハートは繊細に出来てんだよ！」

「威張れることかよ！貞子さんは平気のくせに、どんだけチキンハートなんだよ！」

「俺はチキンじゃねー！」

「真昼間から呪いにビビってる奴がチキンじゃなくて何だって言うんだよ！」

「ああ？！何だとテメエ、もういっぺん言ってみ」

バリバリッ！！

礼二郎と英斗の口論がヒートアップしそうになっている最中、何かを強引に破る音が割って入ってきた。

「……………」

「……………」

礼二郎と英斗は音のした方へ顔を向けると、瞳孔の開いた目で二人を睨みつけながら、呪具である大学ノートを素手で真つ二つにしてる貞子が立っていた。

「いい……加減……にして……」

怒気の籠った表情でそう言った貞子に、二人は固まったまま何度も頷くのだった。

「ありがとな。助かったよ」

「お礼なら貞子さんに言つて」

玄関先で『本当にあつた怖い話？ 神隠し編』を英斗から受け取りながら、礼二郎は言った。

「そうだな。ありがと、貞子さん」

「……どう……いたし……まして……」

英斗が素直に貞子に向かってお礼を言うと、貞子はまんざらでもなさそうに顔を背けた。

「結局何だったの？あのノート」

「俺にも分かん」

英斗はおそらくあのでかい女はストーカーの霊だと思っていたが、礼二郎にいちいち説明することでもないので、適当にはぐらかした。さすがにプライベート過ぎるといふのもあったが。

「……彼女……は……狂お……しい……ほど……に……」

「え？」

「ストーカー……を……恨ん……で……た」

唐突に貞子がそうつぶやいた。

「貞子さん？」

横にいた礼二郎だけ辛うじて聞き取れたものの、何の事だかさっぱり分からなかった。

「あら、もう帰るの？」

礼二郎が貞子の発言に怪訝そうにしていると、リビングの方から餡緒美がやってきた。

「はい。もう用事は済んだので。お邪魔しました」

礼二郎が餡緒美に向かって挨拶をすると、貞子が不意に餡緒美に近づいた。

「え、ちょ、何？」

前髪のせいで顔の表情が見えない貞子に不気味に近づかれて、餡緒美は本能的に恐怖を感じて二歩ほど下がった。

「ちよつと貞子さん、何やってんの」

突然の奇行に、礼二郎は慌てて止めに入るが、貞子は特に気にする様子もなく餡緒美を指差して、

「

」

「え？」

「またも辛うじて礼二郎は聞き取ることに成功したが、その内容はやはりよく分からないものだった。」

「ちよつと、うちの母親ビビらせないでくんない？」

「英斗は階段脇まで後ずさつたところで、そんなことを言っていた。鮎緒美の表情が硬直している中、礼二郎は英斗の方を見やると、

「君、どんだけチキンなんだよ」

嘆息しながら呆れたのだった。

「ところでさ、貞子さん」

「……何？」

「英斗のお母さんに向かって『ストーカー』がどうのとか呟いてたけど、あれなんなの？」

「あの…人が…が…ストーカー…だった…の」

「はあ？」

「いまいち要領を得ない貞子の言葉に首を傾げる礼二郎だったが、こういうことは割としょっちゅうあるので、わざわざ深く追求するこ

ともないと思い、話題を反らすことにした。

「で、材料を買うのはいいけどさ、作れるの？」

礼二郎の問いに、貞子はポケットから『バレンタイン特集』と書かれたチラシを取り出しながら、

「……頑張る」

と拳を握りしめた。

都伝倶楽部活動記録その漆「ストーカーのしつこさは尋常ではない」(後書き)

読んで頂き、ありがとうございますm(_____)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9513u/>

りんぐ2～都伝倶楽部～

2011年11月23日10時01分発行